CA1
EA947
B71
#23 Mar. 1979
DOCS

国交50周年記念特集

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030005 4

カナダ

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTÉRIEURES
OTTAWA
MAY 4 1979
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

60984 81800

1979年3月
No.23

Bulletin Canada

発行　カナダ大使館

日加国交50周年に寄せて

駐日大使 ブルース・ランキン

歴史的観点からすれば、外交関係五十年というのは大して長くない。しかし、わずか半世紀の間にカナダと日本の関係がこれまでに発展したのは、やはり記念するに値する。

カナダ政府が一九二九年にハーバート・マーラー卿を日本に派遣して、カナダにとって三番目の在外公館を東京に開設したのは、当時の二国間関係の重要性というよりは、日本の急速な経済発展と、それに基く両国間の貿易伸長の可能性、さらに欧米中心であったカナダ外交をアジア太平洋に拡大するという政府の決意を反映するものであった。

カナダと日本の関係は、ほとんどカナダが建国された一八六七年にまでさかのぼる。ご承知のように、カナダでは一昨年、日系移民百年祭が催された。この百年余に、両国の関係はわずかの移民と通商を基礎にした狭いものから徐々に拡大し、今日では経済、通商、政治、文化と広い範囲に及んでいる。

ランキン大使

マーラー卿は、対日関係の前途に大きな希望を抱いていたが、もし生きていたら、その希望がどれだけ達成されたか、驚嘆の念に打たれるだろう。現在、両国間の貿易額は往復で五十億ドルを超える（一九七八年は推定五十三億ドル）。日本は、カナダにとって米国に次ぐ第二の貿易相手国である。過去十五年ないし二十年間に両国間の貿易額は急速に伸びたが、これは一九六〇年代から一九七〇年代にかけての日本の高度経済成長と、日本の産業が必要とする資源をカナダが豊富にもっていたためにほかならない。

しかし二国間貿易の発展は、カナダの工業能力を反映していない。また工業の分野における日本の資本および技術参加も、二つの先進工業国の経済関係において期待されるほどの進展を見なかった。カナダの対日貿易は急増したが、それは主に農産物やその他の原料品に限られていた。カナダでは、こうした輸出をこれまで歓迎してきた。しかし最近では、一次産品が今後とも両国間貿易の中心を占めるとしても、完成品および半加工品の輸出品目を増やし、国内における一次産品の加工度を上げ、技術と資本の交流を拡大し、さらに企業間の協力を緊密化する努力を増大すべきだという認識が高まっている。

さらに、日加関係を一層深め、また永続化させるには、通商だけでなく、あらゆる問題に関して政府および民間レベルの情報交換を促進すべきだ、ということが過去四、五年の間に明らかとなった。そこで「日加経済協力大綱」が締結され（一九七六年）、「合同経済委員会」や「日加経済協力会議」が設立される一方で、両国政府は政治および文化の領域においても交流促進の必要性を認識してきた。政策立案に関する協議や、首相や閣僚の度重なる訪問により、両国関係における政治的側面は大きく拡大した。また一九七六年には文化協定が結ばれ、その成果を評価する第一回協議が先日東京で開かれたばかりである。

現在、年間十二万五千人もの日本人がカナダを訪れ、姉妹都市の数も十三組となって市民や学生の交流を促している。いくつかの日本の大学では、学生交流やカナダ研究が進んでいる。さらに日本経済新聞社と時事通信社がトロントに支局を開設した結果、日本におけるカナダ関係の記事は大幅に増えた。

振り返ってみると、日加関係は大きく第二次大戦前と戦後という二つの時期にわけられる。一九四五年以前の関係は、ほぼわずかの貿易と移民に限られていた。戦後は、カナダが日本に第一次産品を供給し、日本から工業製品を買うという形で、両国間の貿易が飛躍的に伸びた。今、私たちは第三の時代を迎えようとしている。先に述べたように、カナダは対日貿易品の加工度を高め、工業分野における技術と資本の日本参加を求めている。この新しい関係を作り上げていくのが、これからの課題である。

現在進行中の多国間貿易交渉の結果、日加双方の経済はおそらく構造的変化を余儀なくされるだろう。価格や供給に関する長期的取り決めや市場の自由化促進などについても、改められるに違いない。

しかし、日加関係のいくつかの側面に変化が生じても、カナダ第二の貿易相手国としての日本の立場や、世界的な経済大国としての日本の重要性からして、日本は今後ともカナダの外交政策や対外関係に大きな地位を占めるであろう。

もくじ

日加国交50周年に寄せて----駐日大使ブルース・ランキン------2
ハーバート・マーラー卿と在日公使館の開設----E・H・ライス------4
日加国交元年、1929（昭4）年のできごと----10
日加国交50年の変遷----14
日加関係の回顧と展望----馬場伸也------18
日加貿易・躍進の百年----25
国交50年と日加協会の歩み----近藤晋一------32
日加関係における日系カナダ人の役割----トヨ・タカタ------35
日本からエスキモーへの贈物----ジェームズ・ヒューストン------39
アジアの安定を支える日・米・加----マーク・ゲイン------43
逸材を輩出したカナダ学校----48
日本のカナダ研究—その現状と課題----ジェラルド・ライト------49
カナダ研究の邦語文献----大原祐子------50
日加関係年表----51
トピックス----52

✿私とカナダ✿
最長老ホッケーチームのカナダ遠征——松井一夫——17
深まる日加交流の展望——橋田忠明——20
生きている新渡戸博士——福田常雄——22
私の最初の外国生活——光明照子——24
日加関係への提言——岩崎　力——26
次なる日加関係を想う——槇田久生——29
カナダにおける戦前の日本人社会——宮崎孝一郎——36
初めての横断旅行——杉田房子——40

✿私と日本✿
皇后陛下の英語レッスン——チャペル姉妹——45
少年時代の想い出——ハワード・ノルマン——46

今年の主な行事・予定

四月十七日　カナダ水産物展（サンシャイン・シティ内カナダ・トレード・センターで、二十日まで）。

四月二十三日　カナダ軍艦が親善訪問（五月十九日まで、佐世保、横浜などへ寄港）

五月一日　静岡県清水市市立公民館でエスキモー版画展（六日まで）。

五月三日　トロントのCNタワーで日加国交五〇周年行事（六月三日まで）。

五月十日　トロントで第二回日加経済人会議（十二日まで）。

五月二十二日　カナダ電子機器展（カナダ・トレード・センター、二十六日まで）。

五月　オンタリオ州から貿易・観光促進使節団が来日。

六月　カナダ建物・建築用具展（カナダ・トレード・センター）。

六月　サスカチュワン州から貿易・産業促進使節団が来日。

八月　日本カナダ学会主催の「日加会議」（三十一日から九月二日まで東京八王子の大学セミナー・ハウス、三日は朝日新聞社講堂）。テーマは「日本・カナダ関係の展開」。参加申込みおよび問合せは、東京都小平市津田町一四九一　津田塾大学国際関係学科内日加会議事務局へ。

九月　カナダからパントマイム劇団「ビヨンド・ザ・ワーズ」が来日公演（問合わせ先・東京都渋谷区神宮前六—一九—三　日本児童演劇協会）。

十一月九日　ブリティッシュ・コロンビア大学で東南アジアに関する学術会議（十一日まで。連絡先はProf. Geoffrey Hainsworth, Institute of Asian Research, University of British Columbia, Vancouver, Canada. V6T 1W5）

ハーバート・マーラー卿と在日公使館の開設

E・H・ライス

筆者のE・H・ライス博士は、駐日カナダ大使館での任務を終えて昨年帰国し、現在は首都オタワで、カナダ政府外務省本庁の日本担当官の職にある。この論稿を書くにあたって、博士はカナダ外務省の記録資料、マッケンジー・キング首相およびベネット首相の日記や公文書を参考資料に使用した。

カナダ政府が、日本との完全な外交関係を樹立する、と発表したのは、一九二八年一月二十六日のことである。カナダ政府にとって、これは大胆な決定であり、発表を聞いた国民は大いに驚いた。

もともと通商関係については、一八八六年以降、一団の貿易担当官が事に当たってきたが、国際外交の桧舞台で独立した国として行動することに関しては、カナダはまだまだ若い国であった。そこで暫くの間、外交政策全般に関する情報や第三国との関係については、イギリスの外交機関に依存した。ロンドン（一八八〇年）とパリ（一八八二年）には、早くから外交事務所に準ずる機関が設置されていたが、独立国として成熟の度合を深めたのは、一九一四年から一八年の第一次世界大戦においてカナダが連合国軍として目ざましい働きをしてからのことであった。一九二六年にロンドンで開かれた英帝国会議では、自治領諸国が国際的に独自性を有し、あらゆる意味で〝母国〟すなわち大英帝国と同等であることを承認した。このようにして英帝国会議は、諸外国との直接的交渉を樹立しようとするカナダの努力を公認したのである。

だが同会議の宣言にもかかわらず〝大英帝国〟の利益のためには、傘下の諸国が共通の外交政策をとる必要があるという意見も強かった。共通の外交政策が達成されるには、自治領はロンドンと緊密な歩調をとり、少しでも不一致を思わせるようなことは絶対に避けなければならない。このような意見からすれば、カナダやオーストラリア、南アフリカなどが別個の外交団を立てることは、疑いもなく不適当となる。

一九二七年、時のマッケンジー・キング内閣は、日本およびフランスとの外交関係樹立に関して、イギリス当局と協議を開始した。ロンドン側はこれについて何らの異議もはさまなかった。そこでキング首相（当時外相も兼ねていた）は、一九二八年初頭に、関係諸政府がすべてカナダの提唱に承認を与えたと発表するに至った。

これに対し、国内に反対の声が上がった。保守党は、英帝国の統一を危うくするこの動きを激しく非難した。キング首相自身は、形の上では英帝国に大きな敬意を払っていた。それでも実際問題として、ロンドンが英帝国の一体性を当然視し、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどで十分な国内討議もされないまま、これらの国を英国の対外政策に追随させることがあまりにも多すぎる、というのが彼の見解であった。英帝国の力を弱めるつもりは全くなかったが、各国のコンセンサスに基づく政策決定のあり方こそ帝国自身の利益になるのだ、とキング首相は考えた。この点からばかりでなく、カナダにとって関心のある事の大部分は外国との二国間問題であること、また、これらの問題に対処するにはカナダの外交官が直接相手国と交渉するのが最善であるのだとするキング首相の意見に対して、反論することは難しかった。

とにかく保守党は激しく反対の論陣を張ったが、公式にイギリス当局の支持を得られず、その声も急速に衰えざるを得

キーンリーサイド代理公使が着任当時、公使館事務所兼公邸として借りていた永井邸。

なかった。

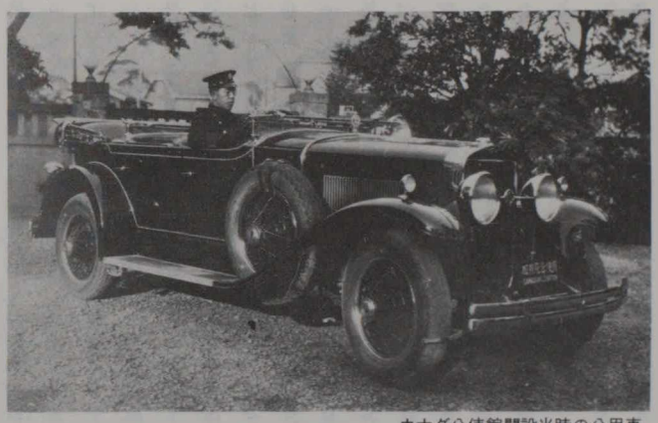
重要化した日本の地位

一九二八年当時、日加間に直接的外交関係を樹立することは、多くの点で全く意義のあることであった。両国間の貿易総額は四千六百万ドルに迫り、日本はカナダにとってアメリカ、イギリスに次ぐ第三の輸出相手国になった。一方日本にとっても、カナダは第六番目に重要な取引先となった（ただしカナダからの輸入額三千万ドルは日本の輸入総額のわずかに三・〇三％にすぎなかったが）。日本からカナダへの移民も、東京にカナダの外交事務所がなかったため長いこと不便な思いをしてきたが、公使館が設置されれば、移民を希望する人々の扱いもスムーズに行く……。

信任状捧呈の日に、左から、カークウッド２等書記官、キーンリーサイド１等書記官、マーラー公使、ラングリー商務官。

国際的な観点から見ると、一九二〇年代の日本が世界の大国といわぬまでも、アジアおよび太平洋地域の一大強国であることは明らかだった。キング首相は、日本の意見が国際問題の分野でますます強い力をもつことを予想し、将来、戦争と平和に関する大問題はロンドン、パリ、ワシントンそして東京で決定されるだろうと断言した。「これら四大国の関心を、カナダにとって重要な問題に向けさせる」には、四大国のいずれとも外交関係を結んでおくのが賢明である、と彼は考えたのだった。さまざまな国との外交関係の樹立は、若い国カナダの成熟過程における重要な一歩でもあった。海外のカナダ公使館は「カナダが人的にも物的にも他の域内諸国に劣らない優秀な外交活動を展開する能力を有すること」を、世界に向かって証明することになると、キング首相は書いている。

東京に公使館を開設という発表がなされるや、初代公使を誰にすべきかについて、早速首相に進言する者が多数現われた。キング首相はなかなか断を下さなかったが、結局、モントリオール出身の実業家ジョージ・スティブンズ（一八六六～一九四二）が適任だと考えるに至った。スティブンズという人物は、第一次大戦中に国家に大いに貢献をなし、戦後も活躍した人物だが、諸外国語に堪能な点もあって、フランスが主導した一九二三年～一九三五年の「ＳＡＡＲ委員会」にイギリス推薦の委員として大いにその外交的手腕を発揮していた。難しい仏独の対立的要求を非常に手際よく調停したので、議長（一九二四～一九二六）に選ばれたくらいだ。ところが、キング首相が実際にスティブンズに駐日初代公使就任を依頼すると、国外での任務がこれ以上長びくことにスティブンズ夫人が強く反対し、スティブンズはしぶしぶながらキング首相の申し出を断らざるを得なかった。



カナダ公使館開設当時の公用車。

マーラー、公使赴任を快諾

次に首相が考えたのは、かつての政治上の同志ハーバート・マーラー（一八七六～一九四〇）であった。モントリオールで名声の高い「Ｗ・Ｍ、Ｄ・Ｅ、Ｈ・Ｍマーラー法律事務所」の共同経営者であったマーラーは、一九二一年にモントリオールの選挙区から下院議員に選出されていた。キング首相は、一九二五年に彼を無任所大臣として内閣に迎え入れた。入閣して間もなく、その年に行われた総選挙でマーラーは落選してしまったが、議員の地位を離れてからも相変わらず政治的野心を持ち続け、キング首相がケベック州の政治戦略を考える時、よくマーラーに意見を求めた。

首相はマーラーを、少々ユーモアに欠けるきらいはあるが、粘り強く、聡明で、誠実な人物だとして、高く評価していた。初代公使のポストをスティブンズがしぶしぶ断ったとき、首相はそれをマーラーに依頼した。一九二九年一月一日のことである。政治的野心を犠牲にしないためにもマーラーは断るのではないかというキング首相の予想に反して、マーラーは非常な熱意をもってこれを受諾した。キング首相は大変喜び、日記にマーラーのことを「立派な公使になるだろう。東洋で最初のカナダ公使館を担う人物としてはまさにうってつけだ」と記している。マーラーが公使の任務に熱意を抱いたことは明らかだが、他方で自己の政治的野心を捨てたわけではなかった。彼は、もし自分が望んだときには次期総選挙に立候補して差支えないとの約束を、キング首相から取りつけていたのだった。

キング首相が驚いたことには、マーラーは公使としての給料を貰わずともよいと申し出た。このことはマーラーの熱意と裕福さを物語るものであったが、同時にカナダの外交活動の若さ（と未熟さ）を反映するものでもあった。当然のことながら、キング首相はこの申し出を拒否した。外交官の活動としてはあり得ぬことだったからだ。首相はマーラーに在日公使としての給料一万ドル、手当一万二千ドル、その他に公用車代三千ドルを支給すると告げた。

マーラーは結局これを受けることに同意したが、日本でカナダの国威にふさわしい行動をとるための活動経費として、給料のほかに自ら年五万ドルを出費する覚悟だ、とキング首相に話した。キング首相はあえて反対しなかった。キング首相は、上級外交官を選任する際に、彼らが給料のほかに個人の資金を持ち込むものと想定して、意図的に資産家の中から人選を行なっていた。もちろんこのようなことは、当時の国際外交の慣習に反していた。

とにかく、マーラーはその任務をてきぱきと、見事なほど完全に進めていった。一九二九年二月末頃までには、一連の提案事項をまとめ、首相の裁量を仰いだ。

まず、自分がロンドンに行ってイギリスの当事者に相談し、新公使館にふさわしい調度品や服装を購入することを提案した。また、「カナダ全国を遊説」することも提案の一つであった。全国の主要都市を巡って、有力者クラブや商工会議所で、彼が公使に任命された理由を説明し、ならびに日本で待ちうけているカナダの貿易上の可能性について関心を高めたいというのである。「公使の仕事は赴任先の国にあるだけではない。自分が代表する母国においても大切な仕事がある」とマーラーは確信していた。マーラーは、その後、何度も同様のカナダ遊説を行なっている。

公使公邸(現在の大使公邸)。当時の正門は、現在、裏門になっている。

スタッフには優秀な人物を

マーラーは、公使館での部下に最良のスタッフを揃えたいと考えていた。外交官というものは、「一言一句、一挙手一投足に至るまで細心の注意をもって判断し、行動しなければならない、期待するところの成功を少しでも傷つけたり損ったりすることがあってはならない。……スタッフは全員が完全に同一の見解を堅持していなければならない」――と彼は主張した。そして、「教養と性格の両面から見て承認できる人物、日本の人々との交際において慎重であり、またあらゆる点において思慮深く忠誠心のある人物」のみを採用しようとした。マーラー自身の高いレベルにスタッフが確実に順応できるように、またスタッフのことに関してはどんな些細な問題でも予め知悉し統制できるように、彼はスタッフ候補者の一人一人に直接面接した。

当時の外交活動というのはごく貴族的な環境で行なわれていたが、マーラーはこのような環境にごく自然に溶けこんだ。外交官は依然として「紳士」の仕事であり、当然正しい教育と社会的経歴をもっているものとされていた。公使館の「ナンバー2」になる人間には歴史学の博士号が必要だ、また他の公使館職員には(すぐれた文章術、立派な容姿、優雅な作法はいうに及ばず)古典と外国語の素養が必要だとしても少しもおかしくない、とマーラーは考えた。そのような人々なら、外交官としての責務を十分に果たすことができるし、カナダの利益と名声を守り、友好関係を築くことができる、そしてまた政治上、商業上の条約を協議するに当たって適切な補佐をつとめることができる。

マーラーは首相に対し、彼と彼が自ら選んだスタッフがどのように努力しようと、もしもそこで働く施設条件が適切でなかったら、彼らの努力が実るとは限らないと告げている。すでに彼はモントリオールに手広くもっていた不動産関係の手づるを通じて、ある程度の予備調査を行なっていたが、そこでわかったのは、一九二三年の関東大震災による荒廃のためもあって、適切な建物を見つけることはできそうもないということだった。これはかなり問題だった。というのは、彼の意図した外交活動の主要目的は、「自分が信用を得ようと思っている国、本国に送る報告に必要な情報を得ようと思っている国の芸術、文学、スポーツあるいは園芸など、たとえ自分が興味をもっていなくとも、その国の人々にとって興味のある事柄に公使自身が関心を示し、親しく会話を交わす――そうした社交活動によってこそ」達成できるのだとマーラーが確信していたからである。「このような方法を最大限に可能にするためにおそらく最も大切なのは、友情と信頼を得ようと思っている人々を楽しませ、もてなし、関心をひくことができるということにある。通常の公使館業務ももちろんおろそかにしてはいけないが、効果的で価値のある公使館業務の大本になるのは、正確かつ有益な情報である」と彼は考えていた。

大阪毎日新聞社を訪問した(1929年末)ときのマーラー公使一行。

このような信念をもっていたマーラーは、モントリオールの建築家ケネス・G・リー氏に、カナダ公使館の任務、地位、重要性にふさわしく、かつ日本の国民ならびに諸外国の駐日外交官にカナダの威信を正しく印象づける建物の設計を依頼した。この設計プランが上がってきたの

が、マーラーが任命されてからわずか六週間後のことだった。四年後に建てられた本格的な公使館建物の特徴が、このプランの中にはすでに多く見られるのである。マーラーはさらに、公使館用の土地の購入と恒久的な建物建設のために、次期国家予算に十分な資金をとってほしいと首相に申し入れた。

キング首相は、つねづねマーラーの提案には心よく応じていた。特にロンドンとパリへの訪問、東京へ向かう途中の国内遊説、初秋に日本へ到着する計画などは喜んで承認した。しかし恒久的施設の入手を即刻行なってほしいとの要求に対しては、これを承認しようとはしなかった。最初のうちは借家を利用するようにマーラーに勧めたのだった。マーラーは、当面、それで満足することにした。

受入れ準備にキーンリーサイド氏

次期公使がヨーロッパとカナダ国内を忙しく跳び回わっている間、カナダ政府は公使一行の受入れ準備を整えるために、ヒュー・キーンリーサイド博士を東京へ派遣した。キーンリーサイドは、当時若冠三十歳。大学の優秀な教師として名が高かったが、一年前に外務省に迎えられたばかりだった。その短期間に、彼は「政治状況についての豊かな知識と、自己を表現する術ならびに判断力をもつ素晴しい人物」として首相の眼にとまっていた。キーンリーサイドは、一九二九年の夏の初めに日本に到着し、直ちに適当な公使館の敷地や公邸の獲得に奔走し始めた。公使館業務は第五永井ビルでとることにし、かなり苦労してやっと麻布区西町に旧ルーマニア公使邸だったという屋敷を、マーラーの住まいとして借りることができた。

その夏、幾度となく、首相からつとに認められていたキーンリーサイドの手腕が実際に試されることになった。中でも特に際立ったのは、イギリス大使の「母性本能」が現われたときである。英大使サー・ジョン・ティリーの主張によれば、新米のカナダ代理公使（キーンリーサイドのこと）は、英国大使館内に英大使と一緒に住むのが一番良いし、また当然だ、というのであった。確かにこのような考え方は、イギリスの外交当局に見られる一派の考え方とは一致するが、外国政府からみて大英帝国とは全く別の独立国としての存在を打ち出そうとするカナダの政策からすれば、まさに正反対の考え方であった。キーンリーサイドは英国大使の申し出を丁重に謝絶したが、この措置は、カナダが新たにとり始めた国際的イニシアチブに対し、英国の官僚は政治家より冷淡であると常々考えていたキング首相に、いたく気に入られた。

マーラー公使の着任

一九二九年九月九日、キーンリーサイドは、英国大使館の代表や在日カナダ人、多くの報道陣などと共に、横浜の埠頭に立っていた。その時、汽船「エンプレス・オブ・フランス」が、マーラー一行を乗せて静かに到着した。演説のチャンスを決して逃がさないマーラーは、歓迎陣の前で簡単に挨拶の言葉を述べた後、車で仮宿舎の帝国ホテルへと出発した。

新任公使は早速、時の外務大臣（前駐米大使でもあった）幣原喜重郎男爵（一八七二～一九五一）に会見を求め、カナダ政府からの挨拶状を手渡すと同時に、天皇への信任状提出はいつになるのかと尋ねた。九月十六日になって返事が届き、翌十七日に接見を許すという。あまりに急なことにマーラーは少なからず興奮したが、翌朝にはすでに用意万端整えられ、彼は若き天皇に信任状を提出するため、カナダ国旗と日章旗で飾りたてられた帝国ホテルを後にしたのだった。

着任早々から、公使とスタッフは厳格かつ精力的に仕事を進めていった。公使が特に責任を感じていたのは、オタワに送るための日本についての詳細な情報を収集することであった。日本はカナダ国民の大半にとって全く未知の国だが、カナダにとって計り知れぬほど大きな可能性を秘めた国である。長大かつ詳細な報告が毎月、本国へ送られた。日本の政治経済についてだけでなく、中国の情報もそこには含まれていた。二等書記官のK・P・カークウッドが北日本各地を回り、

公使公邸の内部。

公邸内部。

大阪朝日新聞社で。

その見聞にもとづいてザラ紙に百三ページにわたって書いた日本の鉱物資源と鉱業に関する報告などは、その一例である。マーラー自身もこの国をよく知り、在日カナダ人とも会うために、日本各地をよく回って歩いた。一九三〇年にマーラーとキーンリーサイドは中国を訪れた。マーラーは上海、南京、香港、キーンリーサイドは朝鮮、満州、中国北部を回り、商業上の情報や政治情報を収集した。一方、マーラー夫人もそれに劣らず多事多忙の日々を送っていた。最初の一年間に、公使夫妻がもてなした客は二千五百人以上にものぼったほどである。

やがて、公使館の施設が手狭なことがわかってきた。マーラーが東京に着いて間もなく、公使館を当時丸の内にできたばかりの帝国生命ビルに移したが、商務関係の仕事を全て公使館本部に集中することになってから、ここもまた十分でないことがわかった。公邸の方は住み心地は良かったものの、家賃が大変高く、大通りからの出入りに不便な上、騒々しい地区（一等地ではあったが）にあった。マーラーは新しい移転先を探し、一九三〇年に十五か所の候補地を調べてみた。

公邸内部。

恒久的公使館の建設

その中で特に良さそうな四か所が選ばれた。いずれも六本木の交差点から南あるいは南西へ入ったところにあった。マーラーはキング首相に、新しい公使館の土地購入費は約四十万円（二十万ドル）ぐらいになるだろうと知らせた。その際彼は、この値段は少々高いかもしれぬが、政府の出費は最終的に借家費用とさして変わらないだろう、と書き添えるのを忘れなかった。

だが首相からは、承諾の返事を得られなかった。キング首相はその頃、ワシントンの駐米公使館用として五十万ドルに近い支出を行なっており、その法外な金額に彼個人としてはショックを受けていたのだ。議会からは何の批判も出なかったが、当時の経済が国内的にも国際的にもますます暗い見通しに陥っているときでもあったし、首相としては海外公館費として、これ以上大きな出費を許す気になれなかった。

キング内閣は一九三〇年の総選挙で敗北し、代わって登場したR・B・ベネット新首相は、マーラーの駐日公使留任に同意した。一九三一年夏に一時帰国したマーラーは、恒久的な公使館建設の問題を新首相に提案した。三井信託銀行と英国大使館の設計者の助力を得てさらに二か所の土地を候補にのせたこと、またそこに建てる建物は最初の候補地の場合が総額で二十九万一千ドル、第二の候補地が三十四万一千ドルでできることを告げた。もし政府が十年間で償還してくれれば、マーラー個人の資金をもって土地の購入ならびに適当な建物の建設にあててよいとまで申し出た。しかしながら、ベネット首相は閣僚を説得することができず、公使は再び失意のうちに東京へ帰任した。

一九三二年の夏頃まで、マーラーは政治のかけひきよりも、外交活動を楽しむようになっていた。夫婦ともども本国政府が望むかぎり、いつまでも日本にとどまって構わない、と政府に伝えている。もし政府が自分たちの滞在継続に同意するならば、自分たちは家族や友人と離れて暮らすのだから、何らかの代償があってしかるべきだろう、とマーラーは考えた。そして再び新公使館建設の件を持ち出したのだった。恒久的な公使館と公邸があれば、その効果は（彼自身の幸せはもちろんのこと）測りしれないものになるだろう、と彼は主張している。

ここでマーラーは、政府にとって大変魅力的な提案を行なった。彼が土地を買って、そこに公使館と公邸を建てようというのである。費用は二十万ドル以内にとどめ、政府は十年間で彼に返済してくれればよい。彼自身も自分の資金を最低二万五千ドルは拠出しよう、というものである。

ベネットはこの提案を閣議にかけた。マーラー自身も閣議に同席させた。かくして直ちに承認を得ることができた。正式の承認は、一九三二年八月三十一日に出された。

マーラーは大いに喜んだ。東京に帰任して間もなく、旧笹山藩十三代目藩主であった青山忠俊子爵の所有する格好の土地が見つかった。マーラーが当初必要だと考えていたのより広く、三千七百五坪もある地所だったが、当時、円の価値が一時的に下落していたため、価格は特に買手に有利となっていた。場所そのものは申し分なく、あらゆる点からみてマーラーの抱いていた規準にぴったり合っていた。公使館としても公邸としても適切で、年月を経ても価値の変わらない土地

マーラー夫妻。明治神宮の前で。

でなければならない、とマーラーは考えていたのだ。

六週間にわたる苦心の交渉の末、ラングリー商務官は〝得意の腕を発揮して〟話をまとめた。当初の要求値より二万五千円安い四十二万五千円で購入の運びとなったのだった。現中国大使で東京勤務の経験も持つアーサー・メンジス氏など、一部の人々は、その土地をそのように有利な値で買うことができたのは、そこの土地は幽霊が出るから外国人以外は住めないという噂がその頃あったからだと言う。実際にはおそらく、青山家が民間業者に売るより、外国政府に譲り渡す方を選び、そのためには金銭的な損失をも受け入れることにした、というのが本当のところだろう。

「私は第一級の建物にするつもりでおります。ご存知の通り、私はわが国の政府に対し素晴らしい結果をもたらしたいと望んでおります」とマーラーは首相に語っている。この約束を実現するために、マーラーは大林組に工事を依頼した。大林組は米国大使館の建設を手がけた、日本で最も業績のある建設業者である。建設計画全体の指揮と具体的な設計図の作成は、有名な建築家フランク・ロイド・ライトの弟子アントニン・レイモンド氏に依頼した。技術的な問題はJ・J・スバーガ氏に任せ、現場監督にはT・タケイ氏（漢字は不詳）を頼んだ。他方、地震多発地の建築技術に関する国際的権威、内藤多仲早稲田大学教授に各段階での助言を依頼した。マーラーが選んだカナダ大使館建設チームが立派な仕事を成し遂げたことは、あれから四十五年たった現在も大使公邸および大使館事務所として立派に使われている建物に、はっきり現われている。

以上のように最高のスタッフを揃え、万全の用意をした上に、さらにマーラー自身があらゆる面に常に目を配った。彼は計画案、設計図、それに調度品のサンプルにまで何か月も熟慮を重ねた。調度品のサンプルに至っては、オタワに送ってそのままロンドンへ移送させたほどだった。ロンドンには若き同僚のジョージ・バニューがいて、サンプルがイギリスの仕入れ業者にきちんと届いたかどうかを確認するようにマーラーから言いつかっていた。このバニューとは、もちろん後のカナダ総督（一九五九～一九六七）その人である。

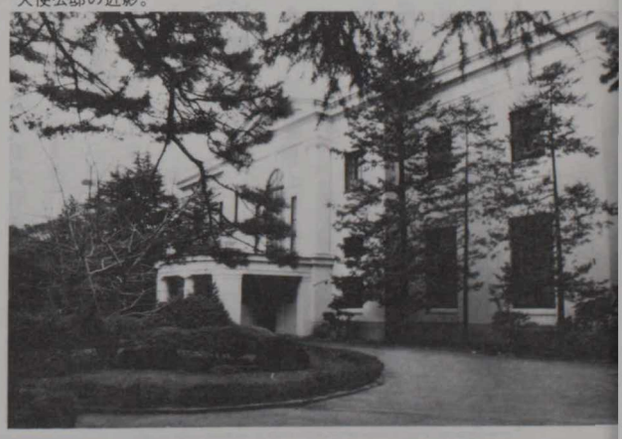
工事がほぼ始まろうとしていた時、「契約上の問題が生じないならば」工事を一時延期されたし、との指示がオタワから届いた。重大な国際危機（アメリカはちょうどその頃金本位制を廃止したばかりだった）が生じたというのがその理由である。マーラーは驚天した。重大な危機とは何を指すのか定かではなかったが、とにかく彼はこの指示にがっかりした。とりあえず定礎式の予定を取りやめたが、このことは一大盛典を期待していた多数の在日カナダ人をいたくいらだたせた。マーラーは急いで業者と相談した結果、延期はもちろん不可能ではないが、その場合には一万七千五百五十六ドルの出費増となる、ということがわかった。そこでマーラーは、首相からの指示には自分に十分な自由裁量の余地が残されていたのを思い出し、工事を続行させた。幸いなことに、首相は後になってマーラーの決断に同意を与えている。

一九三三年十一月二日に公邸が完成し、次いで同四日に公使館が完成した。それらを引渡された時、マーラーの誇りは少なからぬものであった。カナダ最初の恒久的公使館は、予定日程に遅れることわずか六十四日、予算のオーバー分わずか五万四千九百二十一ドルで完成を見たのだった。一九二九年、マーラーが公使に任命されて六週間後に初めて立案され、四年後に完成したその建物は、それ以来ずっと日本におけるカナダ代表部の建物として使われてきたわけである。その過程で、マーラーは内閣二代にわたる逡巡に直面してきたが、いみじくもかつてキング首相によって認められたマーラーのねばり強さが、あらゆる障害を克服して、ついに成功をもたらしたのだった。

恒久的な駐日カナダ公使館（現在は大使館）は、その必要性から、そしてまたカナダに対する誇りの念から生まれた。そして今日では、初期のカナダ外交を貫ぬいていた高い理想を讃える記念碑として残っている。それはまた、公務を他のあらゆる事柄に優先させて任務に専心した、サー・ハーバート・マーラーならびにマーラー夫人を讃える記念碑でもある。

庭から見た公邸。

大阪での昼食会（一九二九年）。マーラー公使があいさつしている。


大使公邸の近影。

国交元年

一九二九(昭四)年のできごと

一月

♣カナダ、米国とナイアガラ瀑布保護協定を結ぶ（二日）。

三月

♣衆議院で治安維持法改正緊急勅令承諾案を可決（五日）。

♣治安維持法に反対した旧労農党代議士山本宣治が刺殺された（五日）。山本は十九才のときカナダへ渡り、アルバイトをしながら勉強している。

四月

♣日本共産党員が大量検挙された（十六日）。

五月

♣カナダ国有鉄道（CNR）、列車との双方向電話を開設（五日）。

米国を凌ぐカナダ麦の進出 世界の小麦中心は漸次カナダへ移る

♣本邦製粉業の発達につれ、外国小麦の本邦に輸入せられるもの年々増加し、昭和三年の輸入総額六千七百万円に達するに至ったが、アメリカ小麦を輸入小麦の大宗とし、カナダ小麦を従とせる従来の傾向一変し、最近はカナダ小麦が主位に立ち、アメリカ小麦はその半を占むることとなった。即ち左の如くである（単位ピクル）。

	カナダ	米国
大正十三年	二、一九四	四、五六六
十四年	一、五一三	二、八三九
昭和　元年	四、一七七	三、二五七
二年	二、八七九	二、六〇八
三年	五、五九一	二、四五四

即ちこの五年間に主客全く転倒せるが、カナダ小麦の優位は一時的の現象にあらざるものの如く、本年以後においては、益々、米、加小麦輸入量の開きは拡大するものと見られているが、その原因は大様左の如くである。

（一）アメリカは今後最大収獲を挙げても尚九億ブッシェルを出でず、内地消費を六億五千とすれば、輸出能力は二億四、五千ブッシェルにすぎざるに反し、カナダ小麦は昨年度において五億三千万ブッシェルの生産あり、一億程度を消費にあつれば、四億以上の輸出能力あるため、世界的にもその重要さを増進しつつあること、

（一）アメリカ小麦は漸く行詰り、生産費の如き、一ブッシェル一ドル二十四セント乃至二十八セントなるに対し、カナダ小麦は発達の余地多く、生産費は八十九セント乃至九十五セントにして、その間三十セントの開きあること。

もちろんカナダ小麦とアメリカ物は、硬軟その質を異にし、用途もいささか差があるが、最近は欧州方面も技術的にカナダ物を需要するに至ったので、カナダがアメリカに代って小麦の中心とならんとする傾向は、世界的のものと称せられ、シカゴ取引所に代ってカナダ、ウィニペグ取引所の地位も漸次向上せる如くである。従って米国は販路奪回のため、我国にも農務局委員等を派遣しつつあるが、回復困難なるべく我が製粉業者は今や原料小麦の輸入については、バンクーバーの現物市場相場、およびこれが直後にあるウィニペグ取引所を重要視するに至った。

（朝日新聞五月十五日）

カナダ公使館開設準備に レイサイド氏けさ着任

♣【横浜電話】新設カナダ公使館開設準備のため一等書記ヒュー・ギーン・レイサイド氏（ヒュー・キーンリーサイドの誤り）は、秘書アグネス・ベアード嬢と共に、二十日午前七時、バンクーバーから横浜入港のエンプレス・オブ・フランス号で来朝した。氏は語る。

カナダが公使を交換しているのは、今の所、千九百二十六年に設けた隣のアメリカと、千九百二十八年に設けた在留民二百万を有するフランスだけでしたが、今度東洋における我々の親密な隣国日本とも公使を交換することが出来るのは、両国のため誠に喜ばしい事です。公使ハーバート・エム・マーレー（五十）氏は自由党に属し、現に代議士であり、知事を勤めたこともある人で、九月八日横浜着で着任の予定になっています。目下公使館をどこに置くかについては決定していません。当分帝国ホテルで事務を取る予定です。

（朝日新聞五月二十一日）

日加の新関係

♣カナダ公使館一等書記官キンレイサイド氏は来任した。吾人は、ここに我国におけるカナダ最初の外交官を迎へて、公使館開設がいよいよ近づいたことを、喜ばねばならない。

カナダはイギリスの自治属領の一では

あるが、面積三百七十万方マイル、人口九百万、濠州、南阿を抜いて第一位を占めている。国富の如き四百四十億円を数へ、それは一人あて五千円に当り、産業貿易また日進月歩の盛運に立っている。かういふ「雄邦」が大正八年母国から国際連盟における独立代表権を許され、大正十一年イギリス大使ゲデスおよびカナダ首相キングの協定で駐米カナダ公使派遣を定め、昭和元年米国との間に、昭和三年フランスとの間に、公使を交換したとしても、何の不思議とすることがあらうぞ。しかして今回の日加外交使節交換に至っては、吾人はその早からず、寧ろ遅かりしことを指摘せねばならぬのである。

何故か、見よ、日加貿易は近年六千万円乃至八千万円に達し、その間我輸入は輸出に二倍し、我こそカナダの顧客の如くではあるが、その進境大なるを見ると、たれかこの太平洋をさしはさむ両友邦経済接近の前途を祝福せぬものがあらう。次ぎにカナダ在留邦人一万五千を数へ、その待遇と新入国問題とは明治四十年ルミイユ協約以来、我が大切な外交の一となっている。これ等貿易および移民の両問題を適当に円滑に処分することは、あに新外交機関の重要な任務ではあるまいか。

吾人はオッタワの我公使館と東京のカナダ公使館とによりて、日加関係の親善的発展を見んことを切望してやまない。

（朝日新聞社説、五月二十一日）

六月

♣サスカチュワン州で、初めて自由党が敗北。

七月

公使館でカナダ国旗を掲揚 アジアでは初めて

♣永井邸（麻布）にもうけられた臨時カナダ公使館の上に、昨日午後、アジアでは初めてカナダの国旗が掲揚された。

（中略）

カナダの在外公館は、ワシントン、パリ、東京と、三つしかない。それだけに、在日カナダ人や日本の政府関係者にとって、昨日の行事は意義深いものがあったようだ。式典とレセプションは、公使館の芝生の上で、簡素に、そしてうちとけた雰囲気の中で進められた。主催は、在日カナダ協会と代理公使のヒュー・L・キーンリーサイド氏である。

キーンリーサイド氏は、国旗掲揚に先立って、簡単なあいさつを行った。同氏は、その中で、次のようにカナダ最初の代表に寄せられた歓迎に対する感謝と、公使館設立に当っての希望を述べた。

「日加協会の主催により、自治領カナダの建国六十二周年を祝い、かつ極東におけるカナダ最初の公使館の仮施設の上にわが国の国旗が掲揚されるのに立ち合うため、私たちは今日、ここに集まった。この機会を借りて、私は皆さんと一緒に、日本の政府および国民がこの美しい国に駐在するカナダ最初の外交代表団に対して示した好意ある歓迎に、心から感謝の意を表する。

駐日カナダ公使館に掲揚された旗が、二つの大きく、かつ有意義な目的に応えてくれるだろうというのが、私の心から

一外交官の日記から

二等書記官 ケネス・P・カークウッド

私が二、三年の間、東京へ赴任することになった、と今日スケルトン博士からきかされた。突然で、予期していなかったことである。ヨーロッパへ行きたいと考えていたので、いささか失望した。新しい任務につくまでに一か月しかない。

日本の歴史、政治等を勉強するには不十分だ。（一九二九年七月五日）

私が選ばれたのは、クラウザーが都合が悪くて行けないし、ほかに適当な人がいないなど、いろいろな理由によるものだ。

（七月八日）

昨日、マーラー氏に会った。二時間にわたる会話ののち、彼は私と握手し、八月末にバンクーバーか船上で会おうと約束してくれた。それからマーラー氏の勧めで、私はモントリオールの仕立屋ディビッド・リーズへでかけ、外交官服の寸法をとってもらった。服は英国で仕立てられて、私のところへ送られてくることになっている。（七月十日）

カナダ公使が日本国王によって正式に認証される重要な行事が、今日催された。最初の英国代表が御門（みかど）との謁見に際して直面した奇妙な東洋の儀式について読んでいた公使は、かなりの戦りつというか、緊張した期待感につつまれていたが、その緊張と不安はようやく終ったのである。

（九月十八日）

日本に到着して、二週間近くたった。

（中略）公使は多くの困難なことがらをかかえて、いくらか気むずかしかったが、よく気持を抑えていた。マーラー夫人はすばらしかった。両人とも、公邸と公使館を探すことについては失望していた。帝国ホテルの生活には気がめいっていたし、食事はひどかった。（中略）雨にもうんざりしていた。（中略）

九月二十日、帝国生命ビル内の仮公使館で執務を開始した。同じ日、公使夫妻は麻布の家に移った。（九月二十一日）

在日カナダ協会主催の夕食会であいさつした公使は、大英帝国の一員としてのカナダと、彼が赴任している国との良好な関係を醸成するのが自分の主たる任務である、と強調した。カナダ公使が就任後数週間あるいは数か月間内にやらなければならない数多くの仕事のひとつは、東洋に独自の外交機関を設置するに当ってカナダがもつことになる正確な役割と立場を日本国民および在日英国人社会に説明し、必要があれば、独自の代表部設置が自治国の独立あるいは（大英）帝国の解散への傾向の前兆となる可能性について、在住英国人の疑惑を正すことである。公使は、国王陛下ジョージ五世やマッケンジー・キング・カナダ首相の発言を引用しつつ、カナダは英連邦に対して、完全にまた統合的に協力する意図であることを何度も強調した。（九月二十六日、抄訳）

の願いであり、またカナダの政府・国民の希望でもある。そのひとつは、日本の皆様が、この旗を（日本に対する）カナダの尊敬と称賛の現われとして、悔やむべき過去をもたず、また将来も変わらないであろう友情の象徴として、受け入れてもらいたいということである。第二に、この旗が東洋に住み、あるいは東洋を旅するカナダ人に故郷を—私たちが愛する国土と国民を—想い起こさせるものになるように、という私たちの願いである。願わくば、この旗が、沿海（大西洋沿岸）諸州の森、ケベックの絵のように美しい村や歴史的な町、オンタリオの農地、大平原諸州の色彩豊かなパノラマ、ブリティッシュ・コロンビアの消えることなき美しさについて、私たちに語りかけてもらいたいと思う。

これらすべてのことを、この旗が私たちに想い起こさせてくれるよう期待する。同時に、国家間のつき合いにおいて、カナダがその強みを常に真実と正義、国家間の相互理解、世界平和の維持に向けるよう、私たちは愛国心をもって団結しようではないか。この旗は、今日、こうした希望を込めて、そしてこうした精神に基いて掲げられるものである。」

このあいさつのあと、人々が国歌「オ・カナダ」を歌う中を、国旗が正式に掲揚された。（ジャパン・アドバタイザー紙七月二日）

♣張作霖爆死事件の責任者処分にからんで、田中義一政友会内閣が総辞職。代わって浜口雄幸民政党内閣が成立した（二日）。外相は幣原喜重郎。

♣プリンス・エドワード島州民、禁酒法を支持（十八日）。

八月

♣ドイツの飛行船ツェッペリン伯号が、世界一周の途中、霞ヶ浦に到着（十九日）。

♣北海道鉄道疑獄事件など、昭和大疑獄事件が相次ぐ。

九月

♣オンタリオ州アビティビ川で亜炭を発見（四日）。

初代カナダ公使けさ入港す
詩人ビニヨン氏夫妻と同じ船で

♣【横浜電話】カナダ太平洋汽船のエムプレス・オブ・フランス号は、秋雨煙る九日午前八時半、ヴァンクーヴァーより直航して横浜さん橋へ着いた。夏休みで帰省中であった宣教師や各学校の外人教師などで満員のうちに、新設東京カナダ公使館赴任のハーバート・マーレー公使夫妻外一行九名、今秋京都で開かれる汎太平洋会議列席のシカゴ大学国際法教授クインシー・ライト博士夫妻ならびにニューヨークの弁護士チャーレス・ハウランド氏夫妻、イギリス行の日本留学生が一度は必ずお世話になるといふ大英博物館東洋美術部長詩人ローレンス・ビニヨン氏夫妻、ならびに同行の陶器収集家オスカー・ラファエル氏、ロンドン大学のセリグマン博士、それからベルリンのカイゼル・ウィルヘルム生物学研究所次長ゴールド・シュミット博士、これ等を出迎への人々などでさん橋は大賑はひを呈した。

（朝日新聞九月十日）

初代の公使として着任のよろこび
マーレー公使のあいさつ

♣【横浜電話】カナダ公使ハーバート・マーレー氏は、サロンにおいて、記者団に対し左の如きステートメントをだした。

日本およびカナダの両国が新に公使を交換するに至ったのは、太平洋をはさむ両国の利害関係が年々増大してくる証左である。

カナダの民衆は、文化高き日本に対し、多年誠意と興味とをもって来た。その自然ならびに人工の美において、その平和愛好心の強き点において、その家庭生活の礼節高きことにおいて、日本は常に世界に有名なものである。

最近日本の各方面（政治、科学産業、財政）の進展と発達とは、北太平洋をはさみわがカナダと緊切な関係をもつやうになった。いまそのあとを見れば、一九一三年両国間の貿易が五百万ドルに過ぎなかったものが、一九二八年に至っては五千五百万ドルに達し、かつ遂年増大の傾向を呈して居る。

太平洋岸のヴァンクーヴァー港一年の取引総高は、太平洋に面するわがどの港よりもはるかに多く頻繁である。

日本に比べて、カナダは国としての歴史はまだ若い。やうやく六十数年の歴史しか持たない。しかし歴史の新古に拘らず、カナダの国富と産業とその世界各国に対する利害関係は、イギリスのどの自治領にも劣らぬものがある。日加両国が世界平和に熱心であることは、その両国が国際連盟に加入しているのによってもわかる。従来何等の恥づべき事件も起きていない、この両国は、将来ともその名の示す平和の太平洋をはさみ、永久に平和のうちに友情を高めたい。これ私がカナダ全民衆の希望を携へて貴国に赴任した所以である。

（朝日新聞九月十日）

初代カナダ公使信任状捧呈式
宮中鳳凰間にて

♣去る九日着任した初代のカナダ特命全権公使ハーバート・メレディス・マーラ

横浜港に着いたマーラー夫妻（朝日新聞社提供）。

信任状捧呈式に臨むマーラー公使（朝日新聞社提供）

ー氏は、十八日午前十時十五分迎引のため帝国ホテルへ赴いた高橋式部官と宮内省差回しの自動車に同乗、宮城二重橋より参内、同十時三十分、林式部長官の誘導により宮中鳳凰の間に進み、一木宮相、幣原外相、鈴木侍従長等侍立の上、天皇陛下に謁見仰付られ、恭々しく信任状を捧呈したるに、陛下には御受領の上、これを幣原外相に授けられ、優あくなる勅語を賜ひ、同公使は御前を退下、陛下には同四十五分入御遊ばされた。

（朝日新聞九月十九日）

マーラー公使、天皇拝謁の儀
――バンクーバー・プロビンス紙から

♣「カナダやカナダ関係の事柄、そしてカナダの将来といったことが、日本帝国において今日ほど大きな話題になったことはない。自治領カナダが君主国家に派遣する最初の公使となったハーバート・マーラー氏が、この度、厳粛な儀式のうちに今上陛下裕仁天皇に拝謁仰せつけられたためである。

マーラー氏は恒久的な公邸が決まるまで帝国ホテルに滞在することになっているが、この日、ホテルのロビーには日加両国の旗が飾られ、ホテルの屋根には両国の国旗が風にはためいていた。カナダ公使拝謁の儀は、長く宮中に伝わる古式にのっとって、華麗荘厳のうちにとり行われた。

十時を少しまわった頃、宮内省差しまわしの車がホテルに到着した。朱塗りの車体で、ドアには金色の菊の紋章がほどこされ、制服姿の運転手と従者の姿が見える。礼服に身を固めた高橋式部官がホテル内の公使居室までマーラー氏を迎えに出向いた。数分後、ウインザー朝風の金モールの礼服をきらびやかに着用した公使が、ホテルの玄関まで三名の公使館書記官――ヒュー・キーンリーサイド博士、J・A・ラングリー氏、ケネス・P・カークウッド氏の見送りを受けて、高橋式部官とともに宮内省の車に乗り込み、帝国ホテルを出発した。

公使と式部官を乗せた車は、近代建築ビルの立ち並ぶ道巾の広い東京の市街を急いだ。西洋風につくられた大きい公園の側を通ったあと、数百年にわたって宮城守護の施設としての役目を果して来た古い濠を渡る。こうした儀礼的行事の際に使われる宮城正門では、カナダ公使の到着を告げるらっぱが鳴りひびき、通過する車に向って儀伏兵が「ささげ銃」をして敬意を表した。宮殿の玄関に着いたマーラー氏と式部官は、そこで車からおりた。マーラー氏は、貴重な日本の美術品が飾ってある漆塗り仕上げの荘麗な応接室に通され、そこで前ロンドン駐在大使の林式部長官（男爵）の迎えを受けた。

マーラー氏と林男爵は、さらに廊下を通って謁見室（鳳凰の間）へ進んだ。そこには、陛下が玉座のわきに立って待っておられた。右側には外務大臣の幣原（喜重郎）男爵、左側には通訳官、玉座の後には侍従たちが侍立していた。鳳凰の間に入ったカナダ公使は、陛下の御前に歩み寄りながら三拝し、握手できる近さまで進んだ。公使はそこで挨拶文を読み上げ、それが通訳された。ジョージ国王陛下の自筆の挨拶状と公使の信任状が直接天皇陛下に捧呈された。そのあと陛下からマーラー氏に対して通訳を通してご挨拶があり、握手された後、数分間言葉を交わされた。陛下は再度公使と会いたい旨の希望を表明され、拝謁の儀は終了した。

この時のマーラー公使の挨拶文は短かいものだった。自分の来日の目的がカナダを代表することにあると述べ、天皇陛下に対するジョージ陛下のお気持をお伝えした。マーラー公使はさらに、皇室と日本国民の多幸を願い、かつ公使としての仕事を通じて友情と相互関心のきずなを強め、日加両国民を平和と友好と調和のうちに結びつけていきたいと語った。これに応えて、天皇陛下は、ジョージ陛下がかくもすぐれた人物を日本におけるカナダ最初の代表として選ばれたことに喜びを表明され、公使に対する心からの歓迎と、無事着任したことへの祝福の意を表された。陛下はさらに、今回の公使交換が相互の理解と利益の増進に貢献することを望まれるとともに、両国の友情のきずなを強めるために日本政府と国民は心からの協力を惜しまないと述べられた。」

十月

♣オンタリオ州民、酒類管理法の継続に賛成投票（三日）

♣ニューヨーク株式市場が大暴落（二十四日、暗黒の木曜日と呼ばれた）。世界経済が大恐慌に突入。

十一月

♣ニューファンドランド北西を襲った津波で、死者二十七人、被害額百万ドル（十八日）

♣大蔵省が金輸出解禁に関する省令を公布（二十一日）

大学は出たけれど

昭和4年は景気が悪化し、失業者が街にあふれた。東大出の就職率がわずか3割という状況で、せっかく大学を卒業しても就職のあてのない失意の青年が多かった。そこで、「大学は出たけれど」（同名の松竹映画から）という言葉が流行した。「ステッキ・ガール」というのも、この年の流行語である。島崎藤村の「夜明け前」、小林多喜二の「蟹工船」、徳永直の「太陽のない街」が出版され、「東京行進曲」（西条八十作詞、中山晋平作曲、佐藤千夜子歌）や「紅屋の娘」（野口雨情作詞、中山晋平作曲、佐藤千夜子歌）、「洒落男」（坂井透作詞、クルミット作曲、二村定一歌）などがはやったのも、この年。12月末には、清水トンネルが開通している。

日加国交50年の変遷

日本とカナダ両国間に外交関係が樹立されてから、今年で五十周年になる。大学の歴史学教授であったヒュー・キーンリーサイド氏が駐日カナダ公使館を開館したのは、一九二九年五月二十日のことであった。同じ年に、徳川家正氏が駐カナダ日本代表としてオタワに赴任し、ハーバート・マーラー氏が駐日カナダ公使として東京に赴任した。

正式な外交関係が樹立される以前から日加両国は友好的な接触があるにはあったが、それは断続的なものであった。政府間の業務は、原則として、東京のイギリス代表部を通じて行なわれていた。二国間で直接行なわれた協定の最初のものは、おそらく一八八九年にカナダ側郵政大臣と日本側逓信大臣との間で結ばれた郵便為替協定であろう。同じ年、通商問題、移民問題などの必要性から、日本政府はバンクーバーに領事館を設置した。また一八九七年には、最初のカナダ政府商務官が日本へ派遣されている。

第一次世界大戦によって両国関係の正常な発展は一時中断されたが、一九二〇年代初期には国際貿易と外交活動の飛躍的な拡大を見た。カナダは無限の天然資源を有する国であり、当然のことながら日本にとってはかなり関心をひく存在であった。一九二六年の英帝国会議で、自治領諸国が諸外国と直接外交関係を結ぶ権利が初めて認められた。カナダ政府は直ちに、カナダにとって最も重要な外国の首都に公使館を設置する方針を実行に移した。一九二七年にワシントン、一九二八年にパリ、そして一九二九年に東京にそれぞれカナダ公使館が開設された。

キーンリーサイド博士

なぜこの時期に日本に代表部を設置したか、五十年たった今では見当がつきにくいかもしれない。しかし、当時すでに、両国間の貿易は総額五千五百万ドルに近づいていた。また日本からカナダ西岸への移民問題は新たな協定を必要としており、そのためには両国間に直接的接触が是非とも必要だという事情があった。さらに、カナダの当時の中国専門家が、もっと近くから中国を観察するためにも、東京に外交代表部をおくことが必要だった。英国を仲介としない、純粋な二国間関係を結ぶ機が熟したとの判断から、カナダ政府は一九二八年、日本と外交代表を交換する方針であると発表した。その一年後に、自由党内閣の前閣僚であったサー・ハーバート・マーラー氏がカナダで最初の全権公使に任命された。思えば初代駐日カナダ公使の手から信任状を受けられたのが今の天皇陛下であられたというのも、日加両国の関係がもつユニークな特徴であろう。

当時の対日輸出品はほとんどが、太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア州で産出される原材料であった。カナダの輸出業者は、日本市場を一種不思議な尊敬の念をもって眺めていた。日本がカナダの小麦や材木、水産物、鉱物を無限に受け入れてくれる容器か何かのように考えていたのだ。こうした過大な期待が満たされることは決してなかったけれども、日本は確かに小麦粉、家具、紙・パルプ、

メイヒュー初代大使

冷凍果実、魚、缶詰、チーズ、バター、牛肉、豚肉などカナダ産品の重要な得意先であった。中でも小麦は最も重要な輸出品で、対日年間輸出総額の五〇パーセントに上るのが普通だった。逆に日本からカナダが輸入したのは大量の絹、陶磁器、ガラス器、みかん類、茶、米、玩具などである。

一八八〇年代末頃から多数の日本人がカナダへ移住し、カナダ市民となった。一九三一年の国勢調査によれば、カナダに住む日系人は二万三千三百四十二人、そのうち二万二千二百五人（九五・一パーセント）がブリティッシュ・コロンビア州に住んでいた。彼らの大半は製材、漁業、伐木、農業などの技能労働者だった。バンクーバーだけで八千三百二十八人の日系人が住んでいたことに示されるように、日系人社会は高度に都市化されていた。

日加関係は円滑に進んでいった。それは主にカナダが日本の必要とする原料の供給国だったからであり、両国の経済が互いに補完的性質を有していたからである。しかしながら、こうした関係がいつまでも続くわけにはいかなかった。

来日したディーフェンベーカー首相を囲んで。左から岸前首相、吉田元首相、池田首相夫妻、ディーフェンベーカー夫人（カナダ大使館で、一九六一年十月）。

一九二〇年代の平和と繁栄の後に、世界的規模における経済不況の時代が到来した。国際緊張が高まり、それは当然、日本とカナダの関係にも影響を及ぼした。カナダの経済情勢が悪化するにつれて、西岸地方に反東岸感情が強まり、日系移民排斥の声が高まった。日系移民の数はほんの少数だったのであるから、これらの反日の声は理性からというよりは感情的なものだった。だが日加関係を一番緊張させた原因として、満州における戦争の開始と、日本と中国の調停に国際連盟が全く無力だった点があげられる。こうした情勢にもかかわらず、日加両国の貿易は相変わらず盛んで、日本はカナダのニッケル、アルミニウム、銅、アスベスト、鉛、亜鉛といった鉱物資源を大量に買い付けた。

一九四一年十二月、戦争の勃発とともに、両国の国交は断絶し、それ以後再び正常な外交関係が回復するまで十数年の年月を必要とした。

一九四五年に太平洋地域に平和が訪れると、カナダは日本との政治経済関係を可能な限り早期に再開したいとの希望を伝えた。一九四六年七月、政府はハーバート・ノーマンを首席とするカナダ代表部を東京に設置し、在日カナダ人の保護にあたらせるとともに、経済報告の任務を担当させた。ノーマンは戦前、カナダ公使館員として在日経験があり、この国と歴史によく精通し、また日本国民に対する深い理解と共感をもつ人物であった。ノーマンは東京でアメリカの占領軍当局と協力して活動し、戦後日本の社会改革、経済改革、政治改革には彼の数多くの提案がとり入れられている。

大平外務大臣（当時）と飯倉会館で会談するシャープ外相（1973年）

早くも一九五一年に、日本の貿易使節団がカナダへやってきた。日本の産業復興に必要なニッケル、紙・パルプ、アスベストの輸入をはかるためである。漁業問題をめぐっても、両国の担当者が頻繁に公式折衝を行なった。

一九五二年には、日本と西側連合国との間でサンフランシスコ講和条約が調印され、日本とカナダの正常な国交回復への道が開かれた。

一九五二年四月、両国間に完全な国交回復が成立した。東京のカナダ公使館は大使館に昇格し、戦後初めてのカナダ大使としてロバート・E・メイヒュー氏が就任した。これと平行して日本側でもオタワに大使館を設置し、初代大使に井口貞夫氏が任命された。

翌一九五三年四月には、皇太子殿下のカナダ親善訪問が行なわれ、これによって両国関係の正常化が一層促進された。さらに翌年には、カナダのルイ・サンローラン首相と日本の吉田首相が相互に訪問し、また日本はトロントに総領事館（一九五四年）を、ウィニペグに領事館（一九五六年）を開設した。

戦後、日本が国際社会に復帰するにあたって、カナダは先頭に立って尽力した。例えば、当時カナダの外相だったレスター・B・ピアソンは、日本の国連加盟について日本の立場を代弁し、一九五六年に加盟を実現させた。それ以来、両国の国連代表団の間では密接な協力関係が保たれている。

航空運輸問題や査証問題など、多くの分野で日加関係が発展する一方、両国関係の中心は依然として貿易が占めていた。いみじくもカナダのC・D・ハウ通産大臣が指摘したように、日本とカナダは、双方とも「生きるためには貿易しなければならない」のである。日本の貿易関税一般協定（ガット）への加入を強硬に提唱したのもカナダであった。カナダはまた、日本に「最恵国待遇」を与えた最初の国のひとつでもあった。日本が経済復興を成し遂げ、すでにカナダの第三の貿易相手国となっていたことから、一九五四年一月、カナダは日本に関税上の「最恵国待遇」を認めたのである。同様にして、カナダは日本が経済協力開発機構（OECD）の正式加盟国となる努力を側面から援助した。

カナダにとって、自由な貿易関係は国際的な経済・政治の安定に欠かせない要因であった。一九五七年にジョン・ディーフェンベーカー内閣が誕生すると、首

相は日本が「国際貿易に全く平等の基盤で参加する」権利がある、と主張した。一九六一年までには、日本は他のいかなる西側工業国よりも自由にカナダ市場に進出できるようになった。事実、日本の繊維製品の年間輸入額は、他の西欧諸国よりカナダの方が多かったし、カナダに入ってくる日本品の三分の二は、何らの輸入割当制限も受けていなかった。

しかし、だからといって両国の間の貿易関係が常にバラ色であったわけではない。時として、関税問題や市場アクセスの問題、供給抑制、ダンピング調査、漁業区域などの難しい問題が起こり、協調関係を悩ました。しかしながら、これらの問題も、協調と相互信頼と自制の精神にもとづく両国間の交渉により、そのつど解決されてきた。

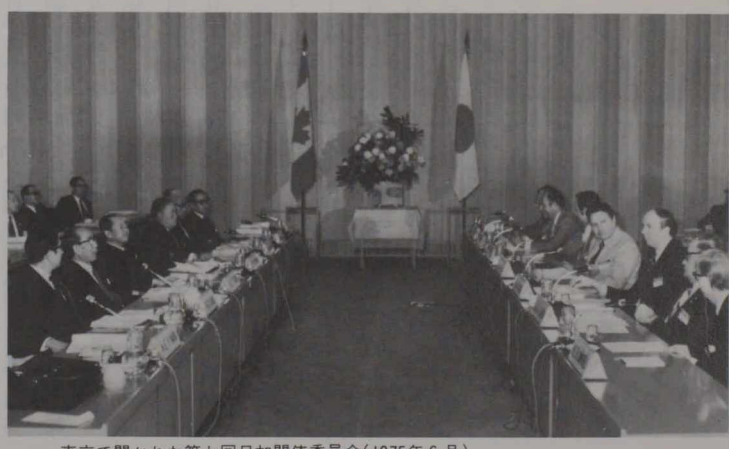
日本とカナダの指導者層の間でも、これまでに多くの首脳会談が行なわれてきた。一九六〇年に岸首相、翌六一年に池田首相が訪加し、同じ六一年に今度はディーフェンベーカー首相が訪日している。これら一連の話し合いにより、日加閣僚会議への道が開かれた。同会議は一九六三年以降現在に至るまで七回開かれ、相互に関心のある問題を討議している。このような公式の関係以外にも、たとえば一九六二年十二月に日本の守口市とカナダのニュー・ウェストミンスター市が日加間最初の〝姉妹都市〟となるなど、国民レベルにおいても太平洋の隣り同士としての友好関係が発展していった。東京に本部を置く日加協会の活動も、両国民の相互理解を促進する上で、大いに役立っている。

日加原子力協定議定書に仮調印して握手を交わすジェイミソン、園田両外相(1978年1月)

一九六〇年代以降は、食糧、鉱物などの対日輸出量がふえ、日本の工業力強化に役立ってきた。小麦や木材製品、紙・パルプなど、伝統的な輸出品も依然として日本に輸入されているが、現在では石炭や菜種、銅が輸出額で主要な地位を占め、その他水産物、豚肉も重要性をましている。日本側からの対加輸出が主に加工品であることは以前と変わらないが、それでも最近はカナダのメーカーが日本市場へある程度進出するようになった。

日本の対加投資も、日加関係の重要な特徴となりつつある。すでに投資総額は約六億カナダドルに上っている。特にエネルギー部門と天然資源部門で著しく、地域的にはブリティッシュ・コロンビアとアルバータの西部二州が圧倒的に多い。こうした投資は今後も歓迎されていくであろうし、日本における資本市場の急激な成長は、カナダにとっても大きな利益の機会を与えてくれるであろう。

次に科学技術の分野でも、多くの問題について定期協議を行なうことが定着化しつつあり、両国関係の緊密化がすすんでいる。ここ数年、多くの科学技術プロジェクトにおいて両国の政府諸機関が共同で事に当たっている。特に活発な分野は、宇宙開発ならびに通信である。その一例をあげると、一九七八年二月に、マニトバ州チャーチルにおける共同衛星追跡施設に関して、両国間に協定が結ばれている。各種の環境問題に関しても、両国の科学者が共同で研究を進めている。


東京で開かれた第七回日加閣僚委員会(1975年6月)。

一九五七年に原子力に関する日本との協力が開始され、日本の原子炉第一号の設計にはカナダ側の専門家が助言を与えた。続いて一九五九年に日加原子力協定が結ばれ、昨一九七八年八月にこの協定を一部修正し、核燃料の使用と再処理に関する安全保障措置の改正を新たに盛り込んだ議定書が、両国間で調印された。近い将来、日本が自国の電力需要を満たすために、カナダのカンドゥー炉を導入する可能性もある。現在、日本が購入しているウランの約四割はカナダから買い入れたものである。

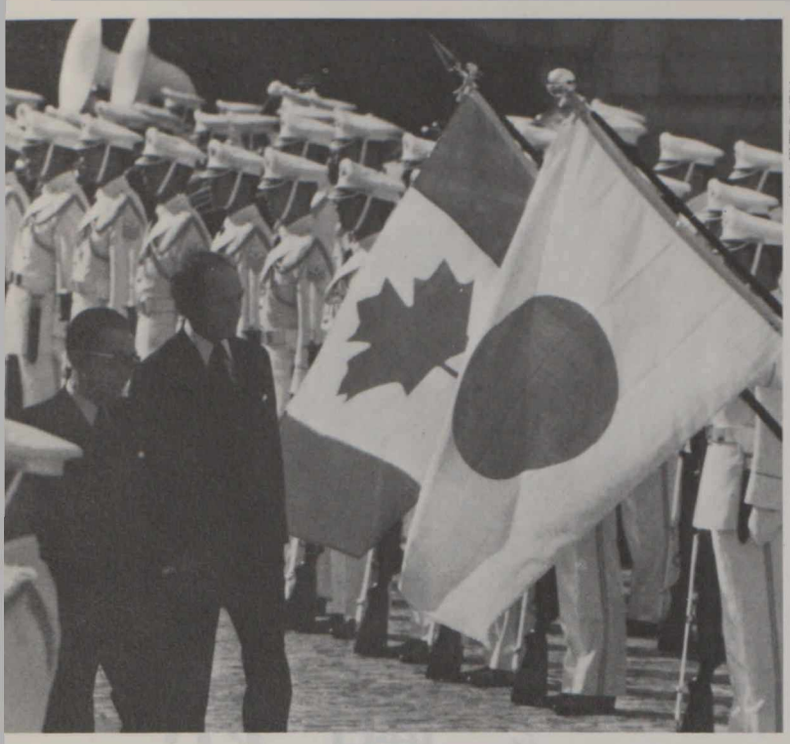
次の数字に見るように、この二十年間で両国間の貿易は、うなぎ上りに増大した。(単位、一〇〇〇カナダドル)

	対日輸入額	対日輸出額
一九五七年	六一、六〇五	一三九、一五二
一九六七年	三〇四、七六八	五七二、一五六
一九七七年	一、八〇二、四七五	二、五〇六、三四九

カナダは日本にとって七番目に大きな貿易相手国であり、日本は一九七三年以来、カナダにとって第二の貿易相手国となっている。

両国政府は、経済関係におけるあらゆる可能性を発展させるべく、これまでにいくつかの措置を講じてきた。この十年間にカナダのピエール・トルドー首相は三回も日本を訪れた。三度目の一九七六年十月の公式訪問が大きな成果を収めたことは、まだ我々の記憶に新しい。日本からは、田中首相が一九七四年にカナダを公式訪問し、トルドー首相の歓迎を受けた。

こうした一連の訪問と会談の中で、両国首脳は経済関係の積極的強化策を検討し、〝経済協力〟の考えにもとづいて、両国の間により好意的風潮と親密な対話を実現した。一九七六年十月に三木首相とトルドー首相の間で調印された経済協力大綱では、互いに利益となるようなプロジェクトや取引上の取決めを行なうために、民間部門でより友好的風潮を作り出すことを謳っている。この問題に関するカナダ側の目的をいくつかあげてみると、



一九七六年に来日したトルドー首相は、日加経済協力大綱に調印した。

合弁事業の促進、天然資源および加工品ないし技術製品の開発・販売における協力、農産物の生産供給の安定化、投資の増大などである。七六年の協定で設立が決められた合同経済委員会は、一九七七年六月にバンクーバーで第一回会合を開いて、両国経済関係の進展状況を再検討し、一層の協力が可能な部門（エネルギーおよび資源、製造業および林産品、農業）を明らかにした。第二回会合は、今年三月、東京で開かれた。

民間部門でイニシアチブがとられたのは、一九七七年末にカナダで結成された日加経済人会議カナダ委員会である。これはカナダ側の委員会で、日本側の同種の機関と昨年五月に東京において第一回日加経済人会議を開いている。この第二回会議は今年の五月にトロントで開かれる予定である。

両国の全般的関係の中でも、経済（特に貿易）関係の重要性が圧倒的に大きいことは昔からの伝統でもあり、当然である。しかし最近は、政治や文化を含むあらゆる活動領域での関係を拡大しようとする努力が行なわれている。こうした目標は一九七四年のトルドー・田中会談で合意され、その後七六年のトルドー首相訪日の際にも再確認された。

国会議員の交流も盛んで、一九七六年三月には、衆参両議院の有志が日加議員連盟を結成している。

政治的きずなの強化については、政府高官の相互訪問と協議を通じて、国際政治経済の重要問題に関する両国の意見を定期的に交換する努力が行なわれてきた。このことはつまり、日本が世界の大国であり、指導的な工業民主主義国であると同時に、同じ太平洋沿岸国としてカナダの良きパートナーであることを、カナダが認めているということにほかならない。

文化の面での関係を一層強化発展させることが、お互いの認識を高める上で大いに役立つことが広く認められ、一九七六年十月には文化協定が調印された。双方の歌手、舞踊家、音楽家、アーチストが大勢、相手国を巡業したし、学術教育の分野では中等教育後の学生の交換計画が施かれ、大学生や大学教師の相互接触が進んで、カナダの教授が日本の大学で教えたりしている。日本では「カナダ学会」も発足した。こうした一連の文化的関係を通じて、日加両国の関係は深まり、また豊かになった。その効果は、今後さらにでてくるだろう。

✿私とカナダ✿

最長老ホッケー・チームのカナダ遠征

満大メモリアル・オールド・タイマーズ
マネージャー　松井　一夫

一昨年十二月の「カナディアン・オールドタイマーズ・ホッケー・ニューズ」紙は、第一面に大きな写真とともに、「世界一長老」のアイスホッケー・チームがブリティッシュ・コロンビア州の一チームと対戦することになった、と報道した。

世界一の長老チームとは、わが「満州医大ドクターズ・チーム」のことである。選手の平均年令（当時）が六十才。一番上はキャプテンの庄司敏彦氏で六十八才、一番若いのが五十才であった。

われわれは、その翌月、アイスホッケーのメッカであるカナダに入り、バンクーバー近郊の競技場で、およそ千人の観衆の大声援と大拍手を浴びながら、地元の「コキトラム・アンバサダーズ・オールド・タイマーズ」と熱戦を演じた。始球式をしてくれたのは、アイスホッケーの殿堂入りをしている往年の名選手サイクロン・テイラー氏である。九十三才というが、まだかくしゃくたるものだ。氏は、八十三才ぐらいまでユニホームを着て試合に出たという。われわれも「負けてはおれないぞ」と発奮したものである。また日系二世の西君ほか四人が、われわれのチームに加わって援助し、試合を盛り上げてくれたことも忘れられない。

さらに、官民合同の歓迎パーティーやコキトラム・チームの歓迎会で、心温まるもてなしを受けた。

今年の三月中旬に東京品川で開かれた第四回オールドタイマーズ・アイスホッケー世界大会にも、われわれのチームは「満大メモリアル・オールドタイマーズ」と名称を新たにして出場した。この大会では、カナダから九チーム、日本から十チーム、フィンランドから二チームが参加、三十五才以上の選手たちがかつてとった杵柄ならぬ、ステッキで技を競った。わがチームは、キャプテンの庄司氏（今年七十才）を中心に、平均年令五十七才。いずれも満州で一緒にスケートをした先輩後輩の仲間である。

チームのルーツは、日本におけるアイスホッケーの草分け時代を開拓した「満州医大アイスホッケー部」。満州医大アイスホッケー部は、一九二三年（大正十二年）に結成され、一九二八年には全日本学生選手権大会で、また翌一九二九年には全日本選手権大会で優勝するなど、輝やかしい記録を残した。一九三〇年には、単独チームでヨーロッパに遠征、シャモニーの世界選手権大会に参加している。日本チームとしては、初出場である。大学チームが海外遠征した例は、その後ない。

一九三六年に開かれた第四回冬季オリンピックに、日本は初めてアイスホッケー・チームを派遣することになった。その主力となったのが、わが満州医大アイスホッケー部の選手であった。そのとき活躍した庄司、平野（六十九才）、山口（六十六才）の各氏は、今度のオールド・タイマーズ世界大会にも出場して、往年の名プレーを見せてくれた。

日加関係の回顧と展望

日本カナダ学会会長
馬場伸也

多くの日本人にとって、いまだにかなり未知の国カナダは、一般に想像されているよりも、遙かに大きく日本史の展開に寄与してきた。そこで日加国交五十周年を記念するにあたって、まず日本とカナダの関りを概観し、それを踏まえて、両国関係の将来を展望してみたい。

日本がオタワに公使館を開設したのは、一九二八年七月二十日であり、カナダが東京（現カナダ大使館所在地）に公使館を開設したのは、その翌年の五月二十一日のことであった。しかし、非公式の日加交渉史は、それよりも更に半世紀も昔に、カナダ・メソジスト・ミッションが来日した時から既に開始されていた。

一、戦前史断片

(1) カナダ・ミッション

カナダ・メソジスト教会伝導局が二人の宣教師、ジョージ・カックランとデービッドソン・マクドナルドを日本に派遣したのは、「切支丹禁制」の高札が撤去されてまもない一八七三年（明治六年）のことであった。カナダが独自で外国伝導を開始した「事始」である。カックランは、『西国立志編』『自由之理』を訳述し、日本の近代化および自由民権運動に貢献した中村正直、第二代日本メソジスト教会監督として伝導と教会発展に尽した平岩愃保、同志社社長となり（一八九七年）、のち政界でも活躍した横井時雄らを入信に導いた。マクドナルドは、日本最初のメソジスト教会である静岡教会を創立したほか、静岡病院の顧問医として西洋医学の指導と診療にも寄与すること大であった。静岡教会からは、のちに明治期を代表する史論家、評論家の一人となった山路愛山、明治キリスト教会最大の遺産の一つといわれる『基督教大辞典』を完成した青山学院長の高木壬太郎、北村透谷と協力して日本平和会を創立（一八八九年十一月）し、日本の平和運動の先駆者となった加藤万治等が輩出した（透谷もカナダ・メソジスト・ミッションと交渉があった）。

カックランとマクドナルドがまいた伝導の種は、その後多数の後継者を得て、東京、静岡、山梨、長野、関西一円に大きく成長していき、明治末期にはカナダからの宣教師の数は延べ百数十名にも達していた。このほか、カナダ・メソジストは日本の慈善事業や近代教育、とくに女子教育の発展にも貢献した。カナダ・メソジストが直接あるいは間接に育成した学校に、東洋英和学校、その普通科として成長した麻布中学、関西学院、青山学院、東洋英和女学院、静岡英和女学院、山梨英和女学院がある。このようにカナダ・メソディズムは、アメリカのピューリタニズムやイギリスのアングリカニズムと並んで、明治期のプロテスタント宣教をささえる三本柱の一つであった。

(2) バンクーバー暴動と日英同盟の終焉

カナダ人が日本へやってきたのとは逆に、日本からカナダへでかけていく人々もいた。移民である。移民が激増しだしたのは日清・日露戦争のころからで、一八八九年にはおよそ三百余人にすぎなかったブリティッシュ・コロンビア州（以下B・C州）内の日本人は、一九〇三年には四千五百九十七人に達していた。一九〇七年には二千四十二人、一九〇八年には七千六百一人もの入国者があった。そこで突発したのがバンクーバー暴動事件である。

一九〇七年九月七日夜、「アジア人排斥同盟」主催の大演説会に、約五千名の聴衆が市役所講堂につめかけた。閉会後も興奮さめやらない白人労働者、無頼漢らは、群をなして中国人街、日本人街を襲撃し甚大な被害を与えた。事件はカナダ政府が被害者に賠償（約一万ドル）して一応の解決をみたが、さまざまな波紋を投げかけずにはおかなかった。

まずカナダ国内では、以前からあったB・C州とオタワ中央政府との対立をますます複雑化したこと、人種問題がカナダ国内・外交政策を動かす大きな一要因として把握されるに至ったこと（カナダの民族・文化的アイデンティティとしての「モザイク論」の一淵源）。国際的に

バンクーバーに着いた初期の日本人移民。

第1表　カナダの対日・対中貿易

	中国		日本	
	輸出	輸入	輸出	輸入
1915	294,251	1,042,383	963,631	2,783,465
1920	6,665,805	1,205,229	7,732,514	13,637,287
1925	7,838,187	2,521,874	22,011,088	7,005,056
1930	16,527,959	2,977,022	30,475,581	12,537,253

(出所) Lower, Canada and the Far East—1940, P.51.

は、従来相互にはほとんど無関心であった日本とカナダが、両国関係に繊細な注意を払うようになったこと、移民を自発的に制限する「ルミュー協約」が締結（一九〇八年一月二十日）されたこと、アメリカの排日移民ともあいまって、北米から南米へと移民の渡航先が大幅に変更されたこと、カナダが「日英同盟」を疑問視しはじめたこと、英加関係に微妙な軋轢が生じたこと、等である。そして、この最後の二点は、直接「日英同盟」をワシントン会議（一九二一～二二年）で「四国条約」に代替させる一動機としてつらなっている。

カナダは地理的にイギリスとアメリカの板ばさみにある「輪止め（リンチピン）」的存在であった。したがってカナダの外交は、伝統的に両者の圧力をぬってゆく「綱渡り」政策を維持してきた。カナダがいちばん恐れてきたことは、両大国の衝突にはさまって押しつぶされてしまうことであった。まさにその危機が、自国およびアメリカの排日移民問題と「日英同盟」の間に発生してきた。そこでアーサー・ミエン・カナダ首相は、ワシントン会議にさきがけて開催された英連邦会議（インペリアル・コンフェレンス）に出席し、同盟破棄を訴えたのである。「日英同盟」消滅にはもちろん他の諸要因も作用したが、カナダの役割も等閑にふしえない。

(3) 「十五年戦争」の時代

日加貿易が軌道にのりだしたのは、やっと第一次世界大戦のころからである。大戦は日加貿易を大いに促進したのみならず、両国の経済構造にも一大転換をもたらした。この期間にカナダの鉱業資源の開発と林業は飛躍的発展を遂げ、一方、日本の資本主義経済も活気づいた。それにつれて日本はカナダの資源を重視しはじめ、大戦後の不況にもかかわらず、カナダからの輸入は増大の一途をたどった（第一表参照）。とくにカナダの木材は、関東大震災後の復興に大いに役だった。こうしてすでに一九三〇年ごろには、日本はカナダの輸出にとって四番目に重要な国となっていた。満州事変以後、日本がいわゆる「十五年戦争」の時代に突入すると、カナダの資源（とくにニッケル）は、日本の軍需産業にとってますます必要欠くべからざるものとなった。

対日貿易を重視したカナダは、一九二九年日本に公使館を開設し、アメリカ、フランスについで三番目に日本と正式国交を樹立した。在日公使館の開設はカナダが環太平洋圏の一員となるさきがけとなった。カナダが他のヨーロッパ諸国をさしおき、独自の外交関係を日本ともったことは興味深い。しかしもっと重要な点は、それが親日、知日派外交官の早期養成に役だち、現在の日加友好関係（カナダ外務省には古くから「日本通」の外交官がいた）の基礎を築いたことである。

こうした経緯もあって、満州事変に際しても、カナダは他のヨーロッパ諸国より日本に好意的であった。「リットン報告書」審議をめぐる国際連盟特別総会（一九三二年十二月六日）でも、カナダはイギリスとともにもっとも穏健な態度を示した。日中戦争中も、カナダ政府は厳正中立主義を保持した。アメリカはすでに「スチムソン・ドクトリン」発表以来、日本の大陸侵略にたいして不承認政策をとっていた。もちろんこのころまでには、カナダ政府の対日態度もしだいに硬化してきており、その中立政策は、むしろ一つにはイギリスの対日宥和政策にひきずられたのである。いま一つの要因は、カナダ政府の現実的国益保護第一主義である。軍事的大国でないカナダは、紛争中の一方に味方して他方（とくに日本）から敵意をもたれることは、その安全保障に重大な危険をもたらすことになる。マッケンジー・キング首相は、「カナダ政府は、東洋であれスペインであれ、世界各地の人々の福祉に深甚な関心を寄せるものであるが、カナダ国民自身の福祉にこそまず関心を寄せるものである」とカナダの中立主義を説いている。

以上のようなカナダ政府自身の対日態度と国民一般の対日感情には、かなりのギャップがあった。反日感情はB・C州を中心に、すでに満州事変のころから再燃してきていた。加えて、カナダ政府の対日宥和政策は民間の反日感情をいっそう刺激することとなり、日系人への圧迫、迫害は激化した。そして日本の真珠湾攻撃は、ついにカナダ政府の日系人処理問題に決定的方向づけを与えた。カナダ政府は対日宣戦布告をするや、日系社会の指導者四十二名を「危険人物」として検挙した。十二月十六日には、帰化人、二世を含むすべての日系人を「敵国人」であると規定した。「敵国人」となった日系人は、翌年二月末、「国家安全保障」と、彼ら自身の「保護」という名目で、太平洋沿岸百マイル内の「防衛地帯」から総移動することを命ぜられた。

十八歳以上四十五歳までの男子は、道路工事や砂糖大根栽培に従事させられ、彼らの家族は遠く人里離れた「ゴースト・タウン」と呼ばれる廃鉱に抑留された。こうして、苦闘を重ねて築き上げられた日系移民の生活は、一挙にして水泡に帰してしまったのである。ときに、この運命にさらされた人たちは二万三千人ほどであった。なお、ドイツ系、イタリア系カナダ人は同様の受難をこうむらずにすんだ。

日本の敗戦がいよいよはっきりした一九四五年二月、戦争と偏見の犠牲となった人々に二つの選択が許されることとなった。日本にいくか、ロッキー山脈以東に再定住するかである。彼らの四分の三はカナダに居残ることを決意した。強制移動は、結果として、日系社会に二つの大きな変化をもたらした。一つはそれまでB・C州に集中していた日系人（全体の約九十二パーセント）がカナダ全域に分散し、日系社会はその後、トロント、レスブリッジ、モントリオール等でみごと開花したこと、いま一つは世代の交替をもたらしたことである。二世たちは意気消沈している彼らの両親をはげまして、雄々しく新生活の建設に立ち向かっていった。

二、戦後の日加関係

(1) 占領から講和へ

この時期におけるカナダの対日政策の基本方針は、㈠日本がふたたびカナダの安全保障や世界平和を脅かす国にならないようにすること、㈡日本を民主国家にすること、㈢日本の健全な経済復興をたすけ、将来における日加貿易の振興を期すこと、であった。カナダはおもに二つのルートを通じて、アメリカの占領行政に

関与した。極東委員会（SCAP）と東京に設置されたカナダ代表部（リエーゾン・ミッション）（または連絡ミッション代表）である。

極東委員会は、GHQの対日管理にさまざまな間接的影響を与えた。そのおもなものに、憲法改正、労働運動の合法化、民主教育、市民の自由の確立、経済的非軍事化および独占の排除、賠償、戦争犯罪人に関する裁判と処罰等々に関する問題があった。カナダ代表はこれらすべての討議に参加したが、とりわけ憲法改正問題では重要な役割を演じた。改正に関する基本方針案を打ち出すことになっていた同委員会では、各国の代表はまちまちに「絵に画いた餅」のような提案をなし、自国の意のままに日本を創り変えようとした。たとえば、アメリカはとくに三権分立の重要性を、ソ連は社会主義憲法を、イギリスは議員内閣制を、オーストラリアは天皇制の撤廃を強調した。この会議で議長を勤めることが多かったカナダは、齟齬する列強の意見とりなしに並々ならぬ努力を払った。日本国憲法は「マッカーサー憲法」とも呼ばれているが、極東委員会のこうした意向はSCAPにも伝達されており、右記の各主張はうまく調和を保って日本国憲法に反映されることとなった。

限られた紙面に極東委員会でのカナダの活躍を述べることは、列挙するさえ困難であるが、カナダは一般にイギリスと協調して、日本に対し寛大な態度（たとえば、賠償、戦犯、軍事的経済体制――同委員会ではどこまでが「軍事的」かが一つの争議の的であった――の破壊等に関して）をとった。また、きびしい対日態度を示すソ連、オーストラリア、ニュージーランド、フィリッピンと、独走しようとするアメリカの間、あるいは、ことごとに対立する各国代表間に介在して、つねに調停役をかってでたことも、カナダの一つの重要な貢献であった。一九四七年七月、極東委員会が「降伏後における対日基本方針」を公表した際、マッカーサー最高司令官は「これは近代史に残る偉大な文書の一つである。十一か国が多種多様な主張に分かれて、互いに融和することは不可能ではないかとの恐れは、これによって一挙に吹き飛んでしまった」と感嘆した。そこへ漕ぎつけ得たのには、カナダ代表（とくにレスター・ピアソン首席）の寄与が大きかったことを見逃してはならない。

在日カナダ代表部の初代首席（一九四六～五〇年）は、安藤昌益の研究や「日本における近代国家の成立」等の著作で高名なE・ハーバート・ノーマンであった。彼は豊富な知識をもつ日本専門家として、マッカーサーがもっとも信頼した数少ない相談役の一人であり、GHQの占領行政のうち、とくに民主教育、農地改革、労働運動の合法化にはノーマンの影響があったとみられている。けれども彼は、日本の文化的伝統の秀れた部分まですべて破壊して、日本を完全に「アメリカ化」することには反対であった。一国の政治、

ハーバート・ノーマン（大窪愿二氏提供）

✿私と カナダ✿

深まる日加交流の展望

日本経済新聞社トロント特派員
橋田　忠明

「冬を知らずして、カナダを語るなかれ」――。今、カナダは白銀の世界の中にある。日本から初の新聞社特派員として、トロントに常駐して、もう一年。会見を通じて知己を深めたカナダ要人たちは、私に誰もがこう冗談めかして忠告してくれたものだ。

五ヵ月もの厳しい雪に埋もれた生活。人々は仕事を終えると、家庭に直行、暖炉を囲んだ語り合いや、地域社会の各種クラブで人間的な交流を深めようとする。休日に南へ逃避する人々も多い。どんなエライさん(?)も、こと家庭やワイフのことになると、肩をすくめて見せる。冬をいかに過すか、そして、春を待望する心……。高度消費社会を実現しながら、半面では、先進国中の〝発展途上国〟と評される若いカナダの断面がここにも見てとれる。

カナダは、日本では「森と湖の清らかな国」のイメージが強く、昨夏は観光プームを呼んだ。米国や欧州各国に比べると、いまなお遠い国だが、ゆっくりながら着実に、独自の姿を世界の中で浮かび上がらせつつある。

先進七ヵ国メンバーの一国にもかかわらず、日本でカナダ関係の本は少ない。トロントで取材の第一線に立った時、驚きを覚えたのは、今度はカナダの人たちの「日本知らず」だった。アジアと言うと、すぐ中国を連想するカナダの一般大衆は、じっくり語ろうと日本に深い興味を示すのに、それは「自動車や電器製品に代表される国」だった。報道に日本関係は少なく、家庭交流で知り合ったカナダのある友人は「残念ながら、学生時代に日本について習わなかった」と言い、根が教育にまでさかのぼる点を示唆してくれたものだ。

だが、にごりなく見ると、その点に日本とカナダの次の時代や課題が象徴されているようだ。取材や家庭のつき合いで知るカナダ人の多くは素朴で、親切で、少し〝照れ屋〟である。人によっては、それが「カナダ人は融け込みにくい」との感想になる。が、俗に言う〝するめの味〟である。つき合ううちに、彼らが人なつっこく、しかもよく観察しているのに、こちらが言い出さないと奥ゆかしく黙ったままの側面につき当たる。日本人の国民性に通じる点をかい間見るのだ。

だから、この一年は日本を知らせ、カナダを知る一年だった。標語風に言えば、こうなる。「経済は米国流、生活・文化は欧州流」、「人々は国よりまず町や州、そして出身国」、「外交は国内問題（移民が多く、世界の出来事はカナダの各移民社会にはね返る）」、「何が起きても、資源があるさ」――。確かに、住んで見ると、カナダの社会にもダーティな一面や、無知からくる偏見もある。アト・ランダムに感じるまま挙げたが、予想以上に動く

日加両国歴代総理訪加・来日・首脳会談一覧

総理名	滞在期間	主要訪問地	主目的	主要随行員
サン・ローラン（国賓）	昭和 20.3.10～13	東京（世界一周の途次来日）	親善訪問（吉田総理と会見）	W・R・マーチン内閣次官補ほか10名
吉田茂	29.9.27～28	オタワ（バンクーバー立寄り）（米・欧州訪問の途次）	親善訪問	麻生夫妻 松井官房長官ほか
岸信介	35.1.21～22	オタワ（日米安保改訂条約調印の帰路）	親善訪問	藤山外務大臣ほか
池田勇人*	36.6.25～31	オタワ（米国訪問中訪加、26日NY経由30日帰国）	意見交換（ディーフェンベーカー首相と国際・日加関係問題・日加閣僚委員会の設置を含む共同声明）	小坂外務大臣ほか
J・ディーフェンベーカー（国賓）*	36.10.27～31	東京、大阪 京都、奈良	意見交換（池田総理と国際・日加間の問題討議、共同声明）	夫人、ほか10名
P・E・トルドー	45.5.25～29	東京、大阪 京都	万国博カナダ・デー出席（佐藤総理と会談）	J・E・ウォーカー総理府政務次官ほか17名
田中角栄 P・E・トルドー	49.4.7	パリ	意見交換	中山駐仏大使 カデュー・カナダ駐仏大使

（注）＊印は共同声明作成。

文化、社会形態は一夜にして改変できるものではなく、そんな試みは長い歴史的見地からすれば必ず失敗する、というのが歴史家ノーマンの持論であった。彼がカナダ代表部首席として強調した対日政策は、「歴史性」と「国民の総意の尊重」ということであった。

ノーマンの民意尊重の態度は、憲法改正問題にもっとも端的に表われている。新憲法が制定されて数か月後、極東委員会は憲法審査の権限に基づき、新憲法改正の是非を討議した。これを知ったノーマンは、新憲法の民主的性格擁護のため、と、それを日本の土壌に定着させるため、この動きに断固反対した。彼はさっそくその意向をオタワに打電し、カナダ政府はそれを同委員会メンバー国に伝達した。最初にイギリス、次いでオランダ、ニュージーランド等がこのカナダ提案に同意し、遂に極東委員会での新憲法改正論はそのまま立消えになってしまった。ノーマンがピアソン外相に宛てたこの電報には、憲法改正はあくまで日本国民の総意に基づいてなされるべきであることが強調されていた。この他ノーマンは、市川房枝、犬養健、河上丈太郎らを公職追放のリストから除去するようSCAPに懇請し、戦犯となった重光葵や東郷茂徳に関しては、その減刑を要請した親書をマッカーサー元帥に送ったりした。

アメリカが予想以上に早く対日講和問題をとりあげるようになったのは、㈠米ソ対立がしだいに激しくなってきたこと、㈡占領費が嵩むにしたがってアメリカ納税者の非難が高まってきたこと、㈢SCAPが長期占領は日本の自立をそれだけ遅らせ、さらに国民感情も刺激してむしろ逆効果になると判断しはじめたからである。しかしもう一つ重要な理由は、カナダとイギリスが早期講和を要請していたからであった。カナダが日本占領の早期終結を希望していたのには、おもに二つの理由があった。その一つは、軍事占領が続くかぎり日本に対するアメリカの圧倒的支配は免れず、それだけカナダの対日関係は大きな制限を受けること、第二には、自立した日本と早く自由に貿易を促進したいという願望をカナダが持っていたからであった。この二つの理由はともに、至極重要な含蓄を有している。すなわち、すでにこの時点で、カナダは日本――ひいては太平洋圏――へのアメリカの独占的支配を歓迎しておらず、カナダもそうした地域へ進出していく気構えが見られること。それは、カナダが将来の「環太平洋構想」と「アメリカ離れ」へ向って一歩前進したことを意味する。さらに対日関係で積極的に貿易を前面に打ち出してきたことも注目に値する。両者はともに戦後のカナダ外交に見られる新しい現象であり、そこには、貿易国として飛躍しようとするカナダの、新しい国家目標とナショナリズム（対米意識を含む）の胎動が顕現している。

以上見てきたように、カナダはアメリカとともに――オーストラリアやニュージーランドとは違って――日本が講和を目指して復興していくことを歓迎したが、アメリカとはその意図するところを異にしていた。アメリカが日本の保守政権を擁護し、日本に反共陣営を作るための軍事力の育成を望んだのに対し、カナダは日本に平和産業の復興に基づく貿易の振興を期待した。付記しておきたいことは、次項で述べるように、カナダはけっして反共でなかったのではない。ただ、日本と軍事同盟を結んで、東アジアに反共陣営固めをするような意図と能力と必要性を持たなかったのである。

(2) 友好関係の展開

一九五一年九月八日、講和条約の調印がなされて、日加間に正式国交回復が成立した。翌年の四月、在日カナダ公使館は大使館に昇格、アーサー・メンジスが代理大使となり、同時に在オタワ日本公使館も大使館に昇格して、前外務次官井口貞夫が大使として赴任した（六月）。トルドー内閣が誕生するまで、カナダの政権はサン・ローラン内閣からディーフェンベーカー進歩党内閣（一九五七～六三年）そしてピアソン自由党内閣（一九六三～六八年）へと移行した。その間、日加関係はなんら複雑な政治問題がないまま、友好裡に発展していった。両国関係がしだいに緊密の度合を増したことは、

きが速く、多様な現象の背後にうかがえる点である。そして、いま、静かながら、人々の心中に「かえでの葉（国旗）」が燃え上がりつつある。

私事で恐縮だが、最近、たて続けに取材する側の私が、「特派員特集を企画した」とテレビや新聞社から熱心な取材をされた。カナダに海外マスコミの支局は二十五あるが、その大部分がカナダ人スタッフに依存している。それが、昨年から今年にかけて、米国、ソ連、西独、日本と常駐が目立ち出したのだ。「ようやく、デイリーに世界の注目を集めるようになった」とは興奮気味のカナダ人記者の感想だった。

「出稼ぎの国」から「定住の国」へ。カナダの人達の心中にある想いは、歴史の中の事実をスピード・アップしながら、多様に創造し始めている。トロント大学のある学生がこうつぶやいたものだ。「何事も主張しなきゃあ損ですよ。だって、私達は解決のメルクマールを持つには歴史が若く、これから創り出すのですから」――。日本との次代のヒントもこの点にありそうだ。雪が融け出すと、私達は「外交半世紀」に足を踏み出す。

第2表　日加貿易の推移

（単位　100万カナダドル）

	対日輸出	対前年比(%)	カナダ総輸出	対日輸入	対前年比(%)	カナダ総輸入	対日輸出入合計
1958	105	(△24.5)	4,926	70	(13.8)	5,050	175
1959	140	(32.8)	5,140	103	(46.5)	5,509	243
1960	180	(28.3)	5,387	110	(7.5)	5,483	290
1961	232	(29.4)	5,895	117	(5.6)	5,769	349
1962	216	(△ 7.3)	6,348	125	(7.5)	6,258	341
1963	298	(38.2)	6,980	130	(4.1)	6,558	428
1964	332	(11.5)	8,304	174	(33.7)	7,488	507
1965	317	(△ 4.5)	8,767	230	(32.0)	8,633	547
1966	395	(24.5)	10,326	253	(10.0)	9,866	648
1967	574	(45.3)	11,411	305	(20.4)	11,075	879
1968	608	(6.0)	13,624	360	(18.2)	12,358	968

（出所）『カナダ事情』昭和47年、161～2ページ

前ページの「歴代総理訪加・来日首脳会談一覧」からもうかがえよう。

この間における日本の重大な外交目標は、国際社会に尊敬されるメンバーとして再登場することであったが、カナダはその日本の希望を実現するため、いろいろなかたちで側面からの援助を惜しまなかった。たとえば、一九五四年十月にオタワで開催された「コロンボ計画委員会」では、カナダの動議で日本の加盟が決定し、五六年十二月十八日には、日本はカナダ、アメリカの支持推挙を得て国際連合に加盟することになった。さらに一九五五年のGATT加入、六三年のOECD加入等に関しても、カナダは常に積極的に日本を支持した。

このように日本の国際的地位がしだいに向上し、国力が充実していくにしたがい、日本とカナダはたんに貿易問題にとどまらず、広く国際情勢一般に関して、平等の立場で、頻繁に意見交換を行うようになった。たとえば、第二回「池田・ディーフェンベーカー共同声明」（一九六一年十月三十一日）は、ドイツおよびベルリンを含む国際情勢、中国、東南アジア諸国および極東における一般情勢、国際経済の推移、とくに欧州経済共同体および経済協力開発機構を含む地域的グループ化の問題などに関して、両首相が討議したと発表している。また、すでにこのころから日加両国は、ともに核兵器問題に対して深甚な関心を寄せるようになった。

このように緊密な交流を通じて、日加間には友好的気運がもりあがる折から、一九六七年七月にはカナダ建国百年祭およびモントリオール万国博が催され、それに高松宮・同妃殿下が天皇の名代として出席し、日加友好関係に一層華を添えることとなった。同年には万国博見物をかねて、多数の要人を含む約一万九千名もの日本人がカナダを訪れ、日本のカナダ認識を高めることに寄与した。

（3）日加貿易の進展

戦後の日加関係を一貫して支えてきた強力な柱は、両国の相互貿易促進への期待であった。これに対するカナダ側の態度は占領期から明らかにされており、日本側でも、一九五四年、吉田首相がカナダを訪問する理由として、「カナダは無限の資源を擁しているというだけでなく、わが国にとってはもっとも信頼できる友邦の一つであり、将来わが貿易の相手国として大いに重視せねばならないからだ」と言明している。実際、日加通商協定が締結された一九五四年当時の日加貿易はカナダ政府の公表によると、輸出入あわせて一億千五百万ドル程度にすぎなかったが、その後十年を経て、一九六四年度には四億ドル以上に増大している。

一九五八年には、日加経済提携の最初の試みである銅鉱石の長期買付けを見返りとする設備資金の貸付契約（融資買鉱方式）が成立し、一九六四年には、いわゆる「稲山ミッション」がカナダを訪れて、日加経済関係のいっそうの発展と貿易の拡大を計った。一九五八年以降、トルドー政権に至る一九六八年までの日加貿易の推移は上の表のとおりである。

なおこの間、日本の経済発展に伴い、対加輸出品目にもおのずから変化がみられる。六四年当時の日本からカナダへのおもな輸出品は、繊維品、雑貨類、金属品で、機械類は全体の二十パーセント以下であったが、その後日本の対加輸出は自動車、テレビ、ラジオ、通信機器等の機械部門が増大し、七一年には全体の約二分の一を占めるようになった。

（4）トルドー政権下の日加関係

トルドー政権に入って、日加関係は一つの「新段階」にさしかかった。貿易面では、一九六四～七四年の十年間に、カナダの対日輸出は六・七倍、対日輸入は八・二倍に成長した。日本の輸出品目でも、一九七四年には機械類が全体の六十五パーセント、鋼材が約二十パーセントを占め、五、六十年代にみられた消費材中心の対加輸出とは大きくその様相を異にするようになってきた。一方、交流の面でも、トルドー首相自身二度も来日するなど、日加要人の交流はほとんど枚挙にいとまがないほどになった。

しかし、重要なことは、そうした量的拡大よりも質的変化である。すなわち、カナダは一九七二年のいわゆる「第三の選択」によって、日本をECと並んで最重要視するに至ったことである。この方

✿私とカナダ✿

生きている新渡戸博士

岩手放送最高顧問
（バンクーバー在）
福田常雄

奇縁というものがある。

日加国交五十周年記念号の原稿依頼のあったのは、丁度上高原桂子夫人に亡父の残された日記を読んであげる約束をした日であった。

上高原家は鹿児島出身で、下高原、新小田と共に日系カナダの名門といわれ、百年にわたって多くの逸材を送り、現に夫人の二人の子息も有能なドクターである。

しかし夫人の父は円入参之助といい、福岡出身である。

日記は簡単なメモではなかった。明治二十七年（一八九四）五月十五日、タコマ号で横浜を出る時からの「玄海漁人加奈陀見聞録」で、小さな字でぎっしり三冊の滞在日記だった。

出航以来二十五日目にバンクーバーに着いているが、『大日本帝国の代表者たる領事館が二階の借家住いとは情なく』と明治青年は嘆いていた。

先人の労苦は当地に来て見聞するが、長い両国の歴史で、友情で結ばれたのは僅か二十年しかない。今後の我々の任務は如何にしてこれを持続させるかの探究でなければならない。

私は郷里の先輩、新渡戸稲造博士のお話を昭和五年（一九三〇）、盛岡中学一年生の時聞いて感動した。博士は『太平洋は小流れである。これをはさんだ米加と疎遠になってはならない』と力説した。

博士の伝記を読むと、この頃国際緊張の進むのを恐れ悩んでいたのである。子供心にも壇上の温容と熱弁を覚えている。

博士が日本の立場を少しでも理解して貰うため、当地に見えたのは七十二才のときであった。しかしこの老軀を世は冷

鳩山外務大臣と握手を交わすジェイミソン外相（一九七七年）。中央はランキン大使。

針決定をみるに至った背景には、㈠冷戦→緊張緩和、多極化時代の到来という国際環境の変化、㈡トルドー首相のフランス系カナダ人としての外交ビジョン、㈢「アメリカ化」を防止しようとするカナダ国民のナショナリズム、㈣そのナショナリズムに基づくカナディアン・アイデンティティの模索、㈤日本・中国を含む太平洋地域への関心度の増大、等の要因があった。

このうち日本にとってとくに重要なのは第五の要素である。カナダは自国を太平洋地域の国家として位置づけるようになっており、このことはすでに大阪万博のカナダ・デーでトルドー首相が、「カナダ国民は太平洋地域を"Far East"としてではなく、"Our New West"として再認識すべきである」と強調したことからも明らかであり、一九七〇年の外交白書でもその一篇を「太平洋」にあてている。この方針は中国承認交渉→両国間の国交樹立（七〇年秋）や太平洋地域にある低開発諸国の積極的な援助等にも表われているが、なんといってもその機軸は対日関係である。カナダの「第三の選択」と「環太平洋外交」は表裏の関係にあり、「第三の選択」を実現するために環太平洋諸国、とくに日本との関係を強化し、逆に、日加間の貿易および友好関係の飛躍的進展や中国承認が、多元的国際関係の台頭ともあいまって、「第三の選択」を生み出す一つの誘発剤ともなった。一九七四年九月に発表された「田中・トルドー共同声明」や、一九七六年十月の「日加経済協力大綱」「日加文化協定」「三木・トルドー共同声明」等の一連の動きは、カナダ外交のこうした新しい枠組のなかで把握されなければならない。

ところが、最近になって、「第三の選択」は影をひそめた感がある。これは一つには、カナダの経済状態が悪化したことによる。一九七八年度の実質経済成長率は、当初、四・五～五パーセントと見込まれていたが、実際は三パーセント程度にとどまった。失業も三〇年代のそれに比類するほど最悪の事態となっている（七八年度平均八・五パーセント）。こうした状況は、カナダをしてアメリカと密接な経済提携を維持せざるを得ないことを再認識させることになった。第二に、ソ連の人工衛星がカナダ領土に墜落したことや、スパイ事件によるカナダ・ソ連関係の緊張が、一旦「アメリカ離れ」しかけたカナダを再び「アメリカ寄り」にした、ということもある。第三に、ケベック問題をはじめとする国内の分離・地域主義的傾向が、トルドー政権をして憲法改正等の国内問題の処理を優先させ、外交問題――とりわけ自主外交の理念など――は、目下、二の次になってしまったことも一因する。しかし、もう一つの要因は、いつまでたっても消極的で優柔不断な日本の対カナダ態度――カナダ側からすれば、一種の期待はずれ――にもあるのではなかろうか。

三、日加関係の展望

日加関係史を概観するとき、それは大きくは戦前と戦後に分けることができる。戦前の特徴は、両国関係が、日本にとってもカナダにとっても、一般に辺境（アーニチル）・周辺（ペリフェリー）問題として考えられていたことである。したがってその関係は、おのずから「断片的」でしかありえなかった。これに比べて戦後の特質の一つは、少なくともカナダにとっては、当初からその包括的対外政策の一環として日本を位置づけてきたこと、第二には、日本の外務省も認めているように、「戦前に比較して（カナダの対日感情が）著しく友好的」になったことである。この二つの傾向は時を経るに従って、しだいに顕著な現象となり、その帰結として、一九七六年には「日加経済協力大綱」や「日加文化協定」も締結されることになった。

しかし、こうした動きの「仕掛人」は、いつもカナダであった。日本の側にあっては、その「大国中心外交」は戦前も戦後も大差なく、最近いわゆる「資源外交」が展開されるようになってはじめて、対カナダ関係は辺境問題から脱出しつつあるように見受けられる。したがって戦後の日加関係は、表面的には緊密化の一途をたどってきたように見えながら、その実、もっと深い所で、相互に歯車が噛み合わないまま進行してきたのではなかろうか。この齟齬が、皮肉にも「日加国交五十周年」を記念すべき年にあたって、顕在化してきたようである。その証拠に、日加両国政府は、この外交史上非常に有意義な出来事に対して、なんと冷淡な態度――少なくとも現時点までは――をよそおっていることか。

この「ずれ」（アンタイクライマックス）の感を免れ得ないのは、根本的には、両国の外交理念の相違にある。戦後カナダは、いちはやくデービッ

い目で迎えた。博士の心境に想いを馳せる時、深い感慨を覚える。

先日ビクトリアのジュビリー病院を訪ねた。すでに博士を休ませてくれた当時の面影はなく建替えたようであったが、病院では私の拙画の寄贈を快く受けて下さった。これから想を練って描くつもりだが、このささやかな行為が、博士の鎮魂に役立てば、私が当地に来た意義もあろうかと思う。

ながい間念願していた病院の玄関に立った時、はからずも博士の死生観の記述を想起した。それは博士がメーテルリンクの「青い鳥」の芝居で印象に残るといった科白（せりふ）。

『死んだ人も、世の中の人の忘れている間は死んだというので、祈念してくれる人があると、そのたびごとに生き返るんだ』（中央公論、大正二年十月号）

博士は生きておられたのである。さればこそ博士没後、太平洋の橋は幻になったかも知れないが、かつて博士が予言したように、『我等の理想の誤らない事を示す』ように再び橋は姿を現わしたのである。

UBC新渡戸記念公園に隣接したアジア・センターも、工事が再開していた。これが完成すれば、太平洋のかけ橋はいよいよ強くなろう。

（右の絵は、筆者が描いた新渡戸記念公園）

ド・ミトラニーの「機能主義理論」をとりいれて、自国を「中間国」として位置づけた。それによると、国際政治は超大国のみによって独断的に支配されるものであってはならない。いかなる国家といえども、その能力に応じ相応の責任を果たすべきであり、独自性を最大限に発揮して機能的に国際社会に参加し、人類の福祉に貢献すべきである、とするものであった。この理念は、「ピアソン外交」に最も顕著に見られたが、その後、トルドー政権にも引き継がれてきた。そしてカナダは、常に日本を、そのような「中間国」のパートナーとして求めてきた。ところがその間、日本は、敗戦からのいちはやい復興、そのための対米一辺倒外交、そして「所得倍増計画」から「経済大国」にのしあがることに躍起となり、必要なときのみ、いわば利用するようなかたちで、カナダと接触してきた。

最近になって日本は、ようやく「経済外交」→「全方位外交」へと路線変更をしはじめた。この路線に沿って外交を推進しようとすれば、日本が従来以上にカナダを積極的に評価せざるを得なくなるのは必然である——日本の為政者のほとんどは、まだそのことに気が付いていないようであるが。ところがカナダの方では、もう「待ちくたびれた」感があり、その失望は、一九七六年秋のトルドー首相訪日では、隠しきれないものとなった。更にカナダは、現在、解決すべき国内問題を山ほど抱え、それも一因して「中間国」構想は色あせつつある。同時に、「アメリカ離れ」と「アメリカへの傾斜」との彷徨の中で、カナダは外交における自己規定を暗中模索の状態であり、しかもその一方で、「中間国」を脱皮して「卓越した国家」へと発展しようとする動き（例えばジェームス・エアー教授の意見）すら見られる。いずれにしても、目下カナダでは、以前ほどに日本に興味を示していないことは確かである。

このように見てくると、今年は「日加国交五十周年」とはいえ、手放しで喜こんでばかりいられないのが、日加関係の現状である。とはいえ、歴史は往々にして、一つの事件を契機として転換していくものである。中ソ対立といい、東南アジアの複雑な状況といい、開発途上国への援助といい、今こそ日本とカナダは、互いに「中間国」に徹することを確認しあって、「三木・トルドー共同声明」にもあるように「世界の平和と繁栄という共通の目標」達成に向って、協力するよう真に努力——声明を空文とすることなく——すべきであろう。「日加国交五十周年」という年を、両国のそうした積極的な提携の契機となるよう、歴史における意義ある転換点としたいものである。

✿私とカナダ✿

私の最初の外国生活

東洋英和女学院院長
光明照子

太平洋を船で渡り、続いてカナダ大陸を陸路横断してカナダ東部にあるMt.Allison大学に着いたのは一九三四年の秋、今から四十四年半も前のことであった。

日本とは比較にならぬ広大な国土と低い人口密度を大きな特色とするこの国の小さな大学で、唯一人の異邦人として異邦人特有の不安を胸に、三年間の生活が始まった。そこで私は、今日のいわゆる文化的ショックによって次第に視野も広がり、新しい価値観が生まれ、特に精神の自由と寛容について学ぶところが大きく、一種の精神革命を経験した。このように私にとって大切な母校となったMt.Aから、後日同大学における女子高等教育百年の歴史を記念してLL.D.を贈られた数名の人々の中に、私も加えて頂いたことをこの上ない光栄と感じている。

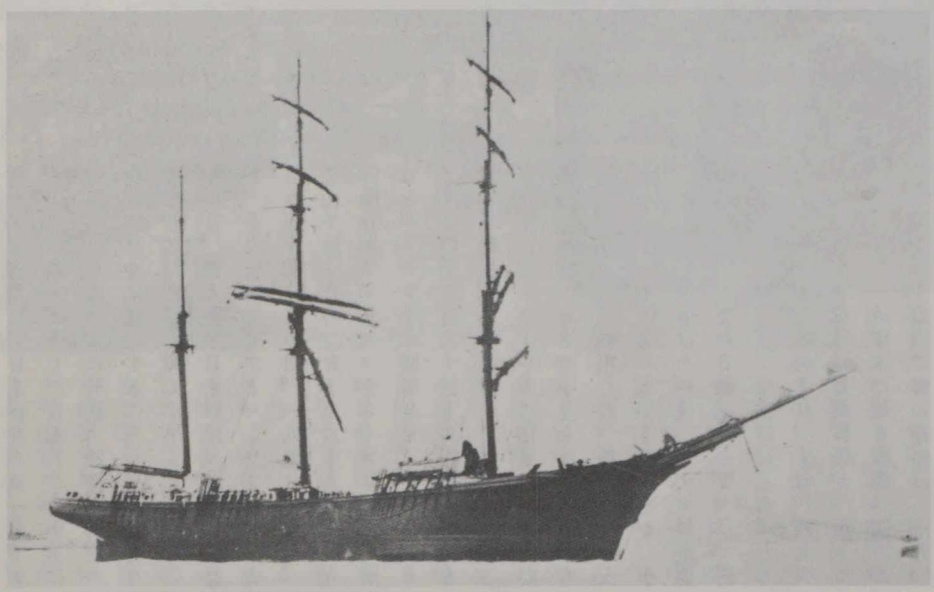
いうまでもなく、当時は東京も今日のような巨大都市ではなかったものの、Mt.A所在地のサックビルは余りにも小さくて面喰った。配達制度がなくて、郵便も新聞も住民めいめいが毎日村の小さな郵便局に受取りにいかねばならないのも、どんな山奥でも寒村でも配達制度のゆきわたっている日本で暮していた私には不思議に思えた。雨も雪も降るのに、一年中傘なしで暮せるというのも新発見だったし、お辞儀というものがなくて、日本でこの形に托す気持の表現に苦労もした。

かと思えば、寮ではヌードに近いいでたちで、わるびれもせず洗面所に往復する女子学生の姿に度胆をぬかれた。また入学後間もない頃、美術の教授に、珍らしいので、頼まれて和服を着てモデルの役をつとめた。思いがけず謝礼を頂いたが、紙にも包まずはだかのお金を手渡されて味わった屈辱感の処理に苦労した。他方、教授と学生の全く対等な応待ぶりに、「師の影を踏まぬ」心情との折合いも必要だった。文化の型の相違が、日常生活で具体的に風俗・習慣として表われるところで、これを正しく理解し納得して順応するのには、持ち合せの価値観や物の見方を見直し、いろいろな意味で無意識の文化絶対視を相対視へ変えねばならぬことを悟らされた。

このように文化ショックを経験しながらMt.Aで過ごした三年に、私は限りない愛着と感謝の念を抱いている。一般的に私を大きく成長させてくれたばかりでなく、そこで私は学生や教授や地域の人々から、ほんとうに人間味のある温い思いやりを受けながら、他方私の自立と自由を十分に尊重して貰えた。最初から客としてでなく、仲間として受入れてもらった。ことばの上でのハンディキャップがあるにもかかわらず、寮の委員などにも入学後間もなく選任されたように記憶するし、卒業記念のお別れの晩餐会の席で学長へ謝辞を述べる役も仰せつかった。一人の人間として受入れられているという感じが強かったから、安心してありのままの自分で皆と交わることができたし、人間の自立と自由の意味を体験的に深く学んだ。小さな大学であったMt.Allison全体に生きていた、個性と多様性を尊重する寛容な精神のお蔭であったと思う。

日加貿易・躍進の百年

現在は総額、年間53億ドルに



初めて日本を訪れたカナダ船「W.B.フリント号」

日本とカナダの貿易がいつから始まったか、はっきりしない。カナダの貿易統計に日本が初めて顔を出すのは一八七三（明治六）年であるが、その時はまだ中国と一緒に扱われていた。また日本の統計でもカナダは米国と一緒にされていて対加貿易の具体的な額はつかめない。

ようやく一八七六年になって、カナダ側の記録で対日輸入額が六十一万九千七百七十七ドルにのぼり、そのうち緑茶が五十九万七千七百七十七ドルを占めたことがわかる。カナダの対日輸出については、一八七八年、一万三千余ドルの工業製品が出荷されたことが記録されている。一八八六年におけるカナダの対日輸入額は八十七万六千二百八十三ドルで、そのうち緑茶は八十五万七千七百四ドル、対日輸出は木材と船のマストを中心に三万一千七百八十ドルだから、貿易パターンはほとんど変わっていない。

カナダ国旗を掲げて日本を訪れた最初の船は、三本マストの帆船W・B・フリント号。カナダ太平洋鉄道（CPR）が用船したフリント号（八百トン）は、一八八六年六月十九日、百万ポンド以上の茶を積んで横浜港を出発、大陸横断鉄道列車が初めてカナダを横断してからちょうど三週間目の七月二十七日、ブリティッシュ・コロンビア州ポート・ムーディに到着した。この航路がきわめて重要であることがわかり、CPRはまもなくアビシーナ号、バタビア号、パーシア号の三隻の貨物輸送船を定期便として周航させた。

アビシーナ号がバンクーバー港に入港したのは、バンクーバーが大火で焼け落ちてから一年目だった。バンクーバーはすでに再建され、ポート・ムーディに代わって大陸横断鉄道の太平洋側発着点として栄えていた。アビシーナ号が東洋から絹を積んで到着するという日になると、市長と市議会は歓迎式典を準備し、楽団をしたがえて埠頭にくり出す騒ぎだった。しかし、アビシーナ号は、霧と荒波のためイングリッシュ湾に避難して、夜中になってもバンクーバー港に現れなかった。パーティはやむなく夜中に散会した。積み荷は翌日、早速船からおろされて、鉄道でモントリオール、ニューヨーク、ボストン、シカゴへ輸送された。その後、バンクーバーを経由して栄えた絹貿易の歴史的な第一船であった。

日本は、一九〇〇年には、その外貨の四割を絹の輸出から得ていた。日本の絹輸出が最高潮に達したのは一九三四年で、北米市場を中心に六千七百万ポンドを輸出している。絹は、一九二七年にカナダの対日輸入額の六十二パーセントを占め、バンクーバー港およびカナダの大陸横断鉄道の発展に大きく寄与した。

カナダ太平洋鉄道は、以後四十年以上にわたって、急行列車で絹および絹製品をバンクーバーからニューヨークの工場へ輸送した。大陸横断の客用列車まで"絹輸送特別急行"に先を譲るほどで、ジョージ殿下（のちの国王ジョージ六世）も、そういう目にあった一人である。CPRが絹の輸送を急いだのは、それが一回分で平均三百万ドルもしたため、多額の保険金を払わなければならなかったからで

1891年

対日輸入		対日輸出	
緑茶	$1,051,449		
米	122,924		
絹、絹製品	22,723		
紅茶	19,842		
陶器	8,850		
小間物	4,878		
紙製品	2,180	林産品	$10,253
果物、みかん	1,139	石炭	4,664
合計	$1,233,985	合計	$14,917

ある。日本からニューヨークまで、たった十三日で着いたこともあった。

絹の輸入は、世界大恐慌や合成繊維の開発により、だんだん少なくなり、特別列車は一九三九年を最後に廃止された。しかし、それでも絹貿易はカナダにとって、一般に考えられていたより重要性をもっていた。またカナダ太平洋鉄道会社も、そのおかげで不況を乗り切ることができた。

日系移民の役割

一八七七年に、長崎県出身の永野萬蔵がブリティッシュ・コロンビアへやってきた。記録では、日系移民の第一号である。それ以来、多くの日本人がカナダに移住し、日加関係の発展、特にカナダの物品を日本に輸出するに当って、重要な役割をはたした。例えば早くも一八九〇年には、何人かの日系移民が日本と貿易し、またビクトリアとバンクーバーに骨とう店を開いていた。一八九一年には、鉱山で働くため、およそ六十人の日本人労働者がブリティッシュ・コロンビア州カンバーランドに到着した。その年、カナダは四千六百六十四ドル相当の石炭を日本に輸出している。

翌年、バンクーバーに住む一日本人がカナダ小麦をはじめて日本に輸出した。額はわずか三千ドルと小さかったが、小麦はその後、カナダの主要な対日輸出品となった。同じ年、塩漬けにしたにしんが輸出され、また一八九六年には日系移民が三百トンの塩漬け鮭を故郷へ送った。塩漬け鮭の輸出は、一九〇六年には七千トン、二十万ドル、塩漬けにしんは五千トン、七万五千ドルに達している。商才に富む日系移民は、また一九〇三年にドーグラスもみ（米松）を大規模に対日輸出した先駆者でもある。日本はその後、カナダ産木材の一大市場となった。

長い間、日本の対加輸出品として最も知られていた

日本向けに箱積めされる塩漬け鮭。

✿私とカナダ✿

日加関係への提言

岩崎力資源経済事務所
（トロント）
岩崎 力

去る十二月の初旬、私の事務所はカナダの大政党の一つであるPC党（保守党）からの短い書簡を受け取った。同党党首クラーク氏一行が訪日するに際して所見あれば開陳あれ、との趣旨である。私の事務所は金属資源やエネルギー資源の国際的な諸問題の海外での研究室の様なもので、日加間の経済貿易問題あるいは知的交流の問題等についてもいくつかの論文を発表したりもしている。そこで、日加間の社会構造の相違（つまりクラーク氏の様な少壮政治家が日本では何故大政冥の党首になり得ないか、云々）両国間の経済成長差の問題など、七つの項目について私見をまとめたレポートを提出した。この中で私が特に重点をおいたのは下記の三点であった。

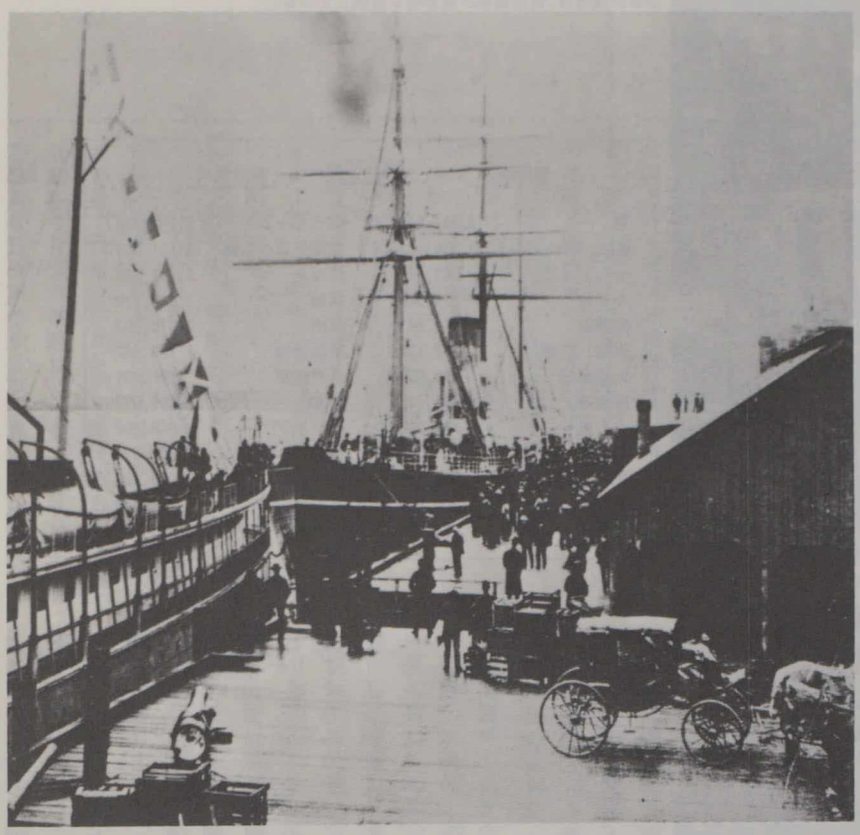
（一）日本におけるカナダという国のイメージの問題

この問題は前に、「カナダは新しい国か」という私の小論でもふれたことがあるが、日本で知られているカナダという国のイメージはいささかいいことづくめで逆効果を生んでいる面もある。つまり、一方では限りない森と湖とロッキーという美しい自然のイメージがあり、他方では高度の経済社会と生活水準、加えて建国以来百余年の「新しい国」であり、かつまた、国際舞台では自由な外交姿勢と南北問題のリーダーとして知られる…。おそらく、現在の世界諸国の中でカナダほど立派なナショナル・イメージが日本で宣伝されている国はあまりないのではないだろうか。

多くの男性があまり完璧な女性にややもすると親近感を持てないのと同様に、あまり上等なナショナル・イメージは二国間関係において一種の心理的な反発をまねきかねない。先進国たると後進国たるを問わず、どの国もその国なりのアゴニー（苦悩）がある。経済的な成功をもてはやされた日本にも当然さまざまな苦悩はある。カナダにも現行の連邦制度の基本的な諸問題、長い歴史的背景をもつ英仏両系人の確執、少数民族の諸問題、世界一の借金国となった悩み等々、さまざまなアゴニーがある。おたがいにその苦悩をぶちまけあってこそ、真に親近感のある二国間関係ができあがるのではないのか。

（二）「国際性」についての認識

私の判断では北米の一部の人々よりもどうやら日本人の方が広い意味での国際性を持っているように見受けられる時代になった。これはどちらがすぐれているということではなく、豊かな北米の一部では外国のことなどどうでもよかったという過去を反省してみる必要があるということであろう。日本人が国際性を持ちはじ



日本―カナダ航路を往復した、カナダ太平洋鉄道会社の「パーシア号」。1888年、バンクーバー港で。

対日輸入	1906年	対日輸出	
茶	$562,317		
絹、絹製品	471,565		
米	139,952		
陶器	95,771		
亜麻仁、ジュート、麻加工品	58,691		
じゅうたん	35,584	魚、加工品	$153,733
セメント	28,252	金属、鉱物および製品	90,549
ほうき	24,238	木材および加工品	67,010
みかん	10,980	小麦粉	64,131
その他	235,580	その他	115,952
合計	$1,662,930	合計	$491,375

温州みかんが、バンクーバーの日系商人によって初めて輸入されたのは一八九一年のことである。最初は日系移民だけに売られていたのが、ブリティッシュ・コロンビアの一般の人々の間でも評判を呼び、今では特にクリスマスの時期になると、カナダ中で喜ばれている。

その頃、カナダの対外貿易は英国と米国が大半を占めていた。例えば一九一〇年におけるカナダの対外輸出のうち、英国は五十パーセント、米国は三十七パーセントを占めていた。対日輸出はカナダの輸出総額の〇・一パーセント（六十五万九千ドル）に過ぎなかった。また対外輸入でも、英国が二十四パーセント、米国が六十パーセントを占め、日本はわずか〇・五パーセントであった。

カナダの対日輸入は、一八九六年度に茶が百四十万ドル、絹が十六万二千ドルに達するなど、順調に伸びていったが、対日輸出はきわめて少なく、石炭九十四ドル、タバコ七十五ドル、板六千ドルという具合であった。しかし、次の新聞記事が示すように、対日輸出を拡大していく可能性に対しては認識が高まっていた。

対日輸入	1926年	対日輸出	
絹、絹製品	$5,724,149	小麦	$16,361,109
茶	646,127	精銅、銑鉄	4,270,276
米	450,890	紙パルプ	2,280,688
陶器	332,951	亜鉛鋳塊	1,668,026
みかん	220,675	乾燥および塩漬け魚	1,473,753
ほうき	169,921	丸太	1,102,915
ボタン	162,635	板	950,433
乾燥および塩漬け魚	117,729	アルミニウム、加工品	864,289
豆	106,254	桶皮、鏡板	828,895
綿織物（色もの）	91,883	角材	817,189
その他	1,540,860	その他	4,077,289
合計	$9,564,074	合計	$34,694,862

「カナダ政府はわが国の対日輸出を大拡張できるものと信じている。また総理大臣の伊藤（博文）侯も、カナダは農産物および酪農製品に関して日本と幅広くかつ利益ある貿易を確立できるだろう、と述べている。日本では、バターやチーズを生産し、肉牛を飼育することは経費がかかり過ぎるので、折り合いさえつけば、カナダはこれらの農産物を輸出してかなりの利潤を上げることができよう。日本市場にこれまで働きかけがなされてないのは、ただカナダ人の無関心のせいだ、と伊藤侯は述べている。日本では木材は稀少かつ高価であり、カナダ産材木の需要もあるはずだ」（「バンクーバー・デイリー・ワールド」一八九七年六月十一日）

一八九四年に日本と英国の間に結ばれた通商航行協定は、一九〇二年までカナダには適用されなかったが、その後日加間の貿易拡大を大きく促進した。日英両国は、また一九〇二年に同盟を結成した。これは大英帝国の巨大な力と権威ゆえに、また日本が大国として将来の役割

めた動機はユダヤ人のそれと類似している点もあり、その意味でイザヤ・ベンダサンは一読の価値がある。

（三）日本からの資金誘致策

日本からカナダへの投資が一部の資源関係の事業分野を除き一向に増えないが、ひとつアプローチを変えた提案をしてみたらどうか。たとえば思いつきだが、日本の企業には今、窓際族と言われる高給の、しかも技術的な蓄積の高い人達の処遇に苦しんでいるときく。これらの人々に、企業や日本政府の後押しも得てその資産共々カナダに来てもらって、新しい事業を起こすことは考えられないか。元来、資本の輸出には雇用問題のブーメラン効果はある程度必ずつきまとう。経済的にも技術的にも基盤のあるこれらの人々が多くカナダに来れば、日本の対加資本の輸出機会を増大させ、長期的には必ずカナダの雇用促進にも役立つだろう。

第一の問題については、先年発足した日本のカナダ研究会が今後果す役割は大きいだろう。クラーク氏が私の事務所の意見をどの程度とり入れたか私は知らない。同氏はイザヤ・ベンダサンの「日本人とユダヤ人」を読む時間があっただろうか。また日本でMADOGIWA-ZOKUについての提案をしただろうか。

バンクーバーでのパレード(1926年)。
山車の横幕は、対日貿易の重要性を強調している。

対日輸入	1939年	対日輸出	
茶	$392,557	純ニッケル	$8,792,740
亜麻仁、麻、ジュート、加工品	338,622	アルミニウム棒	7,801,052
いわし缶詰	247,098	鉛地金	2,672,322
みかん	225,961	純銅	2,383,122
綿織物	217,967	石綿	2,070,903
陶器、焼物	202,434	亜鉛鋳塊	1,273,662
人絹織物	178,691	くず鉄鋼	565,201
絹織物	164,721	丸太	469,677
おもちゃ	138,232	紙パルプ	448,902
綿製ハンカチ	138,059	生皮	202,378
電燈	113,318	乾燥・塩漬けにしん	189,155
その他	2,506,880	その他	1,298,493
合計	$4,864,540	合計	$28,167,607

を認められたものとして、日本では熱烈に歓迎された。英国は、一九一一年、日本とさらに新しい通商航行協定を締結する。同協定は一九一三年にカナダにも適用され、日加貿易に新時代をもたらすことになった。

一八九九年、日本の対外輸出は総額二億一千五百万円に達した。そのうち、対米輸出額は六千三百九十万円と全体の三十パーセントを占めた。"英領アメリカ"(すなわちカナダ)への輸出額は、二百三十五万円、すなわち全体のおよそ一パーセントであった。輸入は、総額二億二千万円。米国のシェアは二十パーセントで、英領アメリカのシェアはわずか十分の一パーセント弱(十八万二千余円)に過ぎなかった。しかしながら、順調な日加貿易の基礎は確立され、その後、カナダ経済の発展および日本の近代化、工業化と並行して貿易も伸びていった。

例えば、カナダの対日小麦輸出額は、一九〇三年の二千百六十七ドルから翌年は十四万八百十五ドルと大きく飛躍し、一九二二年には実に三百十一万六千百二十一ドルへとふえている。一九二六年になると、輸出量千百五十二万七千ブッシェル、額にして千六百三十六万千百九ドルを記録し、日本はカナダ最大の小麦市場のひとつとなった。

関東大震災と大恐慌

また塩漬け鮭の輸出も上昇を続け、一九二六年には塩漬けにしんと合わせて、輸出額は百四十万ドルに達している。一九二〇年代に入って、林産品の輸出も伸びた。一九〇四年に十万ドルに満たなかった林産品の輸出は、一九二二年になると二百万ドルを超えている。米松と杉が中心であった。そして翌一九二三年に日本で関東大震災が起こると、カナダ産の丸太や木材に対する需要が一挙に高まり、その年の輸出高は前年の二倍にのぼった。一九二四年の林産輸出は、それをさらに上回り、五百七十万ドル相当の杉材、米松、米つが、とうひなどが日本に送られている。また大地震の年には小麦の輸出額も二倍以上に増えた結果、カナダの対日総輸出額は二千六百九十三万一千八百六十ドルと前年の二倍に達した。赤字続きであったカナダの対日貿易は、一転して黒字へと変わり、また日本はカナダ第四の輸出相手国へと飛躍した。そのとき以来、カナダの対日貿易は、今日に至るまで輸出超過となっている。

一九二六年における日加貿易は、カナダの対日輸出額が三千四百六十九万一千八百六十二ドル、対日輸入が九百五十六万四千七十四ドル。カナダの主な輸出品は小麦(全体のおよそ半分)、鉛、亜鉛、木材パルプ、乾燥・塩漬け魚、木材および丸太、アルミニウムなどとなっており、そのパターンは現在と大して変わらなかった。

カナダの対日輸入品の筆頭は絹織物(全体の約六割)。そのほか、茶、米、みかんなどの食品、綿製品、陶器やランプ、おもちゃなどの家庭用品をカナダは輸入していた。

やがて世界は大恐慌へ突入する。世界経済は崩壊し、日本も大きな打撃をうけた。物産市場や株式市場は崩れ、数多くの中小企業が倒産した。失業者はあふれ、また米国の巨大な絹市場の相場が暴落するとともに、日本の農業地帯も不況の波に洗われることになった。経済不況は、ヨーロッパや極東における政治的不安定

対日輸入	1951年	対日輸出	
鉄板圧延プラント	$1,174,000	小麦	$29,478,000
絹、絹製品	1,034,000	紙パルプ	16,946,000
焼き物	994,000	大麦	7,459,000
魚、水産品	903,000	アルコール飲料	5,011,000
みかん	876,000	亜麻仁	3,433,000
おもちゃ、人形	669,000	石綿および加工品	1,708,000
綿、綿製品	593,000	ウールおよび製品	961,000
鉄合金	492,000	小麦粉	877,000
家庭日用品	455,000	鉄鉱石	821,000
毛皮	435,000	石炭	814,000
その他	4,952,000	その他	5,471,000
合計	$12,577,000	合計	$72,979,000

が増大したことにより、さらに悪化した。

恐慌が荒れ狂った一九三二年、カナダの対日輸出額は全盛期（一九二八年）の三千八百六十九万六千五百九十二ドルの三分の一に満たない千百九十九万五千八百八十七ドルに激減した。一九二九年に千三百三十二万四千百六十一ドルを記録した対日輸入も、一九三五年には三百五十六万五千百二十六ドルへ落ち込んだ。

一九三〇年代における日本の対加輸出は、絹貿易の大幅縮小から回復することはなかった。ナイロンが開発されたからである。日本綿製品も、アジア各国から追い上げられていた。

一九三九年、最後の絹輸送特別列車がカナダを横断した。日本の対加輸出は一九四〇年に五百八十八万七千三百三十ドルに回復しただけだった。カナダの対日輸出は三〇年代にかなりもち直し、一九三九年には二千八百十六万七千八百九十二ドルに達したが、戦雲がアジアをおおうようになると、翌年はその半額に減った。

一九四一年、太平洋戦争が勃発した。ようやく確立され、大きな発展が期待された日加貿易は、戦争によって中断されてしまった。

戦後、日本は灰じんの中から奇跡的に立ち上った。

占領軍当局は、日本経済に活力を吹き込むために、外国のバイヤーに日本訪問を奨励した。カナダからも、おもちゃ、織物など各種の品物を買うため、多くのバイヤーが日本を訪れた。日本の対加輸出は次第にふえ、一九五〇年には千二百万ドルに達した。綿製品（三百八十万ドル）を筆頭に、絹およびその他の織物、おもちゃ、人形、みかん、陶器が主な対加輸出品であった。日本の輸入は厳しい外国為替管理によって制限されていたが、一九五〇年にはカナダから二千万ドル相当の品物を輸入している。

戦後の発展

一九五〇年六月に朝鮮戦争が勃発し、日本経済に予期しないブームをもたらした。生産性は一挙に一九三四～六年頃の水準を抜き、日本は輸入をふやすことができるようになった。日本の対加輸入も、一九五一年に七千三百万ドル、一九五二年には一億三百万ドルに急増している。

カナダは、やがて、復興を遂げた日本からカメラ、双眼鏡、測量機器、顕微鏡などを購入するようになった。これらはいずれも品質がきわめてすぐれていて、カナダにおける日本製品のイメージを高めた。

一九五二年、日本はトロントのカナダ国際貿易博覧会に初めて参加し、さまざまな製品を出品した。それ以来、カナダで開かれる大手の貿易展で、日本の製品は必ずといっていいほど顔を出している。

✿私とカナダ✿

次なる日加関係を想う

日加経済人会議日本委員会会長
槇田久生

日加国交樹立五十周年と伺い、カナダという国の若さを今更ながら感ずる一方、私個人のカナダとの関係がすでに二十有余年に及んでいることを想うと、或る種の輻輳した感慨にうたれるのである。

私共鉄鋼業が、原料供給先の多様化を計る為にカナダの石炭開発を手がけて、初めての出荷がなされたのは一九五八年、トン数にして僅か五千トンにすぎなかった。それが二十年後の一九七八年には、不景気の最中とは言え、千六百万トンに及ぶに至った事実ひとつを見ても、日加両国間の交易状況が、いかに加速度的に拡大されたか、理解されよう。

いろいろな意味で、今日迄五十年間の日加交流は、日本から見る限りにおいては無難で問題の少なかった時代であったと言えるが、カナダには、資源・素材を日本に売り、日本からは製品がカナダに流入するというのでは面白くないという見方もあるようだ。しかし買い手のない資源は、路傍の石にすぎず、また付加価値が少ないといっても、恒常的資源輸出による外貨獲得は、カナダ経済にとって多大の貢献をなしていることも事実であろう。

ビジネス、或いは貿易というものは、「ねばならぬ」という建前論で取り扱われるものでなく、むしろ、売り手買い手双方の希望条件がマッチした時に初めて合意・契約に至るものである。したがって、いたずらに声高く、プロパガンダを打ち上げるよりは、案件ごとに問題点を解決していくという態度が何よりも大切だということを、我々日加双方の当事者が肝に銘じているわけで、この点でも無用の葛藤を避けてきたと言えよう。

具体的な問題点を卒直に話し合うことが日加両国にとって今何よりも必要なのだ、という問題意識にたって、一九七六年訪加した私共使節団はカナダの官民の方々と意見交換を行った。私共旅行者の見た印象、それは、或いは近視眼的であったかも知れない。間違った意見もあったであろう。しかしながら、「何を考えているか判らない、無発言をきめ込む日本人」と評されがちな私共が、自分達の考えをストレートに申し上げたことが、何かしら新らしい動きを起す「引き金」になったのも事実ではなかろうか。

その際、私共は日加経済人同士による恒常的話し合いの場を組織することを提案した。その結果、幸いにも、カナダ東西実業人のトップの方々を網羅する第一回の会議を、昨年東京で開催することができた。この会議が成功であったか否かは、当事者である私が客観的に評価出来るものではない。ただ、我々が積極的に日本経済が内包する問題点、日本市場のメカニズム等について、カナダの友人の方々にご理解頂くべく、全力を尽したことだけは事実である。また連日顔をつき合わせているうちに、相互間により深い人間性の理解が芽生えてきたことも確かである。国と国とのつき合い、あるいはビジネスといっても、所詮は人間同士のつき合いであってみれば、コンスタントに同じ顔が話し合い、自分の会社の問題を話し合い、弱さを補い合えるような関係にまで発展出来るならば次の五十年の日加関係は期して待つべきものがあると言っては、抒情派ビジネスマンとの誹りを受けることになろうか。

セント・ローレンス川を航行してトロントに寄港した日本の商船(1959)。

一九五四年には、バンクーバー市商議所の貿易視察団六十二人が日本の主要五市を訪れてブリティッシュ・コロンビア州と日本との貿易振興を図ったほか、両国の間で通商協定が結ばれるなど、日加双方が相互間の貿易に高い関心をもっていることを示した。通商協定によって両国は互いに「最恵国待遇」扱いすることになった。またカナダの業者が損害をこうむらないよう、日本はカナダで秩序ある市場開発をすることに同意する一方、小麦、大麦、木材パルプ、亜麻仁、銅鉱石、鉛地金、亜鉛鋳塊、合成樹脂、粉乳の九品目の輸入を認めた。

一九五六年、日本貿易センターがトロントでオープンした。ときの通商産業大臣C・D・ハウは、その意義を高く評価した。日加貿易の将来性についてこう述べている。

「日本はカナダ物産のいい顧客である。今後はさらによくなるだろう。(中略)両国間の貿易が、双方の利益となるようにさらに発展する可能性は大きい」

一九五六年、カナダの対日輸入は六千五百万ドルに達し、輸出はほとんどその二倍にのぼった。

一九五七年に、日本から大型鉄鋼視察団がカナダを訪れた。その結果、日本製の鉄パイプ、建築用鋼鉄材および鋼板を拡大期にあるカナダの石油・天然ガス業界に供給する見通しが確認された。日本は、その前年、八百万ドル相当の油送管を含む六万(ロング)トンの鉄をカナダに輸出していた。油送管用の鉄板も多量、輸出していた。一方、一九五七年には、ブリティッシュ・コロンビアの鉱山から四百万ドル相当の銅精鉱を日本に輸出する契約が結ばれ、不景気にあった同州の鉱業界に朗報をもたらした。日本は、また、その前年、カナダから約五十万トンの鉄鉱石を輸入していた(その大半はブリティッシュ・コロンビアから)。日本からは、小型トランジスター・ラジオも入ってきた。

貿易関係の発展は、航空サービスにも反映している。カナダ太平洋航空(CP)は一九五八年に太平洋路線に新機種を配置し、その結果、東京・バンクーバー間の飛行時間は十四時間以下に短縮された。アジアと北アメリカ大陸の飛行時間としては最も短かかった。その年、一か月当り二十便もの日本の貨物機がバンクーバーにやってきた。

新しい時代

一九五〇年代に日加間の貿易は大きく拡大し、一部の日本製品がカナダで大量に出回るようになったため、カナダにおける秩序ある市場開発が困難になった。そこで、日本政府は一九五六年、特定の分野において割当て制にするというカナダの要請に同意した。割当て制が適用されたのは、綿製テーブル・クロス、綿製のブラウスおよびスポーツシャツである。割当て品目はその後追加され、一九六〇年にはベニア板、ゴム靴など、全部で三十品目になった。一九六一年には、ビニール製レインコート、ボタン、ラジオ、真空管も割当て品目になったが、やがて割当ての必要性はだんだんなくなり、現在残っているのは繊維製品の三品目だけである。割当て制が実施されたことにより、日本はカナダからの大幅な輸入超過を改善するため、新しい製品をカナダ市場へ送り込むことになった。

対日輸入	1961年	対日輸出	
綿織物	$7,855,000	小麦	$92,382,000
ラジオ受信器	7,072,000	くず鉄鋼	15,559,000
ベニア板	4,058,000	亜麻仁	14,301,000
おもちゃ	3,522,000	アルミニウム地金	11,679,000
ブーツ靴、スリッパ等	3,097,000	木材	11,448,000
カメラ、部品	2,783,000	石綿	11,262,000
生鮮みかん	2,518,000	鉄鉱石	10,152,000
ゴム製はきもの	2,012,000	銅	6,461,000
綿製シャツ	1,974,000	石炭	6,211,000
合成織物	1,946,000	プラスチック、合成ゴム	4,532,000
その他	46,984,000	その他	39,348,000
合計	$83,821,000	合計	$223,335,000

カナダへの認識を高めた大阪万国博会場のカナダ館。

一九五八年に日本を訪れたカナダ石炭業界の代表は、カナダの石炭が日本市場で競争力をもっていることを確認して帰った。その後、西部カナダから石炭のサンプルが送られ、日本の製鉄所に適していることが証明された。石炭は、これを機に、カナダの重要な対日輸出品となった。

一九六〇年代に入って、日加貿易は新しい時代を迎えた。貿易使節団が両国の間を飛び交い、両国の経済人は貿易促進や世界経済における双方の役割の可能性について討議した。また一九六二年には、ブリティッシュ・コロンビア州ニュー・ウェストミンスターと守口市が姉妹都市となった。現在、日加間の姉妹都市は十三組に増えた。今後はさらに多くなる見込みである。

カナダは菜種の世界的な供給国であるが、日本への輸出も急激に伸びた。石炭、木材の輸出も順調に増えた。木材、石炭、小麦、鉄鉱石の対日輸出が増大するにつれ、ブリティッシュ・コロンビア、アルバータ、サスカチュワンといった西部諸州と日本との貿易関係は深まっていった。

一九六〇年代には、また、カナダ小麦局、オンタリオ州、アルバータ州、ケベック州が、東京に事務所を設けた。カナダの大手銀行も、代表事務所を開いた。

一九六〇年から一九七〇年までの間に、カナダの対日輸出額は、一億七千八百万ドルから七億九千三百万ドルへ、実に四倍も増えた。特に銅、木材パルプ、木材、菜種、アルミニウム、石炭、ニッケルの増加が著しい。いずれも、日本の工業生産がこの十年間に四倍伸びたことを反映して、第一次産品への需要が増えたからである。

対日輸入	1978年	対日輸出
		(単位 1,000カナダドル、F.O.B.)
家畜	21	家畜 4,649
食料・飲物・たばこ	50,633	食料・飲物・たばこ 768,353
非食用原産品	7,280	非食用原産品 1,343,091
非食用加工品	440,926	非食用加工品 866,334
非食用完成品	1,740,724	非食用完成品 63,955
その他	23,650	その他 138
合計	2,263,234	合計 3,046,520

ますます拡大する貿易関係

一九七〇年代に入って、カナダでは日本にもっとカナダの工業製品を輸入してもらいたいという要望が高まった。また、第一次産品は、もっと加工してから日本へ輸出したいという希望もあった。一九七一年に日本を訪れた、政府および民間からなるカナダの大型貿易視察団をはじめ、カナダ側はこれらの二点を特に強調するようになった。

カナダの対日貿易は、一九六〇年の一億一千万ドルから一九七〇年には五億八千百万ドルに拡大した。日本製自動車の伸びは著しく、一九七〇年には対加総輸出額の十四・六パーセント（八千五百万ドル）を占めた。あとは鉄鋼六千八百万ドル、テレビ受像器二千二百万ドル、テープレコーダー二千百万ドル、ラジオ受信器千二百万ドル、オートバイ九百万ドルの順序であった。

日本の輸出品は、今や国際的評価を得た鉄、自動車、電子機器が主力となり、一九五〇年代の主要輸出品であった繊維製品と雑貨は発展途上国にお株を奪われた。

一九七三年、日本はカナダの伝統的な貿易相手国で、歴史的、文化的にもきずなの強い英国を抜いて、カナダ第二の輸出先となった。カナダの対日貿易は、その後も増加の一途をたどり、一九七八年には輸出が三十億ドル、輸入が二十三億ドルを記録した。一九二三年以来、ずっとカナダの輸出超過となっている。

一九七六年、トルドー首相が日本を公式に訪問し、三木首相との間で日加経済協力大綱に調印した。この中で、両国は共同事業など産業界同士の協力、資源および加工・完成品（高技術製品を含む）の開発・市場開拓への協力、農産物の生産・供給における安定性の向上、相互に有益な投資の拡大を奨励・推進することに合意した。合意に沿って両国は各分野で協力を進めており、その中から日加経済関係の新しい躍進が期待されている。

日加間の貨物は、コンテナで輸送されるようになった。

国交50年と日加協会の歩み

日加協会会長　近藤　晋一

昭和四年十月十二日、わが国の初代駐加公使、徳川家正公爵がビクトリアに到着した。その時、マッケンジー・キング首相は、徳川公使に電報をもって初代日本公使のカナダ到着に祝意を表明すると共に、十月二十一日、公使をカントリー・クラブでの歓迎晩餐会に招待した。着任する外国使臣に接受国の首相が歓迎のメッセージを送るのは異例なことであるが、これは当時カナダ政府が日本との外交関係の設定に熱意を抱いていたことを示すものといえる。

徳川公使は、十月二十一日、ウルリンドン総督に信任状を捧呈し、同夜カントリー・クラブでの盛大な歓迎晩餐会に出席した。キング首相はその歓迎の辞の中で、日加間の外交関係の樹立の意義について次のように述べている。

「カナダは好むと好まざるにかかわらず、その対外的関係の急速な進展を避けることはできない。カナダの置かれた地政的地位及び英連邦の一員としてのカナダの立場から生ずるであろう特別な責任、義務及び機会から逃れることはできない。（中略）米国はカナダに最も近い隣国であり、北米大陸における唯一の隣国である。フランスはヨーロッパ大陸でわれわれの最も古いかつ近い隣国である。日本はアジア大陸における最も近い隣国である。（中略）世界的観点からすれば、カナダはこれら三国に三方から囲まれた円形劇場の中心に位置するといえよう。わが国の安全保障のためには、これら諸国との友好親善関係を促進することが必要なのである。」

英連邦の自治領であったカナダが、米国及びフランスに次いで日本と独自の外交関係を樹立し、公使を交換することについては、カナダの国内において論議をまきおこしたことは事実である。例えば、一九二九（昭和四）年、連邦議会において東京に開設されるカナダ公使館予算（五万ドル、在米公使館総予算五十万ドル）が審議された際、野党保守党のジョージ・パーレイ議員は、

徳川駐加初代公使

カナダの外交的選択は英帝国の一員として留まるか、英帝国より独立するかの何れかであるが、もしカナダが日本と公使交換をすれば、他の自治領もこれにならい、英帝国の結束を破壊するであろうと、公使館設置予算に反対した。

これに対しキング首相は、（一）カナダは今日世界の平和と戦争の鍵を握る英米仏日四大強国間の中心点に介在する地位にあり、カナダとしてこれら強国と密接な関係を維持せねばならないこと、（二）カナダは英連邦の一員としての立場を堅持するもので、英連邦よりのindependenceを求めるのでなく、カナダのself-dependenceを強めようとするものであること、（三）カナダの対日輸出貿易は三十年前に比し三十倍に急増し、日本はカナダの輸出市場として第三位を占めており、通商問題、移民問題を始め多くの対日問題について、カナダの事情を熟知している使節を東京に駐在させて、カナダの世論を日本国民に理解させることが必要であること、等の諸点を挙げて反駁した。

キング首相の独特な世界政治論は別として、カナダ政府が日本と外交関係樹立に踏切った主要な理由として、輸出市場としての日本の重要性の認識があったことは否めないであろう。

キング首相は、昭和四年一月十一日、初代駐日公使ハーバート・マーラーの任命を公表したが、オタワ・ジャーナル紙は、「日本は今や急速に西欧化しつつあり、その主要都市で西欧製品の需要が増加しており、しかもその多くをカナダが供給しうる。マーラー氏が貢献しうるのは外交方面でなく、経済関係の増進にある」と論評している。

またマーラー公使も昭和六年八月二十一日、バンクーバー商業会議所とカナダ製造業者連盟との会議の席上、（一）カナダの生産は年々増加しているので、輸出市場の開拓の必要は年と共に増大している。しかし、欧州諸国はその現状からみて今後有望とは思えない。したがって、市場として無限の機会をもつ東洋はカナダの将来にとって極めて重要であること、（二）日本人は礼儀正しく親切にして勇気ある国民である。日本への輸出を拡大するためには、カナダ実業人が実地に視察研究することが肝要であることを述べている。

カナダの実業界においても、第一次大戦以後、日本及び中国の市場開拓の必要性を認め、再三視察団派遣を計画したが昭和三年カナダ商業会議所はその年次大会において、東洋実業視察団の派遣を決議し、準備委員会を設置した。

カナダ商業会議所副会頭ジョン・イムリーを団長とする約四十名の実業家視察団は、昭和五年十月二十七日横浜港に到着、十一月十四日神戸港から上海に向けて出発するまで、日本の各都市を訪問した。

この視察団の訪日は日加通商史上画期的な出来事であった。日本側では官民を挙げて最上の接遇を与えたことは勿論であるが、日本の各新聞もこの訪問を大き

く報道し、特にジャパン・タイムスは二十六頁ものカナダ特集号を発刊した。

日加協会はこの使節団の訪日直前に設立されたものである。この間の事情は、幣原外務大臣から徳川公使に宛てた昭和五年十二月四日付の公信「カナダ実業視察団に対する歓迎振りにかんする件」の中で、「使節団渡来の報伝はるや本邦有志の間に日加親善の目的を以って計画しおりたる日加協会の実現を期し、さる十月十六日創立総会を開き、いよいよ日加協会の組織成り、一行渡来するや之を横浜に出迎え、同月三十日歓迎晩餐会を開催する等深甚の厚意を表示したり」と述べられている。

日加協会主催の歓迎晩餐会で初代会長阪谷芳郎男爵は次のように演説している。

「われわれの協会は貴使節団を歓迎するために誕生したものである。日加両国民間の友好関係が益々発展することを強く希望するものであり、またそうなることを信ずるものである。諸兄は生れたばかりの赤ん坊によってもてなされたと思われるかも知れない。しかし、わが協会は赤ん坊であっても、その精神はわが国民の心の中で成長するであろう。この記念すべき日に、我々はこの健康な子供の誕生を祝賀すると同時に、これを貴使節団の訪日のスペニヤーとして差し上げたいと思う」。

阪谷日加協会初代会長。

更に阪谷会長は日加貿易の現状に言及して、「日加両国間の貿易は急速に拡大し、今後も増大するであろう。しかし、カナダの対日輸出は対日輸入の二倍であり、これは健全な姿とは云えない。したがって、両国間の貿易の均衡をはかるよう、この機会に貴使節団が貿易関係の増進に努められることを希望したい」と述べている。

イムリー視察団長は、帰国後、"Trade Prospects Across the Pacific"と題する小冊子を出し、日本及び中国に関する印象を報告しているが、カナダの輸出市場としての日本について、次のような興味ある観察を述べている。

(一)日本とカナダは、カナダの農産物、鉱産物及び林産物の三つの一次産業の分野において理想的な補完関係にある。日本の経済の発展と人口の増大に伴い、これら産品の対日輸出は漸次増加するであろうこと。

(二)食料品を除き、カナダの完成品輸出の将来は余り明るくない。それは日本の驚くべき工業の発展、今後日本の工業分野における拡大の計画、日本の比較的低廉な生産コストによるものであること。

(三)日本市場におけるカナダの完成品の輸出機会は極めて限られている。カナダの工業製品の輸出市場を開拓する場合には、日本の工業生産の状況について充分な事前調査が必要であること。

(四)カナダの対日輸出拡大のためには、或る程度日本よりの輸入を増大しなければならないこと。

当時の日加貿易関係を見てみると、一九二八年度においてカナダの対日輸出は三千二百九十五万ドル、対日輸入は千二百五十万ドルであった。また当時のカナダの対日輸出の主要品目は小麦、鉛、パルプ、亜鉛、木材で、対日輸入の大宗は絹であり、これに次いで茶、米、陶磁器、みかん等である。

それから五十年を経過した今日、日加貿易は、一九七八年度においてカナダの対日輸出は三十億五千七百万ドル、対日輸入は二十二億六千三百万ドルで、五十年前に比し、輸出で約九十三倍、輸入で百八十倍と拡大している。主要貿易品目については、カナダの対日輸出では金属原料、農産物、鉱物性燃料、木材等一次産品が主体で、製品輸出は最近五ヵ年間で倍増したとはいえ、対日輸出の十三パーセントを占めるにすぎず、カナダの対日輸出構造は五十年前と大して変化していない。他方わが国の対加輸出は自動車、テレビその他の機械機器が約六十六パーセントを占めている。

日加協会創立10周年の記念パーティーで、ブル大使をはさんで、右が吉沢清次郎会長代理(のち会長)、左が吉沢夫人、大平外相(1962年)。

昭和五十一年十月に日本を公式訪問したトルドー首相は、経団連幹部との会合において、「日加貿易はその量において飛躍的に増大したが、その構造は一方的に変化したのみで、これについてカナダ側としては余りハッピーでない。日本はお茶の代りに自動車を、米の代りに写真機やテレビを輸出しているが、カナダの対日輸出の代表的品目は相変らず石炭や木材である」と述べて、日本がもっとカナダの工業製品、加工品の輸入を増大するよう要望した。

カナダの東洋実業視察団の来日を機に発足した日加協会は、その会則の第二条において、「本会は日本及加奈陀両国民の親善並に貿易の仲暢を図り以て共同の福利を増進するを目的とす」と定めている。発足当初の協会の役員構成は、阪谷会長の外十四名の評議員よりなっているが、評議員の中に外務省通商局長と商工省貿易局長が含まれているのが興味をひく。民間側評議員では、船会社から日本郵船と大阪商船、銀行から正金銀行、商社から三井物産、三菱商事、田村商会、千代田組、製造業者から日清製粉、日本製粉、王子製紙が名をつらねている。協会の実際の運営に当るべき財務理事と理事を各一名置くことになっていたが、誰がこれに選任されていたか、また会員の総数等も当時の記録が失われているため、明らかでない。会則によると、年会費十円を払うものが通常会費となり、一口以上

納入する会社は振り込み分に応じて、会費を負担しない会員を入会させることができること、となっている。

日加協会の昭和十年度年次報告によると、一口以上納入の通常会員（法人）十七社、一口納入の会員二十五、会費を負担しない会員二十一、外国人会員七、会員総数七十となっている。昭和十年の協会の収入は前年度よりの繰越し分七百四円を含め、約千二百円であった。

それではどういう活動をしていたか。カナダから来訪する主要な実業人のための会合、カナダ公使館の公使又は主要館員の歓送別会の主催などの記録が残っている。

第二次世界大戦の勃発は、不幸にして、日加協会の一切の活動の停止を余儀なくし、協会は戦争中事実上解散の状態にあった。サンフランシスコ平和条約の締結後、昭和二十七年四月に日本とカナダとの間に相互に大使館設立が合意され、同年五月わが国の初代駐加大使として井口貞夫氏が任命された。井口大使の赴任の直前、徳川家正、富井周、吉沢清次郎など戦前駐加公使を勤められた諸氏及びカナダと関係のあった実業界の有志約三十名が送別会を開いた折り、日加協会再建の意見が出て、その後これら有志を中心とする再建世話人会が組織された。この世話人会は外務省、在日カナダ大使館及びわが国の経済界の協力の下に新たな会則の起草、会員の募集等の準備活動を行った後、昭和二十七年十二月五日に東京倶楽部において設立総会を開いた。設立総会においてアーサー・メンジス臨時代理大使（現駐中国大使）が徳川家正氏の会長選任を動議し、承認された。

かくて再発足した日加協会は、「日本、カナダ間の文化の交流、経済関係の緊密化を図り、両国間の理解と親善を増進することを目的とし、その達成に必要な事業を行う」（規約第三条）こととなった次第である。当時の会員数は維持会員（法人）六十（うち四社がカナダの会社）、普通会員三十五（うち十六がカナダ人）、名誉会員一（メンジス氏）であった。再建日加協会の最初の行事は昭和二十八年一月二十九日東京会館での初代のカナダ駐日大使ロバート・メイヒュー氏の歓迎午餐会であった。

メイヒュー大使はその演説の中で、日本経済はカナダの経済と同様、外国貿易に依存するところが大であり、国際貿易に対する障壁を最少限に制限することに共通の利害関係をもっていると述べ、カナダは日本を含むアジアの大衆の生活水準向上のためアジア諸国の産品を輸入しなければならない、とのサン・ローラン首相の発言を引用した上、「カナダは競争の激しい市場である。競争に勝ち、カナダへの輸出を拡張するためには、製造業者、輸出業者がカナダ市場を継続的に調査し、計画的に売り込み努力をすることが不可欠である」と、戦後経済復興に努力している日本の経済界に勧告している。

徳川家正氏が逝去された昭和三十八年から十二年間、吉沢清次郎氏が日加協会の会長を努められ、昭和五十年以後私がこれを引継ぎ、微力ながら協会設立の目的の達成のため努力している。本年三月現在、維持会員百二十四社、普通会員百九十九名、名誉会員八名であり、日加関係の緊密化に伴い協会の規模も拡大しているといえよう。

日加協会の主な活動は、（一）カナダ連邦政府、州政府及び民間各界の指導者または各種使節団の訪日に際して日本の民間人との交歓の機会をつくること、（二）在日カナダ企業及びカナダ人との交流を促進すること、（三）カナダ事情に関する資料の提供と講演会を開催すること、（四）カナダとの文化、学術交流を促進すること、（五）カナダに所在する対日友好諸団体との交流をはかること、（六）日加協会の会員相互の親睦のため各々の催し物を行うこと、などである。

協会はその事業活動を実施するに当って、外務省、通産省等わが国の政府機関や国際交流基金、在日カナダ大使館の協力を求める外、関西日加協会、日本カナダ学会、日加経済人会議日本委員会、カナダとの姉妹提携をしている諸都市及びカナダ実業人協会等と必要に応じ連絡をとっている。

卒直にいって、日加協会はその財政的基礎がいまだ充分固まっていないこと及び事務的処理能力が限られていることのため、決して満足すべき活動を行っているとは言えない。しかしながら、協会としてはその限られた能力の範囲内において最善の努力をする所存であるので、関係方面の御支援をこの機会にお願いしたい。

日加国交五十周年を迎え、協会として今秋五十周年祝賀会の開催、五十周年記念懸賞論文の募集を企画し準備を進めている外、日本カナダ学会主催による日加研究者によるシンポジウム及びわが国のユース・シンフォニー・オーケストラのカナダ公演などの企画に側面的協力を行っている。

日加関係は五十周年を迎えて漸く成熟期に達したものと言えよう。昭和四十九年九月の田中、トルドー両首相の共同声明は、「日加両国が今後さらに政治、経済、文化、科学技術等多岐にわたる分野で協力関係を育成拡大し、日加関係の基礎を一層幅広く、深みあるものとすることに同意した。両者はかくして日加関係の新時代の幕が開かれることを希望した」と述べている。この「新時代」をたんなる外交辞令に終らせないためには、五十周年を契機として、日本はカナダにとり、またカナダは日本にとり、それぞれの国際関係上いかなる位置づけをもつのか、次の五十年に向かって長期的な展望と、そのための戦略が追求されねばならないと思料する次第である。

日加協会創立25周年（1978年）の記念パーティで談笑する（左から）近藤会長夫妻、牛場対外経済相（当時）夫人、ランキン・カナダ大使夫妻。

日加関係における日系カナダ人の役割

在トロント日系文化センター所長
トヨ・タカタ

カナダ最高の勲章である「カナダ勲章」が、昨年、三人の日系カナダ人に授与された。わずか四万人をこえるだけの民族グループの中から、三人も同章の受勲者に選ばれるのは、きわめて異例のことである。

叙勲の理由はカナダをより良くするために貢献したというのであるが、日加関係の向上に与って力があった、ということでもよかっただろう。

叙勲者の一人、佐藤伝氏は、一九一七年、正規の日本語教師としてバンクーバーにやってきた。同じく教師をしていた夫人も、一足遅れてカナダへ渡っている。

佐藤氏は、東洋人排斥の空気が強まったブリティッシュ・コロンビア州にあって、自分の役割は二つの異文化が生んだ二世を教育し、彼らを通じて太平洋をつなぐ相互理解の増進を達成することにある、と考えた。彼の希望は一九四一年にぶちこわされてしまう。しかし強制立退きにあった人々が戦後、各地に落着くと、子供のいない佐藤夫妻はバンクーバーに戻り、一九六六年に引退するまで、再び日系人子弟の教育にすべてを捧げた。

モントリオール在住の華道竹屋流家元・桑原正尚（本名きな子）さんは、東京の共立女子学院家政科を卒業後、一九二三年、カナダへ移住した。バンクーバーに居を定めた彼女は、家族の面倒をみながら、時間の許す限り、キリスト教の教会活動を中心に、日系社会のために尽した。また日系人に対する感情が悪化すると、バンクーバー市のインタナショナル・クラブで生け花と日本語会話を教え、友好と理解を深める努力をした。

強制移動のあと、夫に先立たれた桑原さんは、一九四五年、息子と共にモントリオールに移り住み、それまで日本や日本文化とほとんど接触のなかったこの都会で、生け花クラスを開く。文化を通じた親善と理解を信条にしていた彼女は、英語とフランス語の飛び交うカナダ最大（当時）の都市に日本の華道を紹介したわけである。桑原さんは、一九七七年に竹屋流の心と技を概説した「いけばなと私」という英文の本を出版している。彼女は、竹屋流モントリオール本部の設立者でもある。

三人の中では唯一のカナダ生まれであるトーマス・ショーヤマ（生山国人）氏は、ブリティッシュ・コロンビア大学を卒業したが、適当な仕事がなかった。そこで一九三九年に共同で週刊英字紙「ニュー・カナディアン」を創刊し、その編集長になった。

生山氏は、日系人にとって最も暗く困難な時期に、政治的、経済的、社会的差別に対する勇敢な、しかしあまり勝ち目のない戦いに飛び込んだ。雄弁で説得力もあり、〝ペン〟と〝舌〟を武器とする二世日系カナダ人の強力な代表者となったのである。

戦争が勃発すると、生山氏は「ニュー・カナディアン」と共に移動したあと、カナダ陸軍の特別二世部隊に入隊する。戦後、生山氏はモントリオールのマギル大学で経済学を勉強、サスカチュワン州政府の経済顧問をつとめたあと、連邦政府の役人となる。そして、一九七四年、連邦政府大蔵省の事務次官に任ぜられ、日系二世としては最高の地位を獲得した。大蔵次官の任務は、官僚の中では二番目に重要かつ困難だといわれている。

一八七七年、日本人としてはじめてカナダへ移住した永野萬蔵（中央）とその一家。

かつて国家への忠誠を疑われた日系同胞の一人に、それだけの信頼がおかれたことは、日系カナダ人にとって誇りであり、刺激にもなる。同時に、カナダ政府がいかなる形の日系人差別政策もとってない、ということもまた、彼の高い地位は反映している。この事実は、日加関係が発展する上で重要である。

カナダ勲章に輝いたこれら三人の方々をはじめ、両太平洋国家の親善に尽した日系カナダ人は多い。しかし、ここでは、日系カナダ人に関する過去五十年の歴史を振り返ってみることにしたい。

日本とカナダが国交を開いたのは一九二九年。日系社会は、この発表を大きな期待を込めて受けとめた。しかし、この年は、日本からの移民の数を制限した〝紳士協定〟が更に改定された翌年で、いわば失望の年であった。それまで、割当ての対象にならなかったカナダ在住の移住者の花嫁や直系親族の移住が、新しい取りきめにより、規制されることになったため、一九二八年に五百三十五人もあった日本からの移民は、その年、百七十九人に減った。一九二九年は、また、株式市場が破たんをきたし、大恐慌が始まった年でもある。不況は、すでに雇用面で差別を受けていた日系人には特につらい経験であった。

日系カナダ人の不安と困難は、満州や中国におけるできごとによって、さらに深まった。国際情勢が悪化して、ヨーロッパで戦闘が始まり、またすでに西部ヨーロッパの大半を押さえていたベルリン・ローマ枢軸に日本が加わると、ブリティッシュ・コロンビア在住の日系人に対する非難の声はますます激しくなった。

そしてついに日本の真珠湾攻撃と太平洋戦争の開始――。当時カナダの西部沿岸に住んでいた日系住民には、〝外交関係の断絶〟がどういう意味をもち、どういう結果をもたらすものか、分りすぎるほど分っていた。二万二千の人々が、沿岸一帯から立退かされ、カナダ各地へ追いたてられていったのである。

戦争は一九四五年に終った。しかし、日系カナダ人が公民権を回復したのは、一九四九年以後のことである。またその

ブリティッシュ・コロンビアの山奥で働く日系鉄道労働者。

✿私とカナダ✿

カナダにおける戦前の日本人社会

宮崎 孝一郎

半世紀にわたる血のにじむ勤勉を積み重ねた日本人の基盤は、白人の脅威を感じるほど発展成長した。バンクーバーとその周辺で小売商、製材、漁業、農業などに従事し、庭園業、製函業、飲料、家具製造など小規模ながら独立企業もあった。バンクーバーでは至るところの町角に、グロセリー店、クリーニング店があり、パウエル街は日本人町として、寿し屋、小料理屋、銭湯、旅館まであって、日本人の生活に必要なものを整えていた。時には絃歌も陽気にもれて、日本人商業組合がこれを統制していた。

日本人を統合した団体に「日本人会」があってその役員は日本人社会の名士かのように一部から見られたので、その役員選挙に運動めいたものがあった。製材所などには一人の日本人ボスがいたので、彼の一声はすべての選挙に影響をもっていた。このほかにキャンプミル労働組合日本人支部があって、機関紙「民衆」を発刊し「大陸日報」(一九〇三年)と鼎立していた。労働組合員をアカと呼んで、日本人会と対立関係にあったようだ。その他、漁業にはステブストンに有力な漁者団体が、庭園、旅館、クリーニングなどにもそれぞれ組合があった。

このように日本人はBC州に密集し、大部分は労働者で共食いになり易く、カナダ社会からはなれ、多分に日本的要素を包含した独特な孤立社会を形成して、意欲的飛躍の精神を欠いていた。このような日本人の存在が、英領カナダの一般社会の対象となって、好ましからぬ移民、他の言葉で言えば同化しない移民の印象を強く与えた。米国のメルティング・ポット政策はカナダにも尾をひいていたので、政治屋に排日の口実を与えた必然的社会現象を生んだ。日本人は反省と苦慮を繰り返しながら打開策に腐心したが、経済的立場から、社会的環境から、彼らの望む同化は認めながら、実行はそう容易ではなかった。

箸の代わりにフォーク、と神経過敏症になった人々もあったり、言語習慣の異なる国で同化を強制することは、一方的な英国的ジョンブルの勝手な人種偏見に屈するものだというレジスタント組もあって、日本人社会に苦悶の様相を露呈していた。

デモクラシーに一縷の望みをかけながらも、永住開拓の精神は薄れがちで、故郷に錦をかざる夢を子女の教育に切りかえた。一世は惨たんな過去の生活を省みて、子供だけは立派に教育して、カナダ人と同じように濶歩できるよう念願に燃えて、あらゆる犠牲を子女教育にささげた。

しかし、この望みは無残にも砕かれた。BC州は日本人に選挙権を許さなかったので、官公吏はもちろん、会社の事務員にさえ職業の門は閉ざされていた。大学を卒業しても労働するより他に迎える口

太平洋戦争勃発後、太平洋沿岸に住む日系カナダ人は内陸部へ立退かされた。

年、ブリティッシュ・コロンビア州に住む日系カナダ人は、初めて被選挙権を獲得し、商業や雇用上の制限、すなわち生山氏などの二世がかつて抗議した権利の侵害も同時に解除された。

しかし、長年の屈辱と差別によって、多くの日系市民は萎縮し、〝カナダ人〟として完全に受け入れられたいと願うあまり、自分たちの生い立ちについて偏執的になっていた。実際、ある有名な二世などは、ある会合で、日本文化は原始的でほとんど無きに等しく、日本の製品は「見かけ倒しで、特売場向きの低質品」だとこきおろしたほどである。日本や日本的伝統との関係をすべて断ち切り、日本語学校や仏教会の廃止を主張する向きもあった。

しかし、こうした自己卑下的な態度は、大体において、まもなくなくなった。皮肉なことに、その転機となったのは別の戦争、すなわち朝鮮戦争であった。この動乱および平和交渉の間、日本は国連軍事活動の後進基地となり、何万もの男たちが日本で時を過ごした。それを契機に、日本が戦争で負け、荒廃した国としてではなく、古い歴史と伝統をもち、しかも高度の機器を製造できる国として見直されることになった。

例えば、前線におもむいたカメラマンは、日本製カメラの優秀さに感心し、日本で休暇を過ごした米兵たちは、「カラテ」なるものにとりつかれた。アメリカやカナダでは、その後あちこちに空手道場がたち、空手人口は大きく広がった。

朝鮮動乱のときに日本を訪れたカナダやアメリカの人びとは、伝統的には東洋でありながら、技術的には西洋というこの国に魅せられた。カナダやアメリカの新聞雑誌は日本を特集し、テレビも日本または日本人に関する報道やドキュメンタリーを数多く放映し、美術館、博物館、図書館では日本の芸術や文化に焦点をあてた。日本の映画は好評を呼び、また日本製の品物がどこでも沢山見られるようになった。

日本人以外の人々の間で日本への関心が高まったことに、日系カナダ人は驚き、とまどい、そして喜んだ。わずか十年前には、彼らの先祖の地は野蛮だ反逆者だと非難され、日系人自身も同じように扱われていたのに、今や日本は、注目と賞賛の的になったのである。カナダ人やアメリカ人は、ただ日本を観察するだけでなく、日本文化を学び、あるいは日本文化に自己を投入するよう心がけていた。

かつてないほどの関心が日本に向けられたことにより、日系カナダ人は二つのことに気づいた。人々はお互いの接触やお互いに対する知識を通じて相互理解を深めることができる、というのがひとつである。彼らがカナダで長い間苦しめられた偏見は、無知と怖れによるもので、それが高じて戦時中の太平洋沿岸追放へと発展した。もし無知と怖れをなくすることができたら、カナダにおける彼らの歴史はもっと違ったものになっていただろう。

もうひとつは、文化活動や両方の文化に対する目を通じて、日系人が友好と理解を促進する上で大きな役割を果たせるのではないか、ということである。自分たちが生まれ、あるいは選んだ地であるカナダと、民族的な故郷である日本の間をとりもつ、親善の橋渡しになれるのではないか、ということに思い当ったのである。太平洋をはさむ両国の関係を促進するのに、これほどいい方法はない。

こういう視点から、トロントに日系カナダ文化センターが作られた。戦後、日系市民の中心はトロントに移った。(現在、その数は一万五千をこえる。)そこで市民会館が必要となったが、ただの集会場にはしたくなかった。そこで、西洋と東洋を折衷し、かつ、いろいろな講座や、セミナー、催し物、そのほか日本文化に関係あるさまざまな活動の場となりうる建物が考えられた。

この構想は、一九六二年に実現した。文化センターは、主にトロント市部に住む日系人の力だけで建設され、運営されている。センターは、人種、皮ふの色、信条の別なくすべての人々に解放されており、希望者は誰でも武道、いけ花、墨絵、習字、料理などの定期講座を受けられるようになっている。これらの講座をとっている人たちの四分の三が非日系人であるが、これはセンターがその所期の

はなかった。こういった情勢の中で、二世はどんどん成長増加し、二世の発展も全く一世のように局限された。二世のある者はカナダに絶望し、日本に職を求めて行った。このような行き詰まりにあった折、日支事変が勃発した。無敵日本のニュースが伝えられ、日本人社会は生気を取り戻したように日本調で色どられるようになった。つづいて太平洋上に火を噴いて、半世紀にわたった日本人社会は壊滅してしまった。

(「カナダ移民、明けゆく百年」より。カナダで五十年間暮らした宮崎氏は、昨年モントリオールで逝去された。)

目的を果たしていることになり、まことに喜ばしい。同センターは、今や、多様民族で構成するトロントで、確立された存在になっている。

バンクーバー（日系人口一万人）、モントリオール（千五百人）などの日系社会でも、何らかの文化センターを作る話がある。これらの都市や、そのほか日本人がまとまっているところでは、仏教会や集会場などが文化行事の会場として利用されている。

カナダでは、週末とか、時にはもっと長い期間、いろいろな民族が参加してやる行事を催す町が多い。そういう行事には、日系市民もパレード、盆踊り、剣道、日本料理の実演紹介などの形で参加する。

こういう活動は、必ずしも日系市民が多いところだけでやるとは限らない。例えば、ナイアガラ瀑布から二十キロ離れたところにあるセント・キャサリン市では、日系市民は四十家族にも満たないが、毎夏開かれる民族祭には積極的に参加している。一昨年の日系移住百周年祭には、カナダ全国の大小すべての日系グループが何らかの行事を催して祭をもり上げた。

このような催し物を通じて、日系市民の間に同胞感が高まった。また、こういう日系市民の努力を重ねることが、日加関係の前進に役立つことは間違いない。

日加両政府が協定を結んだことにより、カナダの日系市民がその協定にかかわってくる場合もある。例えばトルドー首相が一九七六年に日本を訪問した際、両国は文化交流の促進に合意したが、その結果、カナダで公演する日本人がふえた。その数は、今後ともふえていくだろう。

日本からの公演者に対し、日系カナダ人は自主的に、あるいは要請により、ホスト役をつとめた。東京から「リトル・シンガーズ」がカナダ各地を訪れたときは、日系市民が子供たちを家に泊めてあげるなど、温かい歓迎の手をさしのべた。ホスト役になったそれぞれの家族にも、また子供たちにとっても、忘れがたい想い出になっただろう。

国際親善に大きく寄与するものとして、外国同士の都市が姉妹関係を結ぶことが、近年好評を博している。日本とカナダの姉妹都市は十三組。カナダ側の都市のうち、六つはかつて日系カナダ人が追放されたブリティッシュ・コロンビア沿岸にあるのは、いささか皮肉であるが、過去を解消し、新しくやり直すという意味ではいいことだ。またカナダの西岸港バンクーバーと横浜が縁組みしているのも、道理にかなっている。

和歌山市とリッチモンド市の間柄には、特に温かいものがある。かつて数多くの和歌山県出身の漁師がフレーザー川で漁をするため落着いた漁村ステイブストンは、今はリッチモンドの一部となっている。リッチモンド在住の日系人の大半は、現在でも和歌山県人の子孫で、両市はなるべくしてなった姉妹都市といえる。訪問者の交流もたえない。

ブリティッシュ・コロンビア州以外の都市で、日本の都市と姉妹関係を結んでいるところは、ウィニペグ（日系人口千五百人、東京都世田谷区と縁組み）とオンタリオ州ハミルトン（日系人口千人、福山市と縁組み）である。

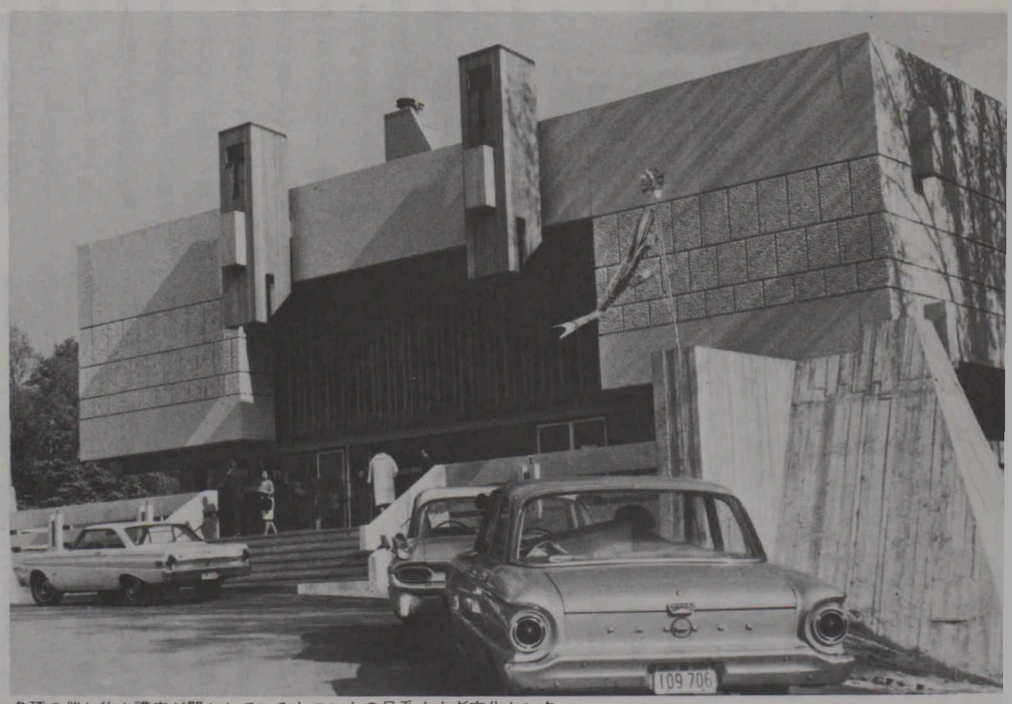
オンタリオ州リンゼー（トロントの北西百三十キロ）は人口わずか一万三千人で、日系人は一家族もいない。その姉妹都市である名寄市にも、おそらくカナダ人は一人も住んでいないだろう。しかし、これら二つの都市は、十年前、地球を半回りして手をのべ合ったのである。

リンゼー市は、縁組みを記念して、適当な行事をやろうとしていたが、財政的な制限や地理的な事情もあって、何をしたらいいのかはっきりしなかった。そこで、トロントの文化センターを通じて、二世や三世の日系人がバスでリンゼー市におもむき、日本の美術、工芸品、舞踊、武道などを披露した。いずれも、リンゼー市民にとって初めて見るものばかりであった。

こういう役割こそ、両国の関係の中で日系カナダ人に最も適したものである。世界第二の広大な国土をもつカナダで、日系人の数はわずか四万に過ぎない。しかし、両国の国民を、再びこわれることのない平和と調和のきずなで結びつける上で、日系カナダ人は今後とも触媒としての役割を果たせるであろう。

ショーヤマ氏、原子力公社会長に

カナダでの報道によると、過去数年間、大蔵省事務次官の要職にあったトーマス・ショーヤマ氏（日系二世）は、このほどカナダ原子力公社の会長に任命された。



各種の催し物や講座が開かれているトロントの日系カナダ文化センター。

日本からエスキモーへの贈物

ジェームズ・ヒューストン

二十年前、私はバフィン島の雪の家の中に坐って、エスキモーと芸術について語らいながら、突然、自分は地球の反対側にある日本へ行って勉強すべきだと考えた。

私は、当時、カナダ北西のウエスト・バフィン島にある、キンネという小さな村に住んでいた。村の英語名はケープ・ドーセットである。この荒涼とした沿岸に、五百人に近いエスキモー（自らはイヌイットと呼ぶ）が、ちらばって住んでいる。彼らは漁師であり、腕のいい彫刻家であり、歌手であり、舞踊家であり、お互いを助け合い、隣り近所を大切にするしっかりした家庭人である。

ケープ・ドーセット住民の間で版画作りがはじまったのは、一九五九年の冬である。ある日のこと、私のそばに坐って、政府の砕氷船で運ばれてきた何箱かのタバコをじっと見ていた、オシャウィートックという名前の狩りのうまいエスキモーが尋ねた。

「それぞれの箱に、全く同じように小さく船乗りの頭の絵を描くのは、大変骨が折れるだろう」

「われわれは、そんなやり方はしないよ」と私は答え、エスキモー語で近代的な写植印刷の方法について説明しようとした。私の説明は、どうもうまくいかなかった。凹版印刷とか色刷りの重ね合わせ（見当）などを説明する適切なエスキモー語を私が知らなかったせいである。また、私の考えが先走ってしまって、エスキモーが版画をうまく取り入れられないものか、頭をめぐらせていたためでもあった。

印刷というものを実際にやって見せる方法はないかと、私はあたりを見回した。そのとき、オシャウィートックがしとめてきたアザラシの牙が目についた。オシャウィートックは、それをみがいて、その上に動物の絵を大胆に、そして深く彫ってあった。

私は半ば凍ったインクの入った缶をもってきて、指で黒いかすをすくって牙にまんべんなくぬった。その上に、注意深く一枚のトイレット・ペーパーをのせ、軽くなでつけたあと、その紙をはがした。紙には、オシャウィートックが彫ったデザインが、裏返しになってうまくうつっていた。

「それならわれわれにだってできる」彼は狩人らしくきっぱりと言った。

北極での私の情報源は、非常に限られていた。戦後の版画作りについての記事が載っているイギリスの雑誌を、ボロボロになるまで、何度も何度も読み返したものである。その中で、特に平塚運一、棟方志功、斎藤清らの新しい表現が、私の興味をひいた。その表現には、最もすぐれたエスキモー芸術に何世紀もの間流れていた、力強く直接的なイメージがあるように思われたのである。

版画作りに関する技術的な知識をすぐにでも得る必要があって、私はその一本の記事を頼りに、政府公務員として長い間たまっていた休暇を利用して日本へ行くことにした。日本に着いたら、時間の許す限り版画作りについて学ぼうと考えていた。この知識は、エスキモーの世界で大いに役立つはずだからである。

一九五八年の春、私は犬ぞりに乗って東へ向かい、空路バフィン島からオタワへ飛んだ。そこで、お会いした萩原駐加日本大使が、国際的な文化関係を促進するための日本国際文化振興会との連絡を世話してくれた。

プロペラ機でアリューシャン群島をへて、日本へ着いたが、当時の空の旅はかなりきつかったことを覚えている。

東京では、落ち着き先が決まるまで、フレデリック・ブル駐日カナダ大使にお世話になった。日本の方々も、日本の版画技術がエスキモーの役に立つかも知れないということに、興味を引かれていた。皆さんには、とても親切にしていただいた。

国際文化交流基金および常務理事の米沢菊男氏や職員の井上雍雄氏らのおかげで、私は大変な幸運に恵まれた。二、三日後、高名な版画家・平塚運一画伯が毎晩、私

ジェームズ・ヒューストン氏は、カナダ北極のバフィン島南西で連邦政府の行政官をしていた頃、日本を訪れて平塚運一氏から日本の版画について師事を受けるほか、アイヌの言語および文化形態を研究した。同氏は昨年、世界生物保護基金のために二十年ぶりに日本を訪問した。「カナダ勲章」および「インディアン・エスキモー文化財団賞」を授与されている。著書に「白い夜明け」（工藤政司訳、文化放送刊）などがある。

に一対一で版画を手ほどきしてくれることになったのであった。お嬢さんのヒロコさんが、わかり易く通訳してくれた。

平塚先生は、長くまた充実した創作活動を通じて身につけた限りない知識をもとに、江戸時代の浮世絵版画のこみ入った錦絵手法から最近の版画手法にいたるまで教えてくれた。平塚先生は、棟方志功ら、日本を代表する多くの版画家の師匠である。棟方氏の作品は、氏のあっけらかんとした人間的魅力を反映した、いかにも自由奔放なもので、その活達な版画は当時から多くの人々に愛されていた。

そのとき、私は早稲田大学の教授で、のち総長になられた村井資長氏のご家族から、一緒に住むようにとのお招きを受けるという好運にめぐり合った。村井家で暮らす喜びは、とても私の筆力では表現できないほど大きかった。現在でも、お互いに行き来するほどである。

さらに、日本民芸館や益子で、柳宗悦氏や浜田庄二氏とお会いする機会にもめぐまれた。

東京は、私にとって全く新しい世界であった。「文房堂」というすばらしい店には、版木、紙、墨、彫刀、砥石など、版画家にとって必要なものがすべて揃っていた。

平塚先生が夜遅くまで版画についての講義を続けて下さったことは、今でも強く印象に残っている。帰るときに雨が降っておれば、自分の仕事部屋の隣りにある小さい部屋に泊まっていけと勧めて下さり、私はその好意に喜んでしたがった。天気がいいと、バスも電車もすでにないので、私は暗くて、周辺に家もない淋しい道を歩いて帰った。しかし、車が通りかかると、必ず私のそばでとまり、乗っていきませんかと誘ってくれたものである。しかも、大抵は、私がいくら結構ですといっても、私の家まで乗せていってくれた。世界で、こんなに親切にしてくれるところが、ほかにあろうか。

一九五九年の早春、とうとう日本を離れる日がきた。親しい友人、見事な芸術、そして私にすばらしい画題を与えてくれた能の、ゆるやかで古典的な動きに別れを告げるのは、つらかった。しかし、同時に、私が習ったことを、早く北極に伝えたい、と心はあせっていた。

ウェスト・バフィン島は、肌を刺すほど寒かった。しかしいつものように、活気に満ちていた。はるかかなたの日本から私が持ち帰った宝物を見ようと、みんなが集まってきた。帰ってきた最初の日、私は一番熱心で、腕のいい版画師を集めた。エスキモーの住んでいるところではどこでもそうだが、ケープ・ドーセットには、伝統にとらわれない表現豊かな芸術家や工芸家が何人もいた。

✿私とカナダ✿

初めての横断旅行

杉田 房子

最初が何でも印象深い——といわれているが、これまでに何回か訪れているカナダも、最初の横断旅行が一番強く鮮やかな記憶をいまも残している。

大西洋岸のハリファックスから太平洋岸のビクトリアまで八千キロ。あのカナダ大陸にひろがる山川、草原や湖。それは文字通りの大自然で、ある時は美しさに目を見張り、ある時は壮大さに息をのむ連続であった。

サスカチュワン州のリジャイナやマニトバ州のウイニペッグ周辺では、地平線の果てまで続く小麦畑の広大さ。これにはただただ眺めるだけで頭がからっぽになってしまったもの。このあたりは、ひようきん者の動物プレリー・ドッグがいるところとして知られ、実際、この地での一日、リスのような、そのくせモグラのように穴に駆け込む姿を見かけ、追いかけていって地に鼻をつけんばかりにしてのぞいてみたりしたものである。

同様に、何日か歩きまわった首都オタワでお会いした人々。あるパーティにお招きを受けた時には、当時まだ独身だったトルドー首相とお話をする機会に恵まれた。大阪万博から帰られたばかりだった首相が、日本でどれほどエンジョイしたか、特に京都での思い出はもうワンダフルの連続だったと目を輝かして語られたのを、昨日のことのように覚えている。首相は〝キッシング・ミニスター〟と女性には人気が高く、このパーティに同席した男性は「キッシング・ミニスターが日本女性にキスするや否や」見守っていたそうであるが、この会ではどういうわけか実証するまでにはいたらず、あとで「首相が遠慮したのか」「相手が悪かったのか」、カンカンガクガクのうるさいお話になったことといったら……。

帰国して、当時まだお元気だった大宅壮一先生にこの話をすると、「最近の日本女性は、紅毛碧眼の子供まで抱えこんで帰ってくるというのに、アンタときたらまた手ぶら。しかもキッシング・ミニスターにまでキスされずに帰ってくるとは、いよいよもうダメだなあ」と笑いとばされたものである。

列車がロッキーの山岳地帯に分け入ると、あの深い森と銀嶺の間に、どれほど多くの人と自然と動物との物語りがあるのか考えさせずにはおかない動物たちの遊び歩く姿。後年世界ハンディキャップ・スキー大会を見学に行って、サンシャインスキー場への行き帰り、降りしきる雪のなかにいろいろな野生動物を目前にした。人間を同じ仲間と思うかのように、ついていらっしゃいといわんばかりに振りかえりながら森の中に消えていく動物たち。その先の雪中には、夏の王者の熊がグッスリ冬眠しているに違いない。そういう連想も、最初の横断旅行で眺めたロッキーの印象と記憶が、あまりに強烈に残っていたからのことであった。

（旅行作家）

版画作りの第一の難関は、技術的なものだった。問題は山ほどあった。すべての物質を変えてしまう凍てつく気候、品不足、不便な交通……。暖房設備のある小さな仕事場を建て、版画を刷る手法もあみださなければ―。

われわれは、北極に合った版画作りの方法に取り組んだ。それは、何世紀もの間の日本人の知恵と、エスキモーの自由奔放な技能や夢との結晶であった。ケープ・ドーセットにやってくるエスキモーにとって、興奮と喜びの日々が続いた。全く新しい何かが起こっていた。印刷というものが、この地にもやってきたのだ。古来の狩りの時代から新しい時代へと進む、胸踊らせる画期的なできごとが起ったのだ。

われわれは、方々からエスキモーの絵を集めた。これらが版画の下絵になるのである。

まもなく、きめの細かい版石が、最もインクに反応することを発見した。彫刻だけでなく、印刷にも適していることがわかったのである。そんなに固くもなく、多孔性でもない。ちょうどいい地肌である。サクラの版木と同じぐらい彫るのが楽しく、またみがきもかんたんにできた。エスキモーは、何世紀もの間、この石を手で掘りおこし、アザラシ油のランプやつぼを作るのに使っていた。岩肌から裂けた、大きく、数インチほどの平たい石で、ほとんどの石彫にはうす過ぎたが、石版画の版石にはちょうど良かった。

版石を作るには、まず手おので彫る面を平らにして、表面がまっすぐ、なめらかになるようにみがき上げる。その平面に、薄い浮彫りの模様を刻むわけである。最上の版石の中には、長さ二フィート、厚さ六インチ、重さ百ポンド以上という、かなり大きいのもある。石には粒々がなく、どの方向にも相当正確に彫ったり刻んだりできる。

版石を切るのは、日本人が版画を創るのと同じやり方で行なう。印刷される線や部分は、なめらかな表面に残しておき、それ以外の部分はすべて切り捨てる。石が大変重いため、切断、インク塗り、印刷の際、ぶれることがない。

エスキモーは、やすりの先をかみそりの刀のように磨く方法を知っている。その腕と速さは、砥石と水ではがねを磨く専門家である日本人でも感心するほどである。

当初、謄写器は使わなかった。インクを塗った石版に、面を下にした紙をのせ、その上を指やアザラシの皮で作ったバレンで模様がきれいに写るまで軽くこするのである。はじめは、小さい単色刷りの版画を何点か作っただけであるが、やがて多色刷りの大きな版画も沢山刷れるのではないかと確信した。そこでわれわれはテストをくり返し、いろいろな版画を作ってみた。これは、ケープ・ドーセットだけでなく、北極の各地にある他のエスキモー村でも、まだ継続中だ。

エスキモーの版画家たちは、はじめ、日本でやっているように、水性の絵具を刷毛で石の表面に塗ってみた。しかし、北極がきわめて乾燥して寒く、紙の湿り気を保つことがむずかしいなど、いろいろ問題があって、この方法はうまくいかなかった。あれこれ色を使ってやってみた結果、エスキモーは柔かいゼラチンのローラーで油性の絵具をうすく塗ることにした。

石版の刷板には、「越前」、「美濃」、「出雲」の三種の和紙が理想的だった。これらのコウゾ紙は、うすくて強じんで、美しく、またかなり長持ちする。丸めて、（軽量だから）安く空輸することもできる。これは、われわれにとってありがたかった。やがて年間四千枚から五千枚の版画を輸出し、ウェスト・バフィン・エスキモー協同組合が二十五万ドルの収益を上げるようになったからである。

ケープ・ドーセットの芸術家すべてに彼らの絵を版画にする方法を教えることは、とうてい無理だったし、実際的でもなかった。第一、時間も場所もなかった。それに、技術をもち込むことによって、芸術家のかんやひらめきを損う心配もあった。

そこで、ケープ・ドーセットに住む四人の若者が、各種の手法にとり組むことになった。この四人は、秀れた版画家に育った。四人には何人かの助手がいて、重い石版を磨き、また時にはそれぞれの版画家の考えに忠実にしたがって、デザインの製版を手伝う。版画家、製版者、刷版者が分業になっているのは、ヨーロッパやアジアにおける初期の版画作りと同じである。版画家が製版も刷版も兼ねるという最近の傾向とは逆に、浮世絵のやり方にしたがっている。

どこのエスキモーにも、いくつかのエスキモー特有の視点があって、風景や物を見るとき、西洋の伝統的な見方をしない場合がある。水中の魚を見るときのように上から見る場合もあれば、空中の鳥を見るときのように下から見る場合もある。彼らは、ときどき、鳥の版画を天井にかけて眺める。背景だとか、遠近法のわずらわしい規則にとらわれず、いろいろなイメージを空間にとらえて、そのひとつひとつの持ち味を生かせるコツを、彼らは知っている。

エスキモーの芸術家は、ひとつの作品の中でひとつのことをテーマにしようとすることが多い。これらのテーマは、普通、肉体と骨に関するものである。彼らは、狩人らしく観察が豊かで、動物の体

内について詳しい。彼らは力強い動物や人間の姿を、自分たちが完全に理解しているリズムで表現し、カリブーの追い方や子供の抱き方を描いて見せる。エスキモーには、毛皮や羽根の模様、骨格、筋肉の筋、北極グマのゆったりした歩き振り、セイウチの重量、あざらしのすべすべした体、鴨が飛んでいるときのリズム、石わなに捕えられた魚の落ち着かない動きなども、全部わかっている。生活の源だからだ。

彼らは、版画を通じて伝説や昔の神話上のできごと、あるいは想い出深い旅について私たちに語り、また、はるか昔の物の見方や創り方を教えてくれる。エスキモーの芸術品や工芸品、歌や伝説には、何千年にもわたって力強い思想が流れていた。これら漂流の民がアジアからアメリカ北極にもたらし、そこで子孫へ長く残せたのは、こうした観念や思想だけだった。

石彫と同じく、版画は今日のカナダ・エスキモーにとって大事なものとなっている。めまぐるしく変化するエスキモー社会にあって、生活の糧を得る手段になっているだけではない。すべての人々が理解する言葉で語りかけてくれる版画は、生や死に対するエスキモーの考え方すべてを示してくれるからである。

エスキモーの芸術は、シャーマニズムにその根源を求めることができる。一世代前まで、これらの人々は、今でも私たちにとってほとんど不可解な、途方もない霊的世界との日常的な関り合いによって支配されていた。かつて衣服につけてあった小さい粗削りの護符は、あらかたなくなった。動物や人間をかたどった護符は、狩人とその獲物の間に一種の共感的魔力を生じさせる役割をもっていた。今日、大半の版画は、ちょうどこのような護符と同じように、古代アジアのシャーマニズムから直接そのモチーフを得ている。私たちが見る版画の絵は、こうした古い伝統を表現したものにほかならない。

エスキモー芸術の素朴でのびのびしたところは、人間の表現としては最も素朴な部類に入る。エスキモーが創造する像は多くの場合小さいが、ときおり記念碑のように見せる何かがある。エスキモーの版画や彫刻は、大人、子供、芸術家、批評家、誰にでもすぐに理解され、受け入れられる。彼らの芸術には、時と空間の大きな谷間を超越し、世界の言葉で話しかける能力がある。

日本の版画技術、そして日本人の限りない親切が、エスキモーの版画を成功させる上で果たした役割は大きい。日本人とエスキモーの両方を知っている私には、どうも、昔々、両民族は北方アジアでつながっていたのではないかという思いに駆られる。エスキモーの歌さえも、俳句に表現される日本人の繊細な感情を想い起こさせる。例えば、エスキモーはこう歌う——。

海氷の上を私は歩いた
海の歌を、そして
できたばかりの氷の大きなため息を
私は聞いたようだ
行け行け、力強い魂よ
祭りの場所に健康をもたらせ

もちろん東京は、二十年間に大きく変わった。二十年前は高い建物はなかった。自転車がどこでも見られ、トラック代わりに荷物をのせて走っているのも多かった。自動車は少なく、ほとんどがアメリカ製の大型車だった。あのような車はもうない。

今度訪日する前、私は自転車と同じように着物もほとんど姿を消した、と聞いていた。しかし、それは間違っていた。民芸館、根津美術館、京都の神社、能楽堂などで、私は着物をきている人を千人ぐらい見た。それは私が予想していた通りだった。日本は歴史と文化を重んじる国だし、国民は優秀だから、その豊かな文化遺産が消え去るのを座視することはない、と私は考えるからである。

（写真は「エスキモー版画展」より）

アジアの安定を支える日・米・加

マーク・ゲイン

アジアは、過去三分の一世紀のあいだ苦難の歴史をたどって来たが、いまほど激しい動乱の中にあったことはまずなかったといえよう。各地で軍隊が国境へむけて集結し、あるいはすでに越境するなど、戦争や戦争の脅威はたえることがない。さらに注目すべきは、しばしば突然に劇的な政治再編成がなされたことである。政治化学とでもいうべき現象により、昨日の敵が今日の友――あるいはその逆になる。しかも、そうした再編成が必ずしも平和を約束してくれるわけではないのだ。

一九七五年、当時のサイゴンから最後のGIが去ったとき、われわれは相反する二つの予言をきかされた。ある者は、ベトナムにおける共産主義の勝利により、これに国境を接する非共産主義諸国は将棋倒しになるだろうといった。いわゆるドミノ理論である。一方、アメリカのインドシナ介入に強く反対する人々は、日本と北米の一部の人々をふくめて、アメリカ軍の撤退と同時にすべてが平和と協調の状態に戻ると断言した。

だが、今となっては、どちらの陣営の予言者もまちがっていた。東南アジアの資本主義国で倒れたのは一国もないし、昨日の戦場では、平和と繁栄が訪れるどころか、今日も戦闘が続いている。ただ一つの違いは、いま共産主義国の兵士を殺しているのはアメリカ兵ではなく、べつの共産主義国の兵士だという点である。アメリカ軍撤退後に残された空間は、おたがいのあいだの政治的優位をねらう共産主義諸権力によって、すみやかに満たされたのである。

もし今日この混迷した地域に平和をもたらすことのできる要因があるとすれば、その要因は太平洋に面する共産主義諸国が作りだすものではなく、アメリカと日本とカナダで形成する、いわば「安定の三脚」が作り出すものであろう。

この安定の重要な要素の一つは、一九五一年に締結された日米安全保障条約である。この条約のもとに、アメリカは日本に核の傘をさしかけているのであるが、同条約に対しては、これまで批判も多い。しかし、この条約が、三十年間以上にわたって日本国民が平和を享受し、また急速な経済的発展をとげることのできた一因であったのは、議論の余地がない。

世界中のほかの国々が自国防衛のために巨額の経費をさいているあいだ、日本はその資源の大部分をもっぱら奇跡的経済成長の達成のために使うことができた。

しかし、この安定の三脚には、単なる軍事的側面よりはるかに重要なものがある。それは、幸い、この三か国の非軍事的利害が偶然一致しているということである。三か国のすべてが平和と秩序ある世界を欲し、げんに表裏いずれの場でもそのために努力している。三か国のすべてが民主主義を信じ、報道の自由、複数政党による自由な選挙、選挙民に対する責任といった民主主義が意味するすべてのものを是認している。そしてまた平和、通商、人間の幸福、基本的人権の保全がたがいに固く結びあっていることを信ずる点も、これにおとるものではない。そのいずれか一つでも取り去れば、そのほかのすべてが大きくなしくずしになってしまうのだ。

三か国間の関係にはいささかのひずみもない、などというのは、やや素朴にすぎるだろう。実際、それは疑惑で染まることもしばしばである。日本は、アメリカの核の傘に頼って、侵攻勢力から身を守っているが、アメリカのアジアからの物理的撤退（例えば、韓国からのアメリカ軍撤退や台湾との最近の国交断絶）によって不安感を強めている。それだけではなく、極端な危機的状況になっても、日本を保護するためにアメリカは核抑止力を行使しないのではないか、という疑念も増大している。

日米間の相互依存は非常に大きいため、その一方のいかなる行動、不作為、ないし行動意図に対する疑念でさえ、両者に政策の再検討をせまる要因になるのである。十年前、アメリカが太平洋を制していた時代には、日本の政策決定上の不確定性は非常に少なかった。だが今日、日本の防衛と変わりゆくアジアにおける日本の位置は、論争の的になっている。――日本は自己の軍事力の強化を考慮すべきであろうか。――その規模は？――いつまでに？――中国とは、もっと密接な関係を推進すべきだろうか、それともソビエトとの緊張緩和の方向をさぐるべきだろうか。――あるいはまた、日本人が諸外国のうちいちばん讃美しているようにみえる、中立国スイスの例にならうべきだろうか……。

一方、アメリカ人自身も、日本に対し彼らなりの疑惑と怒りを抱いている。対日貿易で巨額な赤字をかかえるアメリカは、日本がアメリカの商品と投資をはばむその保護貿易の壁を低くするよう希望している。それがなされないと、アメリカの貿易収支はアメリカ経済、ひいては世界経済にとって、引続き深刻な問題になろう、とアメリカは主張する。

カナダにとって、今年は対日関係における重要な年である。日加両国が、一九二九年五月二十日に完全な外交関係を樹立してから、五十周年目にあたるからである。もっとも、日本とカナダとの国交は、もちろんこのときに始まったのではない。一八八九年に最初の日本領事館がバンクーバーにひらかれ、続いて一九〇三年にはオタワに設けられている。カナダが日本に最初の商務代表を送ったのは、一八

九七年のことであった。

上述の三角関係におけるカナダの役割は独特である。カナダは、ほかの二国のような工業大国ではない。その夢と目標は、日米と比べてつつましい。国際関係におけるカナダの比重も、それほど大きくはない。カナダの役は、調停役、和解役、適切な仲介者というのが多い。したがって、「安定の三脚」に対してカナダは軍事的な貢献はしえない。カナダにできるのは、経済的、心理的な貢献である。

もちろん、そうだからといって、カナダと他の二国との関係は、いつも順調だという意味ではない。今世紀初頭、カナダの対日輸出品の内容は原材料と食糧品だった。それから一世紀近くたった今でも、カナダはなお石炭、穀物、鉱石類、木材の供給者にすぎない。雇用を創出するには製造業の育成を図る必要があるとされてから長い年月をへたのにもかかわらず、林産資源と鉱物資源の供給者というカナダの地位は変わっていないのである。

カナダは、アメリカと同じように、日本がよそ者を寄せつけぬほど高いその保護貿易の壁を低くするよう望んでいる。（カナダの対日投資額五千五百万ドルに対し、日本の対カナダ投資額が六億ドルに達し、しかもさらに増加中だということは、両国間のアンバランスのひとつの尺度となる。）

カナダとしては、日本が強く必要としている穀物や原材料の輸出を削減しようとは思っていない。ただ日本が、ウラニウムだけでなく、カンドゥ型原子炉のような工業製品や、カナダの優秀な技術を生かしたその他の商品も買ってくれるよう望んでいるだけだ。

しかしながら、貿易統計にそのような苦情はでてこない。両国間の貿易額をみると、一九七五年は三十三億ドル、一九七六年は三十九億ドル、一九七七年は四十三億ドルと、驚異的な伸びをしめしている。もちろんさらにかがやかしいのは日米間貿易の伸びで、一九七〇年には百五億ドル、一九七六年には二百五十六億ドルに達している。

マーク・ゲイン氏。「ニッポン日記」の著者として知られる。現在は「トロント・ニュース」紙のコラムニスト。

この膨大な通商は、これら三国を結びあわせるきずなの一つになっている。これはまた、ほとんど必然的に、相似た外交政策をうむ。世界貿易の一員として、三国とも平和を願い、国際的な秩序を願い、適度に自由な通商の流れを願っている。国連であれそのほかの場であれ、日本、アメリカ、カナダの三者はたがいに協調しているし、またアジア全体またはその大部分が単一勢力によって支配されないよう、その阻止に努力している。さらに、三国は、それぞれ中国とのより密接な関係を求めている。それは、中国の市場としての可能性のためでもあるし、中国がアジアの真の安定をもとめる仲間となるように希望するからでもある。

今後数年間にアジアの動乱が収束に向かう見込みは、ほとんどない。こうした状況にあって、東京、オタワ、そしてワシントンの政策決定者は、もっと想像力に富んだ政策と、いっそう密接な協力が強く求められている。

第二次世界大戦以後、日本は、その工業力と飛躍する輸出にふさわしい、ダイナミックで想像力に富む外交政策をとることなく今日に至った。日本人は、あまりにも長いあいだ、第二次世界大戦で苦しんだアジアの国々からの敵意ある反応に対する恐怖にとりつかれてきた。また、あまりにも長いあいだ、東京は、ワシントンの政策に諾々と従ってきた。

日本はこうした政策を続けるわけにはいかない。アジアにおけるアメリカの役割は変わった。衰えた、といってもいい。そこで日本は、一大非共産主義国として、アメリカの肩代わりをする方向に持っていかれるだろう。これは避けがたい運命である。そして、日本からの投資と商品の注文をえることに熱心なアジア諸国の態度から判断して、日本はこれ以上彼らが一九四〇年代の怒りを再発させるのではないかということを、心配しなくともいいだろう。同時に東京は、自分を多くの恐るべき競争者と戦う商人というよりは、おなじ心を持つ国々のコミュニティの一員として行動することを学ばねばならない。

アメリカの姿勢にも、変化が必要である。緊密な連携を云々し、さまざまな合同委員会の会合をあれこれ開いても、ワシントンはその外交あるいは防衛上の動向や意図を必ずしもよく東京に伝えていない。七〇年代初期のニクソン・ショックとおなじ事態が、ほかの分野でも何回もくりかえされている。その結果、多くの日本人は、アメリカが日本の条件や必要性にそぐわぬ武器や戦略を押しつけようとしていると考えているのだ。

逆に、カナダに対して日本人のうちのある者は、カナダをあまりにも遠く、あまりにも孤立した、あるいはあまりにも興味のない国と考えている。駐日カナダ大使館はよくその任務を果たしているし、貿易関係者もけっこう成績を上げている。それでも、カナダは偏狭になりがちだし、通商だけにしか興味を示さず、さらにはアジア情勢の重要な政治的基盤を見落としがちだという感じは、日本人の心に強く焼きついている。この問題は、たびかさなる日加閣僚会議でもまだ解決されていない。

日本とカナダとの外交関係五十周年を迎えた今年、はからずも、アジアでは新たな危機が起こり、悪化しつつある。共産主義諸国間の敵対関係は今後も続き、激化して、アジア大陸各地に多くの影響を及ぼすことはたしかである。この事態は、今後の危機に対処するための一致した政策を、「安定の三脚」諸国が緊急につくりあげることを促している。日本はアジアにおいてもっと活発な役割を演ずることをまなばねばならぬだろうし、カナダは太平洋に対してさらに眼をひらかねばならぬだろう。そしてアメリカは、いつでもよく協議し、連絡し、調整するかまえを身につけねばならぬだろう。

なぜならば、平和を維持し、アジア大陸をより秩序あるものにしなければならないからである。

皇后陛下の英語レッスン

コンスタンス・チャペル、メアリー・チャペル

私達姉妹のうち、メアリーが皇后陛下の英語のお勉強のお相手をするという光栄ある機会にめぐまれたのは、私達の日本滞在もほぼ終りに近づいた一九五〇年代でした。

生来いささか茶目っ気の抜けないメアリーも、そのころ奉職していた津田塾大学の同僚から、「官内庁があなたのことを調べているようですよ」とささやかれたときは、さすがに驚いたものでした。それまで皇后陛下の英語の御相手をしていた米国の伝統的なクェーカー教徒のローズ女史が、帰国に際してメアリーを推したとのことで、メアリーはその後しばらくして、葉山の御用邸でローズ女史と共に親しく皇后陛下にお目にかかり、皇后陛下の英語のレッスンを担当することになりました。

それからメアリーは、毎週宮内庁さしまわしの車で皇居に通いました。当時、皇居はまだ戦後の仮御所でしたが、はじめて皇居に皇后陛下を御訪ねしたとき、メアリーはふと昔風に左足をひいて膝をおるおじぎをしたものかどうかとまどい、おつきの人に相談したところ、「ローズ夫人はアメリカ人のせいか、そのような作法はされませんでした。でもあなたはカナダの方ですから」と言われて、古風な御挨拶をしたのをよく覚えています。

皇后陛下は、授業の場では非常に熱心な「生徒」であられ、メアリーは皇后陛下御自身が授業のたびに常に厳格な学習の態度を維持されたことを、深い感銘をもって記憶しています。もっとも、授業の場を離れると、皇后陛下は実におやさしい気楽なお人柄の方だということに、メアリーはすぐに気づきましたけれども。皇后陛下の英語学習への御熱心ぶりは、当時陛下と共に国内旅行の多かった中で、旅行中もメアリーに「宿題」を出すことすら求められ、英語の日記をつけられた一事にも示されています。

私達姉妹が人生の大半を日本での英語教育にささげることになったのは、いわば当然のなりゆきでした。一九世紀の後半に、アメリカのニュー・イングランド諸州やバージニア、カナダのオンタリオ州や東部沿岸諸州などの新教徒がおこした海外布教運動の一端をになって、私達の両親は前世紀末に日本に来ました。ペンシルバニアから一歩先に日本に来ていた母と、「赤毛のアン」で日本でも親しまれているカナダのプリンス・エドワード島から来た父とが日本で結婚したときは、まだカナダは日本と正式な外交関係をもっていなかったので、私達の両親は当時の東京の英国公使館で結婚式を挙げた、と聞きました。

私達は、そのころの東京で寺子屋式の英語教育を受けたあと、カナダのマウント・アリソン大学を卒業して、再び日本に帰りました。帰国直後、明治天皇の崩御と、乃木大将御夫妻の自決という、日本にとっての歴史的な出来事に遭遇したことを、はっきりと記憶しています。その十数年前、当時青山学院にいた父につれられて、ときの皇太子（大正天皇）御成婚の行列をかいまみた記憶もあります。

チャペル姉妹（日本経済新聞社提供）

私達が両親について今も誇らしく思うことは、日本の開化時代に来た外国人の多くが、ややもすると一方的にキリスト教の教義や自分たちの文化を日本の人々に与えるという高い姿勢をとった中で、比較的早く、逆に日本と日本の人々から学ぶことの多いことに気づいていたことです。母は当時の華族学校でも英語を講じましたが、おたがいに尊敬しあった関係の中での文化交流や教育の必要性を私達に教えました。

私達が東京で生れたころから、カナダ人による日本での教育文化活動はかなり具体化していました。そのころ、すでに東京（麻布）、静岡、山梨で英語教育に重点をおいた高等女子学校（東洋英和）が、カナダ人のイニシアチブで開校しています。その後、一九一〇年になって、日本の教育者や米国の教会代表者にカナダの女性教育関係者が参画して設立されたのが、今日の東京女子大学ですが、カナダ人が東京女子大の設立に際して果たした役割の大きさは、初代評議委員長がカナダ女性であったことにも、示されています。関西では、関西学院の創立にカナダ人が深い関係をもっていました。

これらのカナダ人パイオニアによる学校教育活動のほかに、野尻湖の開発で知られたノーマンさん父子等、日加文化交流に寄与された方々は、少なくありませんが、この機会にご報告したいことは、日本のYWCAの基礎を作られたミス・カウフマンのことです。

カウフマンさんは、私達姉妹よりも更にもっと永く日本で教育者としての経験をもち、YWCAと共に今日の日本の女子体育教育の普及につとめた方です。カウフマンさんは、御高令のため、今トロントの病院で神に召される日を待つ昏睡の日を送っておられます。先日私達がお見舞に行ったとき、何度か呼びかけてみましたが何の反応も示されませんでした。ところが私達と同行した日本の友人が、耳元でひとこと「せんせい」とささやいたとき、私達はカウフマンさんのお顔に明らかな反応と一瞬のほほえみが走るのをたしかに認めました。「先生」という日本語のよびかけだけが、一瞬間、彼女の意識を呼びもどしたのです。

（岩崎力氏――トロント市在住――要訳。一部は、昨年十二月十六日付日本経済新聞に掲載された。なお、元の英文テキストは当大使館の図書室に収められている。）

少年時代の想い出

ハワード・ノルマン

日本ですごした少年時代に、私たち——二つ上の姉グレースと四つ下の弟ハーバートと私——をとりまく自然が美しいものだったことを、私はありがたく思っている。長野市にあったわが家からは、四方に山々が眺められた。背後にはゲジゲジ山があり、また頂上に石切場があるのでそう名づけられたゴロゴロがあった。巨きな丸石を掘り出して山腹を下までころがすのであるが、まるで雷のような音をたてておりてくるので、その小山にそんな名前がついていたのであった。遙か後の方には戸隠が高く聳えていた。ずっと手前の西側には旭山があった。高い山ではないのだが、すぐ近くにあるので高く見えていた。ハーバートと私は一度ならずその頂きに登ったものだが、当時は道しるべがよく整っていた。平野をへだてた向うには山脈が連なっていた。麓の丘は雪がすぐなくなるが、高い峰々の雪は春おそくまで残っていて、日没の光が照している光景を私は憶えている。家には小さな庭があって、柿の木が生えていた。また山桜が一本あって、子供の木登りには申し分なかった。私たちはこの山桜を船と呼んでいた。というのも、乗っても大丈夫なほど枝が強くて、先の方へ行くと心地よく揺れるからであった。

しかし、私たちをとりわけ喜ばしたのは軽井沢だった。私たちは三人とも夏季に軽井沢で生れている。すぐ近くに離山があって、わけもなく登れた。村のメイン・ストリートは、東京から来る昔の街道にあたる碓氷峠へ通じていた。峠から低い山々の頭越しに見る眺めはすばらしかった。しかし、較べるものもない山といったら、海抜八千フィートの火山、浅間山であった。これは、それこそ本ものの山登りであったし、爆発を起している かもわからなかった。私たちの遊び仲間にヘイル家の子供たちがいた。その父親は浅間の頂上に近づいたとき爆発で死んだということだった。私たちの父は、或る日、ハーバートと私を浅間登山につれていってくれたが、それは大人たちが好んでするように夜中に登るのではなかった。

ハーバートと私は山登りも好きだったが、それより軽井沢でのおもな楽しみはテニス・コートの方にあった。年かさになるにつれて、私たちは天気が良ければほとんど毎日、午前も午後もコートに出ていた。ハーバートは二年か三年、決勝戦で毎回エドウィン・ライシャワーを負かして、年少組の選手権を得ていた。年少組で試合のできる最後の年に、エドウィンは一度だけ勝たせてくれるように頼んだが、ハーバートは容赦せず、接戦の末またも負かしてしまった。幾年もたってからのちに、エドウィンはアメリカの駐日大使になった。アメリカが東京に送ったなかで最高の大使であった。夏のあいだ、社会主義者の国会議員安部磯雄が私たちの近くに住んでいた。その子息の民雄は私たちにテニス・コートでコーチをしてくれたが、この人はのちに日本デビス・カップ選手団の一員になった。

私たちは長野で幸せな少年時代をすごした。母は、午前中、私たちに学課を教えてくれた。彼女は本当にすぐれた先生だった。

一九一六年に両親が賜暇帰国すると、私は母の郷里であるオンタリオ州ミッチルで、同年の生徒とともに第七学年に入ることができた。ハーバートは、ほんの幼いときに読み方を習い覚えたにちがいない。バンヤンの「天路歴程」の児童版を読み、いつも手から放さなかった。家に外国人の訪問客があると、ハーバートは、その本を読んだかどうかをたずねるのが習いであった。

私たち兄弟は子供部屋のとなりの小さい一室で眠った。起きるのは大てい両親より早かったが、冬は父が子供部屋に火を焚きつけてくれるまで、寝床のなかで暖かくして待っていた。

私たち三人の子供は、みんな自分がカナダ人であることを知り、それを誇りに思っていた。家族のあいだではいつも英語で話した。もっとも、台所へ入って女中さんに話しかける場合は、日本語に切り換えた。私たちは近所に住む子供たちと楽しく遊んだ。なかでも特別の友達はミツオとナミオで、かれらは私たちが毎日曜日に出席する教会の日本メソジスト派の牧師の息子たちであった。私たちはやがて讃美歌集のなかの「カナ」を覚え、何を歌っているかもわからないままに、楽しい歌声を震わせていた。母はハーバートが説教の行なわれるあいだ中、じっとしていないのを鎮めるためにキャラメルをもっていくのが常であった。

食堂にかかっている大きな色彩画は、私たちの国がどこかを思い起させてくれた。一枚の絵は、サー・アイザック・ブロック将軍がヨーク（今日のトロント）に進入する光景、もう一枚はジャック・カルティエがセント・ローレンス河を遡航する光景をあらわしていた。或る日、アメリカ人の友人たちが私たちと昼食をとっていた。シャイブリー夫人という人が、カナダはつまらない国だとかいってグレースをからかい始めた。グレースは反論しようとしたが、いじめる側の相手にはかなわなかった。彼女は黙った。そして椅子から降り、シャイブリー夫人の坐っているところまで廻っていって、小さな拳をふりあげて言った——「カナダは私の国よ。」それから彼女はワッと泣き出してしまった。グレースはそのとき五才だった。母は私たちによくこの話をしてくれたものである。両親はこれを愉快な笑い話と考えていたのである。私たちの両親は農場で大家族の一員として育ち、大変幸せであった。私たちはカナダを約束の地と考えていた。（カナダに住む）祖母や叔母、叔父たちは、私たちにとって

筆者、ハワード・ノルマン氏は、戦後初代のカナダ駐日代表E・ハーバート・ノーマンの兄に当る。戦前戦後を通じて多年日本に在住、富山高等学校、関西学院大学などで教鞭をとり、また長野県松本、塩尻で教会を開き宣教師として活躍した。一九七一年六月に隠退、帰国し、現在トロントに居住している。なお筆者の氏名の表記は氏自身の方法に従ったものである。

全く身近な存在であった。その人たちの写真を見ていたし、クリスマスが近づくとカナダから大きな小包がとどいた。小さな小包は、私たちめいめいに宛てられていた。

私は近所の男の子とパッチン（東京でいうめんこ）をして遊んだ。ハーバートもしただろうと思う。日本では今もやっているだろうか。私たちは年かさになってまわりの案内がわかるようになると、長野の市街を何の心配もなく歩いた。両親は私たちが安全なことを知っていて、もし何か事故がおきても親切な日本人が家まで連れてきてくれるとわかっていた。私が少年の頃から覚えている不愉快な事件が一つだけある。私は何人かの年上の男の子と刈り入れのすんだ田圃に立って凧あげをしていた。すると突然、一人の老人が近づいて来て私の手から凧をひったくったかと思うと、荒々しく引き裂いてしまったのだ。突然のことでもあり、恐ろしい剣幕にすっかり脅えて、私は泣き出してしまった。日本人の友達は私をなだめ慰めて、家まで送ってくれた。

その頃、長野にはカナダ人がもう一家住んでいた。それは英国教会の牧師ジャン・ウォラー博士と家族の人たちであった。息子のウィルフレッドとゴードンは私たちの年頃であった。毎週土曜日になると、私たちはお互いに訪問し合った。たとえば今週は「ウォラーの子供」たちがこちらの家へ来ると、次の週には私たちが先方へいくという風であった。この子供たちの姉のキクは私たちよりずっと年上だったが、ハーバートはこの人に憧れていて、一マイルばかりある道のりを独りでウォラー家まで訪ねていくのであった。キクはハーバートの気持をひきつけて、思うように仕向けるのが好きだった。

長野に住んでいた頃のノルマン一家。右端が筆者、一番前にいるのが弟のハーバート。（大窪愿二氏提供）

父はとても忙しい人だった。いま、手紙を書いたり説教の下準備をしているかと思うと、パジャマや歯ブラシやひげ剃り道具をひっつかみ、ローマ字聖書や何かの印刷物などを鞄に押し込んで、もう外に出かけていくのであった。

グレースと私が神戸のカナダ学校に行きはじめてからは、私たちは夏休みに北陸線を通って長野まで帰ったが、直江津のすぐ町はずれの谷浜という小さな漁村で途中下車することがよくあった。両親とハーバートが長野から来て私たちといっしょになり、美しい砂浜に近い日本式の宿屋で牧歌的な三、四日をすごしたものである。父がずっといっしょにいてくれるので、私たちは谷浜滞在のこの時が大好きだった。長野にいるとき、また軽井沢に来ているときでさえ、父はいつも福音伝道にとびまわって、いわゆる出先へ出かけていることが多かった。だが、ここ谷浜での毎日は、何の邪魔も入らなかった。私たちは泳いだり、海岸ぞいに遠くまで歩いたり、漁師がぴちぴち跳ねる銀色の魚を沢山網に入れているのを見たりした。

第一次大戦中の或る春に、伝道会の会議が長野で開かれ、評議員三、四人の宿所が私たちの家に割当てられることになった。父は、エープリル・フールの日はそれらしく祝うべきだという考えから、母が駄目だというのに耳をかさず、カスティール石けんを小さく切って朝食に出した。これはメープル・クリームというもので、朝食に甘い食べものを出すのは異例だが、カナダから着いたばかりだから、と父は言った。席についていたお客の一人は、朝食に甘いものは食べないといって断った。もう一人のお客は一切れ取って噛みついたが、あわてて水を一口飲んだ。そして、席を立って、石けんの泡をすすぎにいった。宣教師団の人びとは、そのことについて、ながいあいだ父をひやかしたものであった。「何という客のもてなし方だ。……ダニエル、今度は石けんなしにしてくれよ。」父の茶目っ気はハーバートに伝わったと見える。何年ものち、カナダ学校でのことだが、或る年のエープリル・フールの日に、ハーバートはドナルド・マクロードとチャールズ・ホームズという二人の悪友を説き伏せ、教室や寝室や食堂のある本館の屋根に登って、煙突から水を注ぎこんだからたまらない。煤が朝食の用意をしてあった食堂ばかりか、或る先生の寝室にまで流れ落ちる始末となった。学校中にその名も高い「三銃士」の喜び様はながくつづかなかった。先生の衣類のクリーニング代は父親たちが弁償しなければならないと申し渡された。これにはさすがに三人ともびっくり仰天、先非を悔いて神妙な気分になっていると、係員を手伝って食堂の掃除をする仕事につけられた。

ハーバートはカナダ学校ではあらゆるスポーツで名をあげたし、最後の学年には学内誌の編集者でもあった。学業の成績はすぐれていた。一九七七年、トロントでカナダ学校関係の旧友の会が開かれたとき、第十一、十二学年当時ハーバートを教えたことのあるレオノーラ・パーク女史は、「ハーバート・ノーマンに対する感謝と想い出のために」そして学校宛ての百ドルの小切手を私のところへ送ってよこされた。その時添えられた手紙のなかで、女史は私にこう語っていられる。「教師というのはひいきをもってはなりませんが、ハーバートは文学についていかにも鋭敏な理解力を示していましたので、かれは私の心に特別な位置を占めていました。」この小切手が口火になって、一九七八年の九月、カナダ学校に「ハーバート・ノーマン記念図書館」が設けられたのである。

逸材を輩出した カナダ学校

兵庫県三ノ宮の国鉄駅からタクシーで十五分ほど行った山の中に、尾根をけずって作った運動場と一群の建物が広がる。神戸市街を一望できるこの閑散な地にたっているのが、「カナダ学校」として知られるカナディアン・アカデミーである。

東京の西町インタナショナル・スクールなどと同じく、主に在日外国人の子供たちを教育する学校である。現在、アメリカ、カナダ、オーストラリア、インド、トルコ、日本など、およそ三十か国の生徒五百数十人が、一年から十二年まであるこの学校で学んでいる。

きわめて小規模な学校であるが、この学校が輩出した優秀な人物は数知れないほど多い。前駐日アメリカ大使のライシャワー教授もかつてここの生徒であったし、カナダ人の中では戦後、初代駐日カナダ代表をつとめた故ハーバート・ノーマン、ウェスタン・オンタリオ大学の物理学部長ドナルド・マイズナー、現北京駐在カナダ大使のアーサー・メンジス、ドミニオン天体研究所高層圏研究班主任研究員のピーター・ミルマン、プリティッシュ・コロビア大学教授ロス・マッケイなどの各氏がカナダ学校を卒業している。

カナダ学校の創立は一九一三年。カナダからA・D・マイズナー夫人を校長に招いて、先生一人、生徒十六人で発足した学校は、当初「カナダ・メソジスト・アカデミー」と呼ばれ、田んぼのど真中、関西学院旧校舎（現在の王子動物園）の近くにあった。その名称から察しられるように、学校はすでに日本で四十年も布教活動を続けていたカナダ・メソジスト伝導団が、子弟の教育のために設立したものである。最初の生徒のうち、九人がカナダ・メソジスト教団関係者の子供であった。学年の終りになると、他教団の子弟が十人、神戸在住の外国商人や領事館員の子弟が十人に増え、合計二十九人となった。そのうち、台湾、朝鮮、香港、満州出身の子供も入学して、国際色豊かになるとともに、学校の内容も充実していった。

当時の授業はオンタリオ州のカリキュラムに準じて行われた。日本語や日本の童話を教える試みも時おりなされたが、歴史や芸術などはオンタリオの学校で教える内容とほとんど変わらなかった。卒業生は、トロント大学、コペンハーゲン大学、ベルン大学、ペンシルバニア大学、その他数多くの大学が受け入れた。この種の学校の中では、生徒も教師も非常に優秀なのが揃っていて、オンタリオ州からきた教育指導主事はカナダ学校の校長宛て、次のように書いているほどである。

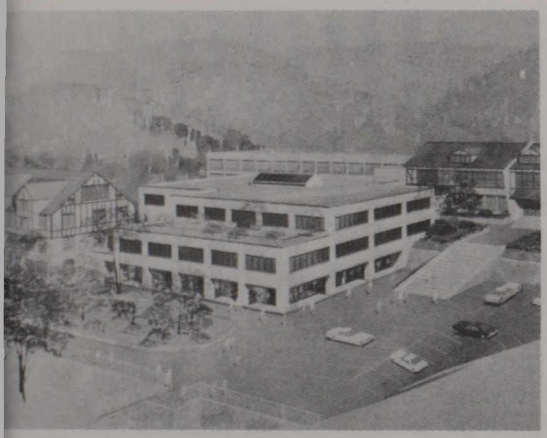
毎年毎年の試験結果を見ますと、生徒たちのすばらしい出来ばえに感心させられる一方です。これは、教師の教授力だけでなく、学校全体にやる気があるためでしょう。

野球、テニス、演劇、討論、音楽など、課外活動も盛んで、スポーツの分野では近くの学校と交流試合をすることもあった。

一九一七年、学校は「メソジスト・アカデミー」から、ただの「カナディアン・アカデミー」にかわった。サザン・プレスビテリアンなどカナダ・メソジスト教団以外の教団からの援助がふえ、メソジスト教会の占有ではなくなったからである。

やがて関東大震災で東京から神戸に移り住む人が増えたことなどが原因で、学校は手狭になった。そこで近くに土地を購入して、そこに男子寮を建てた。一九三〇年後半の生徒数は、およそ二百人であった。

しかしアジアの戦雲は急を告げ、帰国する生徒や教師がふえた。そしてとうとう一九四二年、学校は閉鎖され、財産は日本政府の管理下におかれた。しかも、古い建物は空襲で焼け落ち、残ったのは男子寮だけとなった。



学校が再開されたのは一九五三年。海外から日本に帰ってきた子供たちは、戦後、駐留軍の学校に通っていたが、カナダ合同教会とアメリカの七教団が中心になって学校が再開されると、百一人の生徒が集まった。男子寮と、占領軍が兵士用に建てた運動用具納庫が、教室に早がわりした。教師も足りなかったが、宣教師が時間を割いて教えてくれた。

一九五六年、カナダ学校は社団法人カナダ・キリスト教布教団から学校法人カナディアン・アカデミーに移管された。理事会はアメリカ側が多数を占めたが、校名は長い間親しまれてきたカナダ学校を、そのまま残すことになった。

ほとんどゼロから再出発したカナダ学校であったが、旧校地の処分、松下電器の援助、各教団の助成などに支えられて学校施設は次々と整備されていった。

今では、小学校校舎、中等学校校舎、体育館兼講堂、工芸美術館（ハーバート・ノーマン記念図書館、音楽施設、美術室などを擁している）、寮――と、揃っている。授業内容も日本史や日本語が加えられ、また課外活動や工場、博物館、名所旧跡などへの見学旅行も盛んだ。生徒の成績もよく、一九七六年における卒業生の平均点は五百三十三対四百七十と、米国の学校での平均点をはるかに上回っていた。

最近、カナダ学校も対外的に知られるようになった。歌舞伎公演のためである。一昨年は、大阪だけでなく東京にも〝遠征〟して好評を得た。

カナダ学校――日本とカナダを結ぶ、もうひとつのきずなである。

日本のカナダ研究
—その現状と課題

ジェラルド・ライト

ここ数年、日本におけるカナダ研究は大きな進展を見た。この進展を強力に促したのは、いくつかの幸運な事情が重なったためであった。まず第一に、日本の研究者が大学の国際的方向を助長強化する方途を探し求めていたことがあげられる。そもそも日本の大学の国際志向は、歴史的に見れば慶応大学の創立者福沢諭吉にまでさかのぼり、古い歴史と伝統をもっているが、近年、日本が経済的にも政治的にも世界の大国として国際舞台に登場してくるにつれ、大学の国際的方向を求める声にも新たな緊急性が加わったのである。

第二の事情としては、一九六〇年代後半から七〇年代初期にかけて、カナダがナショナリズムの波を深くくぐり抜けたことがあげられる。その影響は今でもまだ感じとれるほどだ。そこで突如として、独自の文化や教育制度を保存することが要請されただけでなく、カナダの経験を徹底的に再検討し、そして国民史上初めてその独自性と意義を積極的に証価することが肝要とされた。カナダの人間的、社会的、政治的特徴がもつ固有の価値と重要性に対し、カナダ国民がこのように確信を強めていったことが、国境をこえて、外国におけるカナダ研究を促進させる引き金となったのである。

以上のように両国の状況が重なり合って、かなり多数のカナダ研究者が日本に輩出し、日本カナダ学会も結成され、研究者の努力と、カナダ政府からの技術的財政的援助とがうまく結びついて、これまでのところ事は成功裡に進んでいる。すでにいろいろな成果が得られているが、一九七九年は、日本カナダ学会の評論誌発刊の予定や、日加関係を討議する重要会議の八月開催など、一層の成果が期待されている。筆者はこの六か月間、日本の三つの大学でカナダの政治と外交政策について講義を行なってきたが、日本の学生と教師が示したすさまじいほどのエネルギーにいたく感銘せざるをえなかった。私の受持ったあるクラスなどは、同窓会を持とうと言い出すほどであった。

日本の教壇に立ってみて、筆者は三つのことを強く心に感じた。まず第一に、日本の学生にカナダのことを教えるのは、最初考えられていたよりもずっと難しく専門的な仕事である。少なくとも私自身の専門分野に関する限り、日加両国の政治ならびに社会はあまりに類似点が少なく、カナダが抱える問題の深さと重大さを日本の学生に理解させるのは容易なことではないということだ。たとえば私が受持った学生たちは、ケベック州民の不満に関してはきわめて熱心に理解しようとする一方、カナダ連邦が分裂する可能性については頑として認めようとしない。そんなとき私は、この問題をめぐって相対立するカナダ人の感情の激しさを、果して学生たちにうまく教えられたかどうか心配になることがある。それだけでなく、日本の学生が自国の政治に対して普通抱いている偏見にみちた態度のおかげで、カナダの政治と政治家に対しても冷笑的かつ悲観的な評価をしがちであることを知り、大いにショックを受けたのも事実だ。もちろん、学生たちのそのような結論は正しいのかもしれない。にもかかわらず、私たちは可能なかぎりかれらの見方にひそむ偏見を取り除こうとしなければならない。

第二に私が気づいたこと——それは、日本の大学で行なわれている他の教育・研究分野とカナダ関係の教科をうまく融合させるには、まだまだやらなければならない事がたくさんあるということだ。この分野の教育研究を育成することが大学本来の目的に直接役立つのだということを、日本の大学の為政者たちに確信してもらわなければ、カナダ研究の将来は絶望的といわざるをえまい。たとえば、両国が共通して直面している問題、だがそれへの対処の仕方が必ずしも同じでない問題が多数存在する。そのような問題を比較研究することの知的および実践的なメリットを、日本の大学人に示す必要がある。

最後に、私を迎えてくれた日本の方々にはせんえつながら、日本の方々が十分果たすことができる特に貴重な役割を提案したいと思う。すなわち、カナダ人が自国および自国民に対してもっと正直に、もっと洞察力に富むようになる手助けをしてほしいということだ。日本の人々はその点で多くの事をすることができると私は思う。この点では日本の学者は途方もなく有利な立場にある。結局のところ、日本の学者はカナダ人とは全く異なった価値と基準でカナダの問題を評価できるからだ。あるいはさらに重要なことだが、日本ではカナダを〝全体〟として眺めることができる。これはカナダ人には実際上全く無理なことである。〝カナダの〟という言葉でくくられる多くの社会運動、政治運動、あるいは知的運動が、その起源、目標、支持者などの点で、実は全くセクショナルなものであることを考えてみていただきたい。まだある。一九六七年の万国博覧会の成功に気をよくして以来、カナダ国民は少々うぬぼれが過ぎているようであるから、ここらで外国からの知的な批判や刺激を受けるのも悪くはあるまい。古今東西、多くの社会が、外部からの烱眼な観察により大いに恩恵を受けてきた。アメリカ人でトックビル以上のアメリカ観察をしえた人がいるだろうか。かくして日本のカナダ研究者がなすべき重要な課題が浮かび上ってくる。日本の研究者は、もはや傍聴席に座っている必要はない。一刻も早く自らオーケストラに加わり、自ら演奏をしていただきたいと思っている。（ライト氏は、三月に日本滞在を終え、ドナー基金＝トロント＝へ帰任した）

カナダ研究の邦語文献

東京大学教養学部
アメリカ研究資料センター助教授　大原　祐子

日本カナダ学会が、カナダ大使館よりカナダ研究に関する邦語文献目録の作成を求められたのは、昨年の初夏のことであった。対象を社会科学、人文科学の分野にしぼり、爾来約半年あまり、運営委員会が依頼した十一名の学会員（飯沢英昭、伊藤勝美、大熊忠之、岡本民夫、木村和男、国武輝久、竹中豊、千田明夫、原口邦紘、南良成の諸氏と大原）がこの作業にあたり、このほど完璧にはほど遠いものながら、当初に目的としたところをほぼ達成した。収集した文献カード数は千二百点余り（単行書四百十一点、論文八百三十八点）にのぼった。もとより原則は、戦前、戦後を問わず新聞記事以外、カナダについての日本語による研究はすべて、と広範囲に規定したつもりであったが、戦前の研究は非常に少なかった。

この文献収集の最大の問題は、短期間に行なった作業であったので系統的に収集することが難しく、作業に従事した研究者の個性により、粗密の差が顕著であるということであろう。しかし、専攻分野を異にした十一人の研究者が文献を収集したので、少数の人間が例えば『雑誌記事索引』や『出版年鑑』を渉猟したのでは追い付かない、多方面にわたるものを収集し得たと思う。

この文献目録はカナダ大使館から印刷の予定と聞いているが、この作業に従事してさまざまな感想をもつに至った日本カナダ学会でも、二、三年先には網羅的な、例えば新聞記事、卒業論文まで含んだカナダ研究についての文献目録を、学会の事業として刊行したいという声が出ている。関心のある方々からのご意見、ご批判が伺えれば幸いである。

さて集まった文献名を、原口氏の献身的な御協力を得て整理し、大雑把に項目分けしたところ、何といっても「経済」の項が一番多く、三百十五点（単行書百六点、論文二百九点）にのぼった。これに「国際経済」（三十二点）、「労働」（四十六点）、「社会保障」（三十七点）、「運輸・通信」（二十一点）を加えると、全体の約三十七パーセントが経済関係ということになる。次に多いのが教育を含めた「社会」で百五十三点、以下順にあげると、「日系移民」百二十九点、カナダ紀行を含めいわゆる「カナダ一般」を論じたもの百二十六点、「政治」百二十二点、「日加関係」八十五点、「文学」七十六点、「歴史」七十一点、「地理」三十二点、という次第であった。それぞれの項目を検討するならば、日本におけるカナダ研究の一端が明らかになる筈であるが、ここでは「日加関係」の項目に収録されている文献について眺めてみたい。

まず単行書を一覧してみると、日本とカナダの関係について、例えば日米関係の研究にみられるような、いかなる視点からのものにせよ総合的に論じたものが、未だに全く無いことに気が付く。二十三点の単行書の傾向を代表するものは『日本経済とカナダ』（キース・A・J・ヘク著）であり、『日加経済関係の諸問題』（経団連事務局編）や『アジア・太平洋と日本―豪州、カナダと日本経済』（伊東敬著）であって、『加奈陀メソヂスト日本傳道概史』（倉長巍編）に類する研究は、もっと関心が払われてよいテーマであるにも拘らず、一九三七年刊のこの一書があげられるだけである。

一方六十二点にのぼる論文の方は極めてバラエティに富み、今後研究書に発展する礎となるであろうものも少なくない。ここでも量において多いのは日加経済関係であり、とくに西部カナダが、「木材と鉱物資源の豊庫―近づく西部カナダと日本」（斉藤文則『世界週報』五〇―八）や、「カナダ西部における資源開発と日本の関係」（三橋節子『地理』一一〇―八）に示されるように、ジャーナリズムと学界の双方から深い関心の払われている点が印象的であった。日加間の政治問題には経済に寄せるほどの関心は示されておらず、カナダの中国承認問題と日本を論じた二点の論文（伊藤喜久蔵「カナダの中共承認と日本の立場」『自由』一二―一二、渡辺一郎「中加の国交樹立と日本」『公明』九八）が目についた程度である。

日加関係について、ある意味で本質をつく情報を提供しているものは、「カナダにおける日本研究の現況」（馬場伸也『学術月報』三〇―一〇）と、「日本のカナダ研究―素描」（大熊忠之『国際問題』二一三）の二論文であろう。扱い方は全く異なるこの両論文を読んで受けるある種のショックは、カナダの日本研究とくらべた日本のカナダ研究の、少なくとも規模における狭少さである。大熊氏も指摘している通り、日本人がカナダを知ることがいかに限られているか、が浮き彫りにされているといっても過言ではない。

そうした中で、日加の歴史的関係の展開については、「占領とノーマン」（馬場伸也『思想』六三四）や「日本、カナダ関係の一考察―『ルミュー協約』改訂問題」（原口邦紘『国際政治』五八）のように、豊富に原資料を駆使して日本とカナダの一様ならざる関わりあい方を明らかにする研究のあることは、非常に重要である。こうしたアプローチの研究を重ねること以外に、日加関係の真の姿をとらえることはできないのではなかろうか。同じような観点からするならば、本紙に掲載された、猿谷要「カナダと新渡戸稲造」（一一二）、大窪愿二「伊藤博文のカナダ旅行」（「トルドー首相来日特集号」）も短かいエッセイであるが興味深い。

単行書の項でも言及したが、日本とカナダの深い関係の一つにカナダ・メソジストによる日本伝道の歴史がある。この問題を扱った二論文（手塚竜磨「カナダ・メソジスト・ミッションの教育活動―女子教育を中心として―」『英学史研究』一九七二年四月号、馬場伸也「日加文化交渉史序説―カナダ・メソジスト・ミッションと明治の思想家達」『国際関係学研究』三）は、一般に知られることの少ない日加の文化交流を論じたものとして重要である。

以上のように、日加関係についての邦語研究にみられる、テーマがバラエティに富み、かつモノグラフも輩出してきているが、総合的な研究が出るにはまだ日時を必要とする、といった感想は、他の分野における邦語によるカナダ研究に共通するもののようである。カナダ研究は日本において、今後の研究者にとって豊富な鉱脈を有する研究分野といえよう。

日加関係年表

1854　3隻の日本船がブリティッシュ・コロンビア沖で難破。
73　最初のカナダ人宣教師が来日。
77　永野萬蔵がカナダに到着。カナダにおける最初の日本人移住者。
84　東洋英和女学院がカナダ統一教会のカートウェル夫人によって創設。
89　日本政府、バンクーバーに領事館を開設。
日加郵便為替協定を締結。
1903　オタワに日本総領事館開設。
29　相互に公使館を開設。
41. 12.　日本の第2次世界大戦参戦によって、外交関係が断絶。
46. 7.　カナダ、東京にハーバート・ノーマン氏を首席とする代表部を設置。
52. 4.　サンフランシスコ平和条約の成立により、復交。公使館は大使館に昇格。
初代駐日大使に前漁業大臣R.E.メイヒュー氏、初代駐加大使に井口貞夫氏が赴任。
5.　東京でカナダ、日本、米国間の北太平洋漁業条約に調印。
53. 4.　皇太子殿下がエリザベス女王戴冠式ご臨席の途中、オタワを親善訪問。
54. 3.　ルイ・サンローラン首相が訪日。
3.　オタワで日加通商協定に調印。
9.　吉田首相が外務大臣同伴で訪加。
55. 1.　オタワで日加航空協定に調印。
6.　河野一郎農林大臣が訪加。9月に再訪。
58. 9.　藤山愛一郎外務大臣が訪加。
59. 7.　オタワで日加原子力平和利用協定に調印。
9.　佐藤栄作大蔵大臣が訪加。
60. 1.　岸信介総理大臣および藤山愛一郎外務大臣が訪加。
10.　小坂善太郎外務大臣が訪加。
61. 6.　池田勇人総理大臣と小坂善太郎外務大臣が訪加。日加閣僚委員会の創設を決定。
10.　ディーフェンベーカー首相が来日。
63. 1.　東京で第1回日加閣僚委員会会議を開催。カナダ側の首席代表はドナルド・フレミング大蔵大臣。
9.　オタワで第2回日加閣僚会議。日本側首席代表は田中角栄大蔵大臣。
64. 4.　カナダのトレンブレイ移民大臣が来日。
9.　東京で第3回日加閣僚会議。カナダ側首席代表はポール・マーチン外務大臣。
9.　東京で2重課税協定に調印。
10.　日本から経済使節団(団長稲山嘉寛氏)が訪加。
66. 9.　東京にカナダ大使館査証部とカナダ政府観光局を開設。
10.　オタワで第4回日加閣僚会議。日本側首席代表は椎名悦三郎外務大臣。
10.　カナダ、日本、国際原子力機関の間で原子力平和利用三者協定に調印。同協定は1969年7月、ウィーンで改訂。
67. 7.　世界万博の開会式に天皇陛下の名代として出席するため、高松宮殿下および同妃殿下が訪加。
7.　三木武夫外務大臣が訪加。
1969. 4.　東京で第5回日加閣僚会議。カナダ側首席代表はシャープ外務大臣。
70. 3.　ジャン・ルック・ペパン通産大臣が来日。
4.　エドガー・ペンソン大蔵大臣が来日。
5.　ピエール・トルドー首相が来日、万博カナダ・デーの式典に参加。
5.　ブリティッシュ・コロンビア州のベネット首相が来日。
6.　カナダ連邦議員団(団長ジャン・ポール・デシャテレ上院議長)が来日。
6.　オンタリオ州のジョン・ロバーツ首相が来日。
9.　ブリティッシュ・コロンビア州のジョン・ニコルソン副首相が来日。
11.　J.J.グリーン・エネルギー大臣が来日。
71. 6.　日本から民間経済使節団（団長藤野忠次郎・三菱商事会長）が訪加。
8.　日本から国会議員団（団長船田中・衆議院議長）が訪加。
9.　トロントで第6回日加閣僚会議。日本側首席代表は福田赳夫外務大臣。
10.　J.J.グリーン・エネルギー大臣が来日。
11.　カナダからカナダ小麦局担当大臣、オットー・ラング氏が来日。
72. 1.　カナダ経済使節団（団長ジャン・ルック・ペパン通産大臣）が来日。
3.　カナダ科学技術調査使節団（団長アレステア・ギレスピー科学技術大臣）が来日。
9.　アルバータ州のピーター・ローヒード首相が来日。
73. 3.　ミッチェル・シャープ外務大臣が来日。9月に再訪。
9.　ギレスピー通産大臣、ガット東京ラウンドに出席のため来日。
10.　トルドー首相夫妻、非公式に来日。
10.　桜内農林大臣が訪加。
74. 4.　トルドー、田中両首相がパリで会談。
4.　ケベック州政府派遣の経済使節団（団長ガイ・サンピエール通産大臣）が来日。
4.　ブリティッシュ・コロンビア州のバレット首相が来日。
9.　田中角栄総理大臣が訪加。
75. 6.　東京で第7回日加閣僚会議。カナダ側首席代表はアラン・マケッカン外務大臣。
9.　マケッカン外務大臣、国連総会で日本の外務大臣と会談。
10.　ニュー・ブランズウィック州のハットフィールド首相が来日。
10.　チャールズ・ドルリー科学技術大臣兼公共事業大臣が来日。
11.　デクストラーゼ・カナダ統合軍参謀長が日本の幕僚会議議長と協議のため来日。
11.　東京で上級事務レベル会議が両国の経済協力を話合う。
12.　マケッカン外務大臣、宮沢外務大臣と国際経済協力会議で会談。
76. 2.　在日カナダ実業人協会が設立される。
3.　日本で日加議員連盟が結成される。
4.　カナダ連邦議員団（団長ルノー・ラポワント上院議長およびジェームズ・ジェローム下院議長）が来日、友好を深める。
5.　サスカチュワン州のアラン・ブレイクニー首相が来日。
6.　トルドー、三木両首相、プエルトリコにおける経済首脳会議の合い間に協議。
7.　河野謙三参議院議長が訪加。
9.　ニューヨークで国連事項に関する第3回年次日加協議。
10.　トルドー首相が来日。日加経済協力大綱および日加文化協定に調印。
11.　貿易・投資状況を視察するため、有力経済使節団が訪加。
12.　ブリティッシュ・コロンビア州のフィリップス経済開発大臣が来日。
77. 4.　ニュー・ブランズウィック州のガービー財務大臣が来日。
4.　ジョン・ロバーツ文化大臣が来日。
6.　栗栖弘臣陸上幕僚長が訪加。
6.　日加合同経済委員会第1回会議がバンクーバーで開かれ、ジェイミソン、鳩山両外務大臣が会談。
9.　ハットフィールド首相を団長とするニュー・ブランズウィック州政府使節団が円建て債券発行のため来日。ガービー財務大臣も同行。
9.　ウィリアム・デイビス首相を団長とするオンタリオ州政府使節団が来日。ベネット通産・観光大臣およびニューマン農業大臣も同行。
9.　日本の国会議員団(団長井出氏)が訪加。
10.　オットー・ラング運輸大臣が来日。
11.　サスカチュワン鉱業開発公社使節団(団長J.R.メッサー天然資源大臣)が来日。
11.　日本カナダ研究会が発足。
78. 1.　マトニバ州が日本で円債を発行。
国防大学研修団が来日。
ジェイミソン外務大臣が公式訪問。トロント交響楽団がNHKホールで公演。
3.　グエイ税務大臣が来日。
4.　日加郵便小包協定に調印。
5.　下田で第1回日加経済人会議。
7.　国会議員代表団（団長・前尾繁三郎前衆議院議長）が訪加。
7.　新駐加大使に須磨未千秋氏が就任。
8.　ジャック・ホーナー通商産業大臣が来日。日加原子力協定議定書に調印。
9.　ブリティッシュ・コロンビア州から経済使節団。
太平洋沿岸インディアンの工芸展が札幌で開幕。
10.　トロントから貿易使節団が来日。
11.　世界野生生物基金のためのエスキモー彫刻展をカナダ大使館で開催。
12.　ブリティッシュ・コロンビア州から経済使節団が来日。
79. 1.　ジョー・クラーク進歩保守党党首が来日。
1.　池袋サンシャイン・シティのワールド・インポート・マートにカナダ・トレード・センターが開設。
2.　アルバータ現代美術展が東京で開幕。
3.　東京で第2回日加合同経済会議。

■トピックス

五月二十二日に総選挙 統一、経済が争点に

トルドー首相は、三月末、次の総選挙を五月二十二日に行うと発表した。これにより、一九六三年以来政権を握っている自由党と野党の進歩保守党（ジョー・クラーク党首）が、五年ぶりに激しい選挙戦をくり広げることになった。

連邦下院における現在の勢力分布は、議席総数二百六十四のうち、自由党百三十六、進歩保守党九十七、新民主党十七、社会信用党九、無所属五。自由党議席のうち、四十九議席はオンタリオ州、六十一議席はケベック州が占め（全体のおよそ八十パーセント）、また、進歩保守党はオンタリオ州（三十一議席）とアルバータなどの西部諸州を、地盤にしている。

最近の世論調査によると、自由党と進歩保守党が、ほとんど五分五分の形勢になっており、場合によっては少数党政権が誕生する可能性もあるといわれる。一九七二年の選挙では、与野党の議席数が自由党百九、進歩保守党百七と大きく接近し、単独過半数をとれなかった自由党内閣は、政権維持に新民主党（エドワード・ブロードベント党首）の助けを借りざるをえなかった、という前例がある。

カナダは、今、ケベック分離問題をかかえ、それを乗り切るためにも強固な安定政権の誕生が期待されている。トルドー首相も、「カナダの現状からみて、国民はどちらかの党に過半数の議席を与えて欲しい」と述べている。今回の選挙から議席数は十八ふえて二百八十二になるため、過半数には百四十二議席が必要。

選挙の主な争点は、この国家統一問題と、インフレ（昨年度は九・二パーセント）と失業（同七・九パーセント）問題を中心とする経済問題。統一問題については、ケベック分離問題だけにとどまらず、エネルギー開発などに関する連邦と州の権限分割も論議されよう。

なお、今度の選挙で自由党が勝てば、一九六八年四月以来首相の地位にあるトルドー氏（五十九才）が、引続き政権を担当することになる。進歩保守党が勝てば、ジョー・クラーク氏（三十九才）が首相の座につく。

下院の拡大、連邦院の設置など カナダ統一調査委員会が勧告

一九七七年七月に設立された「カナダ統一に関する調査委員会」は、一月末、一連の勧告をまとめた報告書を連邦政府に提出した。その主な内容は、要旨次の通り。

一、下院議員を六十議席増やす。各党が選挙前に作成したリストから、選挙で得た票数に応じて選ぶものとする。

一、フランス語および英語に関する権利を新憲法で確認する。

一、上院の代わりに連邦院をおく。連邦院は、州政府によって任命された六十人の議員で構成される。連邦院は州権を侵害する措置を遅らせたり、阻止することができる。

一、ケベック州民は、独立賛成を含め、外部の干渉なしに自らの政治的将来を決定する権利を与えられるべきである。

一、立憲君主制の維持。

一、最高裁判所判事を現在の九人から十一人に増やし、州権、連邦権、憲法訴訟の三部門にわける。

一、憲法改正は、連邦両院と国民投票による承認をもって行う。

一、連邦と州の権限配分。

一、文化の分野における特権をケベックに認める。他の諸州はこれらの特権を行使してもよいし、連邦政府に委ねてもよい。

経済的でサビに強い小型車

モントリオール・ポリテクニック・スクールの学生二人が、このほど燃料消費が少なく、コンパクトで、サビに強い小型車を開発した。この車（写真）は最高速度が時速九十キロで、わずか五秒間で時速ゼロから八十キロに加速できる性能をもつという。学校としては、市販はまだ考えていない。

アン・マレーにグラミー賞 オスカー・ピーターソンにも

レコード界のアカデミー賞といわれるグラミー賞の最優秀女性歌手賞が、「ユー・ニーディド・ミー」（辛い別れ）で大ヒットを飛ばしたカナダのアン・マレーに輝いた。彼女は、七五年にも、カントリー・ウェスタン部門でグラミー最優秀歌手賞に選ばれている。一昨年来日し、各地で公演した。

今年は、カナダからもう一人、オスカー・ピーターソンもジャズ独奏部門でグラミー賞を受けた。

編集後記

●日加国交五十周年特集号が、ようやく出来上りました。今号は初めての五十二ページで、単行本並みの分量です。執筆者諸氏ならびに写真などでご協力下さった方々に、深く感謝いたします。

●内容は、ご覧のように、マーラー初代公使の任命のいきさつや公使館建設にまつわるエピソード、日加関係史、日加貿易の変遷、日加協会の歩み、アジアの安定と日米加の役割、エスキモーと日本版画など、多岐多様にわたっています。いずれも日加関係の発展をいろいろな方面からとらえており、興味深く読んでいただけることと思います。

●さらに、カナダとかかわりの深い日本人と、日本とかかわりの深いカナダ人に、それぞれの想い出や感想を書いていただいた「私とカナダ」「私と日本」は、両国の深いきずなをよく現わしています。

●大原氏が述べておりますように、日本語で書かれたカナダ関係の著書や論文の目録が、近く大使館から発行されます。今後の日加関係の発展に大きく資するものと期待しています。

（吉田健正）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部